

---

# **とある魔術の頂上戦争**

九条 水菜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある魔術の頂上戦争

### 【Zコード】

Z5727X

### 【作者名】

九条 水菜

### 【あらすじ】

9月28日…上条当麻はマンホールに落ちた。そして辿りついたところはドブ臭い下水道……ではなくて、『白ひげ海賊団』の船だった。しかも、これからエースの処刑を止めるためにマリンフォードへと向かう途中の……

## プロローグ（前書き）

新連載です！不定期更新ですがよろしくお願いします。

もし、誤字脱字、誤りがあつたら、「」指摘してくださるとうれしいです。

## プロローグ

9月28日

そう……その日も上条当麻は、朝から「不幸」だつたと断言できた。

朝から同居人のシスターさんに頭を噛まれ（彼女の好きなアニメの録画を消してしまったからだが……）

学校へ行く途中で2回くらい車と衝突しそうになり（焦って信号無視をしたからだが……）

自販機に2000円飲み込まれたり（よく考えてみると、以前もこの自販機に飲まれた気がする……）

だが、それだけだったのなら、上条当麻の許容範囲内だつただろ？  
事実、彼も、この時までは「仕方ない」と諦めていた。

そう……この時までは……

そのあと彼は、家……と言つても学生寮だが……に一応、帰宅。  
制服のまま夕食のしたくをしている。

「ねえ、とうま、とうま……とうまいでは……！」

居間で声を張り上げているのは、同居人の禁書田録インテックスとこの名のシスター。

『シスターさんと高校生が同居しているつじうこうシユチユーレーシヨン！？』

つと思うだらうし、説明がほしいに違いないが……それは上条当麻自身も言えることなので、省かせてもらひ。

そう……実は、彼には夏休み上旬以前の記憶がない。何故、記憶が飛ぶような事態になつたのか分からないが、ともかくにも、インデックスというシスターの少女と出会つた時の記憶がないのだ。だから、どうして彼女が、この家に居候しているのか分からぬ。

「とうまーねえ聞いてるー？」もしかして、シカトつていうやつかも！？」

「はいはい、行きますよ～。なんですか～？」

火を止めて上条が居間へ向かうと、インデックスは雑誌に釘付けだった。

「ねえねえ、とうまーーーこれ見てよーーー」

「ん？……なんだ？」

「見て分からないの？海賊の話だよーーー」

「海賊？…ああ…ワンピースね…」

めちゃくちゃ最近はやつてゐる漫画…少しなら上条も内容を知つていた。

「あのね、『』の漫画って…」

「はいはい…どうせ『悪魔の実』はナンタラの魔術の応用で生み出されたもの』とか『ワンピースの正体はウンタラ鍊金術の応用』みたいなことだろ?」「…どうま～～魔術を馬鹿にしてるでしょ…」

冷めた目をするインテックス。

「馬鹿になんてしてしませんよ。……ん?」

ポケットの中の携帯が音を立てた。

「ん?…メール?」

差出人は不明…

「『上条当麻…今からアトの『ワンピ』にすぐ来られたし』?誰だこれ?  
…まあ、行かないとい、さらに不幸になつたら嫌だしな:  
わざわざインテックス。ちょっと出かけてくる。」

「どうま。どこか行くなら、お菓子買ってほしにかも。  
スフィンクスが勝手に食べかけつて…」

見てみると、ちらしきものでズタズタに引き裂かれたお菓子の袋が散在していた。

「はいはい…買つてきますよ。」

上条は外に出た。

で、コンビニの前まで来たわけだが、誰もいない…しかたないので  
先にインテックスの要件を済ませることにした。

「…つたく…だれもいねえな…帰るか…」

コンビニの袋を下げて歩き始める…だが…

足が地面に着かない…?

「う…うわあああああああ…!…!…!…!…!

上条当麻はマンホールに落ちた…ビルもでも…ビルもでも深いマン  
ホールに…

## 第1話・マンホールを抜けるといいな……

……上条当麻は、マンホールの中をダイビングしていた。

背中から落ちてるので、下の様子が全く見えないのが、怖い。た  
だ、黒い空間だけが、上条の周りにあつた。

しかし、いつまでも落下しているわけがない。これはマンホール。  
いつかは下水道にたどり着くはずだ。

……いずれ来るであろう衝撃を予想し、思わず上条は田をつむつた。

バツシャーン！――！

やつくりと田を開けると、もやで視界が悪いが、一面茶色の世界だ  
った。

……そしてこの時…上条は、さつきしない意識の中で、妙な事に  
気が付いた。

自分は、どこにでもあるマンホールに落ちた。といつて、辿り  
つく先は底冷えするような下水のはず。

なのに、今…自分が浮かんでいるのは水…じゃなくて、ちゅうどい感じのお湯……

下水道といえば、誰もが口元を覆うドブ臭さで充満しているはずなのに、鼻に入つてるのは、どことなく甘い匂いだった。  
それ以前に、下水道なら天井が茶色のわけがない…もっと…汚れた灰色のはずだ。

上条は、そつと立ち上がった。……幸いなことに、お湯は浅いよう  
で、ちゃんと足の裏が地面についた。

お湯は自分のへソの位置までしかない。  
もやで視界が悪い中、ゆっくりあたりを見わたす。

見ると、悪い視界の向こうで、何人かの人影が身を寄せ合っている  
のが見えた。

「あのー、すみません。ちょっと尋ねたいことが…」

口口まで口に出した時、上条はあることに気が付いた。

まず、人影が恥じらうような仕草をしているところ…

その次に、その人たち全員が、何も身にまとっていない…といふこと…

最後にその人影が…

全員女であつたことだ。

突然、落ちてきた人物が男であると分かつたからなのだろうか？とにかく、突然の出来事に放心状態だった彼女らは金切り声を上げると、桶やら石鹼やらを投げてきた。

「いや、待ってください！…すぐ出てここんで…。」

「十二アルゴン鉱業株式会社」

「恥を知りなさい！！」

五体満足で帰れると思つた。 大體違しよう!!

彼らは攻撃の手を止めなかつた。

むしろ、攻撃力や迫力が増している気がした。

「不幸だ！！！」

上条は石鹼やら桶やらシャンプーやリンスのボトルを、かわしながら逃げるよつこ風呂場から出た。

(なんで、マンホールの下に銭湯が広がっているんだ！？  
いや……そんなことよりも、まずは上を田指そつ……地上へ戻らなくて  
はー！)

上条は、ひたすら走った。途中でなんか人とすれ違った気がするが、  
今はそんなところではない。  
ただひたすら上を田指した。

「出口か！？」

階段を上り切り、扉を開けると、確かにそこは外だった。

「……なにこれ？」

耳に入つてくるのは波の音……だけ……。

そう……たどり着いたのは地上ではなく……海の上……正確に言へば、ど  
こかの船の上だった。

## 第2話 空から落ちてきた少女

上からは眩し過ぎる太陽が肌をやく。…頬を撫でる風には潮の香りが混ざっていた。

リゾート地に早変わりできる気候の中で、上条当麻は縄で縛られていた。

周りにいるオッサンたちの気迫に負けなによつて、上条は精いっぱい声を張り上げる。

「ちっさから言つてるじゃないですか！」

マンホールを抜けたら何故か女湯で、人畜無害な上条さんは、あわてて地上に戻るために出たら何故か甲板で船の上だつたんですね！…！」

彼に『この場から逃げる』ところ考えが全くなかつたので、正直に本当のことを話す。

上条はじままで…といつても記憶にある限り、かなり喧嘩をしている。

元々の不幸体质のせいで武装したスキルアウトや能力者の不良の喧

喧嘩に頻繁に巻き込まれるため、その経験上ある程度は喧嘩慣れしており打たれ強く体力もそれなりに自信がある。

戦闘スタイルも、右手に宿る力『幻想殺し』で相手の能力を無効にしてから、近接格闘に持ち込んで直接拳を叩きこむ事を基本戦術にしていて、この方法で、学園都市のNO・1の実力者を倒したことがある。

しかし、それは相手が能力に頼り切っていて、基礎的な身体能力が低いからだからだ。

つまり、目の前にいる人たちのように、筋肉が凄くて見るからに『強い』人にかなうわけがない。

武器でもあれば、話が変わるかもしれないが、彼が今持っているものは、菓子の入った袋だけだった。

到底、武器と言える代物ではない。

だから、正直に話して分かつてもううほかなかつた。

「ホントかよい？」

「本當ですかー！」

「こんないつ殺されるかどうか分からない状態で嘘がつけるわけない

じゃないですか！！

だいだい俺は『霸氣』ないし『悪魔の実の能力者』じゃない、普通の『彼女いな歴』年齢の高校生ですよ！？恋愛フラグが一切ない人畜無害な高校生を縛り付けるつて、おかしいじゃないですかー！！」

「まあ…嘘を言つているみたいには見えないがな……」

「でも、いきなり現れるつておかしくない？」

「でもここは、『偉大なる航路』グランドラインだから、何があつても不思議でないよな。」

.....

「（あれ？なんか今…ものすごいに聞き覚えのある単語が…？）

あの、すみません！！いま、グランドラインって言いましたか？」

「言つたが…それがどうした？」

上条はじい～～と一人一人の顔を見直した。

『偉大なる航路』といつのは、漫画・ワンピースに出でぐる海の名前。

こつしてじい～と見てみると、田の前にいる男たちにも見覚えがある。

…もつとも、名前が分かる人は2・3人だつたが。

「ううつて、もしかして『白ひげ海賊団』ですか？」

「それを知らずに、乗り込んだのかよい？」

見事なパイナップル頭の男…白ひげ海賊団一一番隊隊長のマルゴが、  
答える。

「だから、何度目ですか！？」

俺はマンホールから急降下ダイビングして、気が付いたらここにいる  
たつて！！

つか、異世界トリップか！？なんでワンピースの世界！？

不幸だ！！！」

なんで、こんな死亡フラグが半端なさうな世界に来てしまったの  
だろうか。

今まで死にそうになつたことが沢山あつたが、今日は本当にここで死ぬかもしれない。

「異世界トリップ？よく漫画とかである？」

この船にしては珍しく平均的な体つきの男……隊長格なのは確かだが、上条は名前が思い出せなかつた。

「はい！物わかりが良くて嬉しいです！！」

「本當か？胡散臭いな……」

「証拠はあるのか？」

「証拠？」

考え込む上条だったが、証拠なんて思いつかない。この世界に来ようと思つてきただけではないのだ。そんな証拠となるようなものなんて持つていねい。

「ん？」

「きやああああああ……！」

頭上から声が降つてきた。上条を囲む人たち（つまり、白ひげ海賊団の隊長たち）が上を向くので、つられて上条も上を向く。

なにかが近づいてくる……見る限り人のようだ。

「なつ……？」

上条の顔が引きつった。

なぜならその人物は……

「うぐつ……！」

「いたたたた……」

なんで、この私がマンホールに落ちないといけないのよ……？……つて……ああ……あんた……なんでわ……私の下にいんの……？」

女はあわてて上條の上をざいた。

「ハハ……なんでビコビコつまんで…………」

「これから事態が好転するとは思えない…

「不幸だ……」

上條玲麻は、ビコビコ中学生」と、学園都市のNO・3・御坂美琴をみてため息をついた。

### 第3話 何事も口裏合わせが大事

「なんであんたがここにいるのー? つていうか、なんでマンホールから落ちたのに、海の上ー?」  
「…お前もマンホールからトロツプかよ…」  
「な…なによ…!」

仕方ないじゃなく黒子の奴が、いきなり飛びついてきたのが悪いのよ!」

「あ… それで避けよつとしたら落ちたってことか…」「文句あるわけ!?」「いや… 文句といつよつこの状況… なんつーの… 不幸だーー」

上条は真っ赤な顔で怒ったように話す美琴を見て、ため息をついた。

「不幸だつて… ん?」

美琴は周りの状況に気が付いたらしい。  
じいーーーーと周りにいるオッサン達の顔を見る。

「ねえ… もしかして… こ…』……『モビー・ティック号』ー?」  
「も… モビー… ? なにそれ?」  
「はああ… ? あんた知らないのー?」

バツかじやない！？つという顔をする美琴。

「いい？『モビール・ディック』っていうのは、『ワンピース』に出てくる『白ひげ海賊団』の船のことよ。

頂上決戦の時に燃えちゃったけど、ルフィ達の『ゴーイング・メリーゴー』や『サウザンド・サニー号』より、はるかに大きくて……はつきつてあのマンガに出てくる船の中で最大級なんじゃ……

ついで、どうかしたの？」

「いや……よく知ってるな……」

ペラペラ漫画知識を披露する美琴に若干引く上条。

学園都市有数のお嬢様学校『常盤台中学』のお嬢様のイメージから、かけはなれていた。

「なによ？」「んなの当たり前の知識じゃない？

アンタは読んでないの？」

「いや……少しだけならな。『アバラスター編』位までなら……」

「『アラバスタ編』ね。

つていうか、まだそこなの！？もう本誌でルフィは、とっくに一九歳になつているつて言つのに。

「あんなあ……」

「おこ、なに不吉な」と言つて居るんだよい？

見るどマルコが殺氣を出していた。

「」の船が燃える…なに言つてゐるんだよい…？」

「……」

何故か黙り込む美琴。

「おい…なんとか言えよ…」

「……」

本当にブーチの護と同じ声だ…！」

「はあ？」

「お願いだから『元解』って叫んでみて…！」

または、『ペガサス 星拳』でも構わないから…！」

田をキラキラさせる美琴。

「……おい、御坂…相手が困つてゐるぞ？」

「えつ？」

「そんなことよりも…ちょっとひいて来い…」

「えつ…あ…ちよつと…」

マルコに『ものまね』をせがむ美琴の腕を引っ張る上条。

そのまま船の端の方まで連れて行つた。

「あのなあ……つて、なんで赤くなつてんの?」

「そ……それはあんたがいきなり……」

「いきなり……なんだ?」

「ああもうー!で、なんなのよー!」

「実はさあ……ちょっと原作知識を披露するのは止めないか?」

「?なんでよ?」

「いや……だつてさあ……氣味悪いって思われるだろフツー?」

だって、誰か不特定多数の人たちが俺たちの知らないところで俺たちの存在や行動を知つていてるってなんか嫌だろ?」

「そりや……そうね。悪かったわ。」

うなだれる美琴。なんか、罪悪感を感じる上条だった。

「ああ……それでさあ、言つたことはもうアレだから、口裏を合わせるやつ?」  
「や……そつね。」

額を口わせて話す上条と美琴。

「おい!…話はすんだのか!/?  
そつねと答えるよこ!-/」  
「あ…あはは…悪い悪い。」

作り笑いを浮かべて上条は振り返った。

「俺たちはさつき言つたみたいに『異世界』から来たんだ。  
「で、異世界の奴らがなんで、この船を知ってるの？」

和服を着た人が話しかけてきた。

「じゅ……数年くらい前に、一度この世界にトリップしてきた人がいたみたいなんだよ。」

「で、その人が遠くからこの船を見た時に、なんか……」

「火柱が上がつてたから、燃えたように見えたんだって。『モビー・ディック号は燃えた』って伝わってたのよ。」

「数年前……火柱……ああ……エースの仕業かな？」

「あ～～ありえるよい。」

まだ、完全に信用していらない眼だつたが、納得の色が見え始めた。

「でも、異世界から来たつて証明できるのか？  
空島の住人つてことも考えられるだろ？」

「そ……空島？」

原作知識がない言葉が出て戸惑う上条。

「空島つていうのがどうこうとか知らないけど、これを見たら

納得してくれる?」

空島を知っている美琴は、上条に合わせて空島を知らないふりをする。そして、ポケットから携帯電話を取り出した。

「これは、携帯電話って言つて、いわゆる電電虫みたいなもので、遠くの人と話が出来たり、写真が取れたり、メールが出来たりするの。つていつても、今はアンテナが圈外だから通話もメールも無理だけどね。」

携帯を受け取りいじくる隊長たち。

「たしかに、この世界にはないモノだね。」

「面白いな、異世界人なんて。」

「さすが『偉大なる航路』だぜ！！」

そんな様子を見た上条と美琴は『上手くいった』と田を合わせた。どうやら、信じてくれたみたいである。

「で、どうやって帰るんだ?」

「そ……それが……肝心なところが伝わってなくて……」

このまま、白ひげ海賊団に居候させられれば、衣食住の心配はなくなる。

「それが…………困ったな…………早く帰つてもらわないと、危険なのに……」

「危險？」

「今にも処刑されそうな仲間を救出するために、全勢力を集結させてある敵の本拠地に乗り込むところなんだよ。」

じぱらぐ固まる一人

「なんだか分からぬけど、不幸だ！！！」  
「ええええええ！（今つて頂上戦争の時期なの！？）」

それ、それ違う意味で絶叫する、上条と美琴だった。

### 第3話 何事も口裏合わせが大事（後書き）

10／18…誤字が発覚したので、一部訂正しました。

## 第4話 ヒーローでも許されないことがある

「仲間？ 一体誰が……って、どうしたんだよ、顔色悪いぞ？」

上条は真っ青な顔になつた美琴みて首をかしげた。

「も…もしかして、処刑されるのって…エース…？」

美琴の震える口から紡ぎだされた言葉に一同が驚いた。

「おい、嬢ちゃんはなんでエースを知ってるんだ？」

「そ…それは…以前にトリップした人が、エースの母親のルージュさんがエースを出産する場面に立ち会つたから…」

「つてことは、エースの父親の事も知ってるんだな？」

美琴はうなづいた。

「私も手伝う！…エースを死なせるわけにはいかないわよ…！」

「私、こう見えて元の世界でNO・3の実力者なんだから…！」

「おう…そうなのか！？助かるぜ…！」

「でもよ、そういう話は親父にとおさねえと不味いんじゃねえかよい？」

「確かにそうだな…よし…親父の所へ…」

「待て待て待て」

上条が盛り上がりしている中に割り込む。

「な……何つーか……話についていけないんだけど…  
その……Hースって誰?ってか、なんで処刑されそうになつたわけ  
?」

「……あんた……アラバスタまで知つてるんじゃなかつたの?」  
「さうだけど……そんな隅から隅まで知つてるわけじゃ……」

はあ……つとため息をつく美琴。

「Hースっていうのは、麦わらのルフィのお兄さんで、海賊王『ゴ  
ール・D・ロジャー』の息子よ。」  
「……ああ……あのメラメラね……ってことは、ルフィの奴も海賊王  
の息子なのか!?」  
「いや……そうじやないけどね…」  
「で、なんで処刑されそつなんだよ?」  
「そ……それは……」

美琴はあさつての方向を向いた。

恐らく美琴は、なんでエースが処刑されるのかを知っているのだろうが、先程『あまり原作知識を人前で言わない』と約束していたので言つことが出来ないのだらつ。

「奴の部下の“黒ひげ”ティーチが白ひげ海賊団最大の罪「仲間殺

し「を犯して逃亡したんだよ。だからエースはティーチ討伐に向かつたんだよい。

だがよう、負けて海軍に引き渡されたんだよい。

海軍は海賊王の血を完全に断つため、エースの公開処刑を行ひ」とに決めたんだよい。」

マルコが苦々しそうに説明する。

他の隊長たちも顔から怒りがこじみ出でている。

「つまり……裏切り者を倒そうとして返り討ひに合つて……ん? ジャあその「黒ひげ」って奴はどうなったんだよ! ?」

「ティーチは……エースの首を手土産に『王下七武海』に入りやがつたんだ。」

「『王下七武海』? ……どつかで聞いたことが……ああ……思い出した。クロコダイルが入っていたやつか。」

その瞬間、上条の思考が一旦とまつた。

『王下七武海』……それは簡単に言つて、政府に略奪を許可された海賊の事だ。

クロコダイルとは、その王下七武海に所属していた海賊で、アラバ

スタ王国の紛争を巻き起こした張本人。秘密犯罪会社「バロックワーカス」を密かに立ち上げると、ダンスパウダーを使って、アラバスター国民の国王への反感を煽るなどして、国の転覆と、国に伝わる古代兵器「プルトン」を手に入れようとした奴だ。

最終的に、政府を凌ぐ軍事国家を築くことが目標だったらしいが、そのために何十…何百も人の血が流れたかは考えたくない。それも、自分の配下の血だけではなく、全く関係のない一般人の血がほとんどなのだ。

「… ゆるさねえ…」

上条は拳を握りしめた。

インテックスが見ていたワンピースの再放送に出てきた「王下七武海」のドンキホーテ・ドフラミンゴ も脳裏に浮かんだ。

彼の真の目的は分からぬ…だが、人身売買を行っていたのだ。一応は手を引いたらしげ、その理由は「順調過ぎて退屈だった」からだ。

「ゆるさねえ……あんな葉巻鰐や、もふもふピンクの仲間になるためだけに、元々の仲間を殺して……海軍に引き渡したりしたら、公開処刑が待っていることを知っていても……目的のために自分の上

司を海軍に差し出すなんて……」

「わざわざと歯を食いしばる上条。  
そして、じつと自分の右手を見た。

「おい、お願ひだ!!俺も仲間に加えてくれ!!  
俺がこの右手で、エースを処刑するつていう幻想をぶち壊してやる  
んだ!!」

「どことなく無氣力そうだった少年の雰囲気が一気に変化した。  
「誰かを絶対に助けたい」という気持ちが全身からにじみ出ていた。

「つて!何すんだよ、ビリビリ!!」

上条はいきなり美琴に後頭部を叩かた。

「あんたって、本当におせつかいよね。」「  
「そういうお前だつて『手伝う』つて言つてたじゃないか!!」「  
「そりやあ、エースに死んでほしくないからに決まってるじゃない。  
アンタより私はエースについて知つてるし。  
でも、アンタは、ほとんど今まで知らなかつたんでしょう?よく毎回  
見知らぬ人のために動けるわね。」「  
「ほつとけないだろ。仲間を利用するなんて許せないしな。」

美琴はそれを聞くと呆れたように笑った。

「なんだよ？なんか悪いか？」

「悪くないわよ。あんたらしいって思つただけ。

感謝しなさいよ。このLV5で学園都市N.O.3の超電磁砲の美琴  
様がアンタの味方なんだからね。このLV.0さん。<sup>レベルガン</sup>

「……馬鹿にしてるのか？」

「し……失礼ね！……

だいたい、私はアンタに一度も勝つたことがないから、ここでアンタより先に救出して、アンタより強いことを証明してやるんだから！――

「証明つて……御坂さんのほうがはるかに強いですよー。

この間の大霸星祭の賭けでも、お前が勝つたじやないか。」

「そりやそりやだけど……それとこれとは違うの――！」

「……痴話げんかはそこまでにして、そろそろ親父のところへ行く  
よい。」

マルコの言葉で一気に覚める2人。

……そこで一人は親父…世界最強の海賊・エドワード・ニューゲー  
トと対面し、彼の「息子」と「娘」になる。その時、エース処刑ま  
で……残り約6時間

刻一刻と船は、海軍の待ち受ける「マッソンフォード」へ針路を進めていく……。

そして、同時刻……もう一つの物語が動き出していた。

……インペルダウン……

そこは、拷問室と死刑台が立ち並び、世界中で暴れ回っていた凶悪な犯罪者達でひしめき合っている大監獄であり生き地獄。

そこの地下6階「LEVE-6」“無限地獄”

起こした事件が残虐の度を超えたため、政府により存在をもみ消された終身囚・死刑囚が幽閉されるフロア。超大物や伝説級の危険人物が幽閉されているため、存在は秘匿されている……

しかし、このフロアに似つかわしくない人物が突如、現れた。

「痛つたいつてミサカはミサカは打つたお尻を触つてみたり。  
つてゆーか階段から落ちたはずなのに、なんでこんな所にいるんだ  
ろ?」  
ミサカはミサカは疑問を口に出してみたり。」

ワンピースを着た外見年齢10歳前後ほどの幼女……  
打ち止めが現ラストオーダー  
れたのだつた。

## 第5話 誤解は意外と簡単に生まれやすい

……学園都市第七学区にある病院……

「つぐ」とは、あの子の階段から落ちたところだね?」

力エル顔だが、腕は一流と言われている医者…冥土返しが、無表情のまま階段を指差す少女に尋ねた。

「正確に言えば、トイレに行つと走った結果、足を滑らせてしまつから落ちてしまつた…ということですね、とミサカは説明します。『…で、俗に言つて異世界トリップ』とこのをしたとこのことね……」

「そつとしが考えられません、とミサカは断言します。

なぜならミサカネットワークで伝えられた情報によると、検体番号20001号は現在、見知らぬ牢獄らしきところで、ワンピースに登場する『クロコダイル』と会話をしているところですから…それに『「階段」という場所は異世界へ通じやすい』という情報を手に入れたミサカがいますし………と、ミサカは懇切丁寧に説明します。』

「…漫画の世界にトリップつてわけかよオ…  
で、どうすれば奴は帰つて来るんだ?」

「学園都市N.O.-1の能力者」で、この病院に入院中の少年、一方通行は先程から無表情で説明をしているクローン人間・検体番号10032号……通称・妹達<sup>シスター</sup>。御坂妹に詰め寄った。

「異世界トリップというのは、何かしらの目的を達成しないと帰つてこれない場合が多いから……」

シスターズ  
妹達の代わりに同じくこの病院に入院している科学者、芳川 桔梗が答える。

「この場合だと、おそらく『エース救出』をクリアしたら戻つてこられるんじやないかしら？」

ただ……一生帰つてこられない場合もあるから、なんとも言えないとね。」

「あいつ一人でエースを助けられるとは、考工られねエな。」

「じゃあ、君が助けに言つたらどうかね？」

「あア？」

「幸いにもバッテリーの予備はかなり用意したからね。」

「頂上戦争まで行くようだと、戦いが多いから予備は出来る限りたくさん用意しないと……」

「オイ、芳川！俺はまだ、行くとは言つてねエぞ！……」

「あら？でも、この状況下で彼女を助ける力があるのは貴方だけよ？幸いにもミサカネットワークが通じるから、貴方の演算能力も使えると思うじ。」

「……っち、くそったれがア！……」

こつして、最強の能力者は階段でわざと足をふみ外したのだった。

「……おい！ イワちゃん！ 誰か降ってきたぞ！ ……」

新旧七武海のジンベエとクロコダイルを檻から出して、逃走経路を確保した時だつた。

ルフィの目の前に突如、何もない空間から1人の少年が落ちてきたのだ。

白い短髪と赤い瞳に中性的な体格をしていて、杖をついていた。そして…白とグレーの縞柄の長袖Tシャツから察するに、囚人ではなさそうだ。

その少年はクロコダイルをまっすぐ睨んだ。

「…オイ。正直に答える。ここにガキが来なかつたか？」

「ガキ？ ああ……アホ毛のガキか？」

「クローボーイの知り合い？」

「いや…さつき煩いくらい一方的にしゃべりかけてきやがった…  
テメエがアレの保護者だったのか？」

「どこにいるんだ？」

「海の上です、とミサカは即座に答えます。」

「！？お前…いつの間に…」

振り返ると先程の妹達<sup>システムーズ</sup>が立っていた。

「おっ！…お前も急に現れたな…！」

「ヴァナアタ…どうやって…」

「冥土返しに言われてきました、とミサカは答えます。

私ならミサカネットワークで打ち止めの居場所も分かりますから、  
とミサカは面倒なことに巻き込まれたことを恨みつつ、説明をします。

「それより、海の上ってなんだ？説明しやがれ…！」

「それはワシが走りながら説明しよう。」

ジンベエが前へ出た。

「早くしないとエース君の処刑も、彼女の処刑も止められなくなつ  
てしまうのだからな。」

「そうだった…！…急いで……って、彼女も処刑つてどうこう  
意味だ？」

ルフィイがイナズマの作った坂を走りながら問い合わせる。

「うむ。 実はだな……」

（回想シーン）

「うわあ……本物のエースだ……ってミサカはミサカは興奮してみる……！」

『エースはもう来ているつて』クロコダイルが言つてたけど本当だつたのね、つてミサカはミサカは一瞬疑つたことを心の中で謝つてみたり。てゆうか、本物のエースだよお……！」

1人の幼女がピヨンピヨンと檻の前で跳ねていた。

「エース君の知り合い？」

「いや……だれだ？」

「打ち止めつていうの、助けに来たんだよってつミサカはミサカは胸を張つて答えてみる！」

「ラストオーダー？ 变な名前だな。」

「へ……变な名前つて……これはミサカの意志で命名したのではないから、变つて言われたらちょっと悲しいかもつて、ミサカはミサカはしょんぼりとうなだれてみたり……。」

つてか、助けに来たんだよって言つたのに、何の感慨もないわけ？

つてミサカはミサカは疑問を問い合わせてみる。」

「……お前…ミサカって名前なのかラストオーダーって名前なんか、ハツキリしたらどうじや？」

「えっとね……

ミサカは御坂美琴のDNAマップを元に作られた妹達シスターが反乱や暴走をした時に備えてつくられた上位固体で、他の個体に対する制御や命令権を持つミサカネットワークの管理者なの。

だから、口癖で一人称が「ミサカ」なんだよってミサカはミサカは説明してみるけど、理解できる?」

「いや、さっぱり分からねえ。

つていうか、さっさと逃げやがれ!! あぶねえぞ!!」

エースが声を張り上げるが、幼女は動こうとしなかった。

「だつて……見殺しには出来ないよつてミサカはミサカは真剣に答えてみる。」

その瞳は言葉通り真剣そのものだった。まっすぐエースをみつめている。

「ミサカは単価18万円…つまりこの世界に換算すると18万ベリードで製造可能のクローンで、20000体の妹達シスターの総称の事なのでミサカはミサカは妹達のせつめいから始めてみたり。

で、妹達は「絶対能力進化（レベル6シフト）実験」で1号から1

0031号まで殺されたんだけど、それまでは計画のためだからって特に何も思わなかつたの、つてミサカはミサカは告白してみる。たしかにミサカ単体が破壊されたときには、全ミサカをつなぐ脳波リンクからその個体の存在が消されるけれど、ミサカの最後の一休が死ぬまで破壊されたミサカの記憶や情報 자체が消えるわけではないから、実験にはなんの損傷もないわけ。

でもね……ミサカ単体が死ぬことに涙を流す人がいるんだってことをミサカは知ったの。だから、これ以上は誰一人として死ぬわけにはいかないつてミサカはミサカは宣言してみる！…

「……なんか難しい話でよくわからないんだが……」

「つまりね……人造物のミサカ単体のために涙を流す人がいるんだから、貴方だつて死んだら涙を流す人がいるはず、だから死ぬのは良くないつてミサカはミサカは説得を試みてみる。」

そういうと、打ち止めは優しい姉のように微笑んだ。エースは何も言えなくなつた。

「お前……」

「そこ」で何をやつている……。

その時厳しい声がとんだ。

打ち止めの後ろには、いつの間にか監獄長のマゼランをはじめとする監獄職員が立っていた。

「お前……」

「うひやあ！－ちょっと不味い状況下もつてミサカはミサカは恐怖でわなわな震える身体を押さえられなかつたり…」

「！」の男を助けに来たのか？』

マゼランが問うと、打ち止めはガクガクしながらうなずいた。

「ラストオーダー！－逃げる…」

エースが力の限り叫ぶ……が…

「！」…腰が抜けて動けないみたい…つてミサカはミサカは現状報告をしてみる…』

顔が引きつっている打ち止め…

それを見たマゼランは…

(これはなんだ？)

現状把握に苦しんでいた。

服装や健康状態からさつするに、どう見たって外部の人間だ。しかも幼女…

侵入者の”麦わらのルフィ”と一緒に侵入したとも考えられるが、この幼女はなんでこの最下層のフロアにたどり着くまで、監視の目に留まらなかつたのか……そもそも、なんでこの幼女はエースを救出に来たのか……

「おー、これもエースと共に連れて行くぞ。」

「え？」

マゼランについてきていた女職員は、急なことでイマイチよく分からなかつた。

「しかし……拷問の上で監獄へほおりこめばいいのでは？」

“火拳のエース”を助けに、誰にも知られぬようここまで来たコレがただモノに見えるか？  
恐らくこれは……

エースの実妹だ。

先程の会話の中にも、よく理解できなかつたが「妹」という言葉が出てきたしな。

そうでなかつたとしても、海賊を助けに向かつたものへの見せしめともなる。

いざにしひ、本部へ送つた方が身元も早く割れるだらうしな。

……連れて行け。」

「回想シーン終了」

「……クソ餓鬼がア……」

話を聞き終えた一方通行は、呆れと怒りがじちゃ混ぜになつた声を出しだ。アクセラレータ

「…麦わら。俺も仲間に入れやがれエ。オッと勘違いすンじゃねエぞ？俺はアノ餓鬼を取り戻しに行くだけで、お前の兄貴なんて知つたこっちゃねエ。」

ただ、目的地が同じだから手を貸してやるつてことだ。」

「…いいぞ。つてか、お前の能力つてなんなんだ？」

「……気が付かねエのか？俺が今、どうやって動いていんのかをなア？」

そう…今、一方通行は、少し浮くよじにして走っていた…否、走つているのではない。滑つていたと表記した方が正しいだろう。

「アルビダみたいな感じで『摩擦』をなくしてゐるのか？  
「摩擦ウ？違エな。」

これは反射…正確に言えば『ベクトルの向きの変換』だア。

そういうやア……自己紹介がまだだつたなア……

俺は学園都市最強のL.V.5の超能力者……「一方通行」だア――！」

白い髪に赤い目の中年はニタリと笑つた。

## 第6話 彼を止める者は誰もいない

……海の上……

鳥の声一つしない……聞こえるのは処刑台のある町へ近づいていく船の音のみ……

「悪いな。せつかく助けに来ててくれたのにこのままだ……」

「もう一度見上げる」とはないだらう空を見つめたままHースは隣にいる幼女「<sup>ラストオーダー</sup>打ち止め」に話しかけた。

「確かにミサカは貴方を助けられなかつたけど……ミサカは全然不安じゃないよってミサカはミサカは自分の感情をあらわしてみる。」「なんで不安じゃないんだ？」

「だつて……あの人人が助けに来てくれるから……貴方の弟と一緒にミサカ達を助けに来てくれるつてミサカはミサカはミサカネットワークを通じて分かつた喜びをあなたに伝えてみる……」

確かに打ち止めの声色には全く「死の恐怖」を感じさせないモノだった。

監獄で出会ったとき同様明るくて、楽しげな感じで話していた。

「じいねで……つてミサカは話題を変えるけど……いこ・つてミサカは

ミサカは許可をとつてみたり」

「なんだ？」

「えっとね

『悟飯……』って言つて欲しいの……ってミサカはミサカは懇願し

ଦେଖନ୍ତି

出来なかつたら『魔貫光殺砲』でも構わないかも！つてミサカはミ

「待て待て待て！！！」

今が護送中だということを忘れてツッコむエース。

「何を言わせたんだ!? つてかどういう意味なんだそれ!?」

「だつて……エースの声優さんとピッコロの声優さんは同じだから……生エースの声が聞けたから、ついでにピッコロさんの声も聞きた  
いかもってミサカはミサカは密かな願望を打ち上げてみたり……」  
「せ……声優つてなんだよ！それ以前に、ピッコロつて何者だ！？」  
「えっとね……ナメック星人だよってミサカはミサカはエースに教  
えてあげることにする！！」

「人間じゃないのか!? そのピッコロつて!!!!」

一人間のわけないよ、脇が緑色で触覚生えてるー

人間のわけないよ。肌が緑色で触覚もえでるし……でもカッコいいんだよつてミサカはミサカはピッ 「口さんの」とを述べてみる

! !

[REDACTED]

「ねえねえ！！いつてみてよおーーつてミサカはミサカは田をキラ

キラさせながら懇願してみる！――「まかんいわねばせい」『魔貫光殺砲』

「魔貫光殺砲」

「だめ……もつと低い声で……つてミサカはミサカは注文を出して  
みる……

あと、これはピッコロさんの必殺技の一つだから、もつとテンショ  
ン上げて言つて欲しいかもつてミサカはミサカは追加注文してみた  
り……！」

「……」

「ほらほら早くくくくつてミサカはミサカは足をバタバタさせなが  
ら懇願してみる……！」

「……『まかたじゅうぱ魔貫光殺砲』……！」

「うわあ……本物そつくりつてミサカはミサカは感動してみたり！  
！……」

（緊張感ねえなあ……）

真っ赤な顔をしながらも、ピッコロをはじめとする古川さんの物ま  
ねをするエースと、それにはしゃぐ打ち止めを見て、ため息を隠せ  
ない護送警護中の中将を含む海兵たちだった……

そこを走り抜ける4つの人影があった。

「処刑つてのは、いつ始まりやがンだ！？」

「今が約10時前：処刑は午後の3時！！」

その時刻には必ず処刑は実行される！！！」

白ひげのオヤジが来るとするのならその何時間も前にしかけるハズ。

エースさんはもう海の上……

戦いはいつ始まつてもおかしくない！！！」

「3時まで殺されることはないんだな……ならまだ間に合つー！」

「フン……」

クロコダイルが列から抜き出ると、扉の前に躍り出た。

「扉なんざ無意味……

この右手は渴きを『』える。」

彼が右手を当てる、扉が砂になつて消えていく……

そう、彼はスナスナの実の能力者で、大きっぽにいふと、右の手のひらはあるものの水分を吸収し、砂へと変えることができるのだ。。

扉の向こうには大量の獄卒が待ち構えていた。

「「じゅら」」 ve1e 4!!!

囚人「ジンベエ」「クロコダイル」侵入者「モンキー・D・ルフィ」  
それから見覚えのない少年が現れました!!!! 応戦します!!!!

撃て!!!!!!」

しかし、銃弾など砂人間のクロコダイルには無意味。

「三日月形砂丘!!!!」  
バルバン

獄卒を砂にするクロコダイル。その一方で…

「撃て！監獄弾だ！！！」  
「ゴムゴムのお……」

ルフィはそれを交わすと彼らの頭上に飛び上がり……

「雨……」

回転状態で放つゴムゴムの銃乱打する。

「魚人空手 唐草瓦正拳」

ジンベエも正拳突きのような形を行った後、全方位360°に衝撃

波を発生させて、獄卒たちを吹っ飛ばす。

「うわあ……勝てるわけがねえ……ん? おい、あの餓鬼はどうした! ?」

見覚えのない少年の姿が見当たらなかつた。

この戦いのさなか巻き込まれて死んだか? とその獄卒が思った時だつた。

その少年はいた。平然と「＼＼＼＼＼」へ続く階段に向かつて歩いてくる。彼はかすり傷一つ負わないで平然と笑っていた。

「撃て! !あの少年も麦わらたちの仲間だ! !」  
「アヘンめんぢくせエなア……」

弾丸は彼に当たらず、「すべてが反射される……いや、正確な反射ではない。

そのすべてが的確に監獄弾を撃つていかない獄卒にまであたるのだ。

一方通行はベクトルの向きの変換をして、銃弾をすべて監獄弾を持つていない獄卒に当てていたのだ。

が、もちろんそんなこと理解できる獄卒たちではない。

「どうしたア! ? その程度かア! ?

その程度じゃア、この一方通行様は止まらねエゼ?  
つてか、このままじゅア、てめエラは自滅だゼ?」

「か……構わん……撃て……数で何とか抑えろ……」

構わず撃つてくる（ばかな）獄卒たち。

「はつ……馬鹿だなア……」

迷わず”向きの変換”をする一方通行。  
その変換は極めて効果的な変換で、次々と監獄弾を持つていない獄  
卒のみ殺されていった。

「報告します！！！」

無線を使う獄卒。

「謎の能力者が現れました！！銃が効かず、ただの反射ではなく：  
その向きまでコントロール……うわああ……」

「勝手に情報与えてンじゃねエの！！」

弾丸をものともせず……かといつて槍を振りかざしてくる獄卒も近づ  
くだけで吹っ飛ばされ……

まだルフィ達が後ろで戦っているのを感じながら先へと進む。

「貴様！！何者だ！…ど！」出身だ！？」

「聞きてエのかア？」

俺は……一方通行。アクセラレータ 地獄の土産に知つておくんだなーー！」

学園都市最強の彼を止められるものは誰もいない。

彼は誰よりも早く、LEVEL 3へと続く階段を上り始めた。

## 第7話 助けられるものは助けるに越したことはない

「おい！…そりいえば、アクセラレータの姿がみえねえぞ…！」

はあはあと荒い息をつきながらルフィは周りを見わたした。ブルゴリの軍団や獄卒たちばかりで、特徴的な白髪のやせた少年が見当たらない。

「彼なら絶対に無事です、とミサカは断言します。」

軍用ゴーグルを装着し銃器を構える少女が言った。

「大丈夫つて…何を根拠に言っているツチャブル？」

オカマ王イワシノフも言つが、少女は無表情のままだつた。

「問題ありません。一方通行は現在予備のチョーカーをいくつも持つていますし、それに彼は学園都市最強の能力者で、一万体弱のミサカを無傷で殺した張本人ですから、とミサカはこいつらの頭じゃ分からぬだろうと思いつつ説明します。」

「よくわかんねーけど、能力者なら心配いらねえな！  
それより、出口はどこだ！？」

ルフィが「EVE」の出口を探しているとき、すでに一方通

行は「EVE」2まで来ていた。

つい先ほどまでこのフロアには監獄長のマゼランがいたのだが、「EVE」4へ向かう大型リフトに乗り込んだところだったので、このフロアには毒の壁対策を考えているバギーとゆかいな仲間たちしかいない……

が、そんなことは最強の能力者には関係ない。

「な……なんだお前！？」

「脱獄者には見えないんだカネ！？」

とかじかわやいじかわや言づ奴らには見向きもせず、ただ毒の壁をじいつと見た。

「……毒か……めんどくせH……」

チョーカーの電源を入れ直すと、毒の壁に手を伸ばす。

「おい！…あぶねえぞ！…」「自殺行為だ！…」

「つっせHなア……」

彼が毒の壁に触れるや否、彼の能力によつて毒の壁は反射され、向こう側へと吹き飛んだ。

毒が消し飛んだのが分かると、チョーカーの電源をいつたん切る。

「おお！…すげえ！…」

「「EVE」1への道が開いたぜ！…」つて……」

壁の向こう側に立っていたのは……黒いひげを生やしたデカい男が率いる謎の集団だった。

「ゼハハハハ！！面白い能力だな、小僧！！」

11

「どうだ？ 奠の仲間になんねえか！？」

「……くだらね工……俺は自分の目的を果たすだけだ。」

「」で上条当麻や御坂美琴、おそらく打ち止めやその他、異世界トリップした一般人だつたら目の前の男”黒ひげ”に敵意や悪意・憎悪といった感情が沸々と湧き出てくるだろ？……が、彼は違つた。

彼はエースの処刑なんて知った事ではない。

海軍はモ海賊はモ興味がない

物語の三ヶ月後、アーヴィングは、ハーバード大学へこの街で、ゼラントまた戦うなんて知つた事ではない。

彼の目的はただ一つ……あの幼女……「打ち止め」を助け出すこと……  
そのためだけに動いていた。

(確かに)世界の移動手段は『船』だったんだよなア……となると軍艦を奪うしかねエカ

つーか、なりゆきで『協力する』ことになつたアイツらが全然現れる気配しねエ……）

後ろを振り返るが、囚人たちを開放しながらはしゃぎまくるバギーたちしかいない。

どうやら一人で軍艦を調達しなければならないみたいだ。

外へ出ると、マゼランの命令で船が今までに海へ乗り出せつとしているところだった。

「どれにじょうかなア」

一方通行は一タリと笑みを浮かべると、チョーカーの電源を再び〇にした。

「一人で残る氣ですか、とミサカは心の中を見破つてみます。」

ミサカは包帯グルグル巻きでクルクル回つている男…いや、オカマのMr.2 ボン・クレーに問いかけた。

彼は一方通行が手に入れた船にまだ、乗つていなかつた。

…ジンベエ達やバギー一行がこの場所に着いたとき、10隻あつた船のうち、この船を残し、他の船は人の屍を乗せたオンボロ幽霊船とかしていた。

ルフィが着次第、いつでも出航できる……それなのに、ボン・クレーだけが乗船していなかつた。

「誰かが残つて『正義の門』を開けないといけないのよ。あつしが一番確実にできる……」

『正義の門』……インペルダウンを取り囲む門……これは内側から開けないと開かない……

「確かに成功確率は99%です、とミサカは分析結果をいいます。ですが、そのあとはどうするつもりなのですか、とミサカはそのあとに待つていてる運命が分かっているのか聞いてみます。」「それ聞くつアボンやナイ」

「それ聞くのヤボじやナイ?」

苦笑するボン・クレー……ミサカは無表情のままだつた。

「私の方が安全かつ正確に開けることができます、とミサカは宣言します。」

「あんたね……分かつてるの！？」

あの門を開けることはじめに残る……つまり、誰かが犠牲にならないといけないってことなのよ……！」

アンタは脱獄囚ですらないじゃナイの！！」

……砾たはそにて、かた

ミサカの能力を駆使すれば船の上からでも開けることができます、とミサカは断定します。

ボン・クレーの顔に驚愕が走った。

「ええ！！あなた、能力者だつたのーーー！」

「ええ。ミサカは……」

「麦ちゃんの」えーー！」

ボン・クレーが振り返ると……

「逃げるぞーーー軍艦はあるかーーー！」

「こちらに向かって走つてくるルフイ達がいた。

猛毒を滴らせる監獄のマゼランを連れて……

「「「なんかすごこの連れてるーーー」「」」

「確かに連れていますが…原作とは違い、こちらには船があります。だから少しは動搖が少ないようですね、ミサカは分析します。」

「原作？」

「あなたには関係ありません、ミサカは断言します。では、私達も乗船しましょう。」

ボン・クレーやミサカ、ルフィ達も乗り込み、マゼランにやられたはずのイワンコフも『地獄<sup>ヘル</sup>ウインク』で地上に戻ることができ、船は出航した。

「いったいこれはどうことだ……」

残っている船が全船、使えない状態になっていた。

「一体どうこうことだーーー！」

微かに息のある獄卒に尋ねる。

「はあ……はあ……白髪の悪魔が……赤い目をした瘦せた少年が……  
たつたひとりで……」

「たつた一人ー?」

「は……はい……攻撃を全て跳ね返し……何をしても歯が立たず……」

そんな囚人……聞いたこともない……驚愕を隠せないマゼランだった  
が、ここは冷静になるように努めた。

「まあいい……正義の門が開けられることはない。」

奴らはあのままそいで立ち往生をして、逃げることとは出来ない。対  
策はひとつ考えれば……

マゼランは「この田が信じられなくなつた。

正義の門が……開き始めている……

マゼランは動力室に走った。

「はあ……はあ……動力室!! 何をしている…………」

「や……それが……何者かにハッキングされたらしく……  
これからノントロールが出来ません!!!!」

「なんだと……」

「……うまくいったのはミサカのお蔭ですね、とミサカは原作を変えたことを自慢してみます。」

「……この手があつたとはなア……そういうや、てめエーも能力者だつたな。

弱すぎるから忘れてたぜ。」

「……一応これでもレベルは2～3なんですよ、とミサカはショックを少しうけたのでうなだれます。」

ミサカ…妹達の能力はレベル2～3程度の発電能力『欠陥電氣』。  
オリジナルシスターズ  
本物の御坂美琴の『超電磁砲』には一万体全員でかかつても歯が立たないとされているが、ハッキングなんてお手の物だつた。

「でも……少しは人のためになれてよかつたです、とミサカは安堵します。」

ルフィ達と笑つているボン・クレーを見たミサカ。  
……本来なら彼が開けていた正義の門……

原作にはない仲間を加え、ルフィの奪つた軍艦は…処刑の行われる

街、マリンフォーフォードへとタライ海流に流れされ進んでいく.....

## 第8話 父親つてなんぞなじに見える」じがめ

「うわあ……すげえな……」

ぐるりと360度じ」を見ても水・水・水……まるで水中トンネルを思わせるところだが、水中トンネルの中ではなく、上条当麻は海の中にいた……しかも乗船している船」と…。

上条は妙な事に気が付いた。

海の中にいるのになにも生物の気配がしない……

ONE PIECEの世界なんだから人魚や魚人がいてもおかしくないのに、魚一匹すら見かけなかつた。

海の生物たちは、これから起ることを予測しているのだろうか？  
そう考えると少し氣味が悪くなつてきた。

「ちょっとーー聞いてるのーー！」

ビロビロと前髪に青白い電気を走らせる美琴がバシイと上条の頭を叩いた。

「いてつー聞いてますともーー！」

ただどういう技術で海の中を船が進んでいるのか、気になつただけだつてーー！」

「……そつか、アンタの知識はまだシャボンティまでいつてないの

よね……

いいわー！」の美琴様が教えて上げるー！

美琴が得意そうに腕を組む。

「見て分かると思うけど、船の周りをシャボン玉で覆うのよ。これをコーティングっていうの。

えっと……たしか、船全体をヤルキマン・マングローブのシャボンで包みこむことで海中航海を可能にするの。これは深海1万mの水圧にも耐える事が可能で、多少の穴が開いたくらいでは影響はないんだけど、海王類などに噛まれて多数の穴が開けば潰れるのよ。」「へえ……学園都市も真っ青な技術だな。」

「そういうこと。

で、話を戻すけど……アンタは何をするのか分かつた？」「

美琴が話を”作戦”の方に戻した。

作戦とはもちろん、エースをいかに被害最小限で救い出すかという作戦だ。

原作を知らない上条は美琴にまかせっきりだったのだが……

「でもさ、『れつて俺、あんまり必要なくない？  
つてかさあ、俺、いるないんじやない？』

作戦内容を聞いた上条がツッコむ。

「だつて、アンタの能力は確かに凄いけど、敵さんは能力+体力+腕力…ついでに脚力もあんの。

能力者だからって一方通行やアタシみたいに能力に頼り切つている奴はないの。

ほら、例えばエースだつて、能力者だからそれに頼り切ればいいのに、筋肉が凄いでしょ？だから、仮にアンタの力で能力を消したところでも氣休めにしかならないのよ。」

「……つてことで、俺はこんな役回りしかできねえってのか……

なんかやるぞ……つて盛り上がつてたのに……不幸だ……」

がつくし…と肩を落とす上条…

「まあ、気になさるなつて……これも重要な仕事よー…？」

美琴が上条の肩を笑いながら叩く。

「うう…中学生に慰められる高校生つて…  
つてか、前もこんなこと感じたような気が……」

上条の憂鬱に関係なく…白ひげ海賊団はマリンフォードへ進んでい  
く……

海軍本部のある島”マリンフォード”

ここにはおもに海兵の家族が暮らす大きな町がある。

現在、住人達には避難勧告が出ており……

避難先のシャボンティ諸島からモニターによつて…人々は公開処刑の様子を見守つていた。

各所から集まつた記者やカメラマンたちもまた

ここから世界へ情報をいち早く伝えるために身構えついていた。

海軍から出される監視船は出航の度に撃沈され、“白ひげ”的情報も皆無……

マリンフォードに集まる緊張は高まるばかりで

せまる処刑の時間までとつとつ3時間をきつていた。

ここには世界各地より集められた名のある海兵たち総勢約10万人の精銳がにじり寄る決戦の刻を待つ……

三日月形の湾頭及び島全体を50隻の軍艦が取り囲み、湾岸には無数の大砲が立ち並ぶ……

港から見える軍隊の最前列に構えるのは、戦局のカギを決める曲者たち

海賊”王下七武海”

そして広場の最後尾に高くそびえる処刑台には事件の中心人物

白ひげ海賊団一一番隊隊長”ポートガス・D・エース”が運命の刻を待つ……

その眼下で処刑台を固く守るのは、海軍本部最高戦力

3人の”海軍大将”

今考えうる限りの正義の力が、白ひげ海賊団を待ち構える……

が、そこにイレギュラーが混ざっていた。

「…おい！エースの横にもう一人…誰かいるぞ？」

「本当だ！つてかアレ……子供じゃないか？」

「エースとどういった関係だ！？」

ざわざわと報告とは違う事態に周囲と話す海兵たち……だったが、処刑台に海軍大将・仮のセンゴクが現れたことで水をうつたかのように、シーン…となつた。

アフロヘアーと口ひげが特徴で、実物大のカモメのオブジェを載せた軍帽と黒縁の丸眼鏡を着用している男…それが海軍元帥・センゴク…。

センゴクが手のひらに載せている電伝虫を使おうと口を開いたそのとき…！

「うわあ…！あそこにスモーカーがいる…！つてミサカはミサカは原作キャラに指をさしてみたり！っていうか、手錠されているから本当は指をさしていないんだけど、心の中では指しているからそれでいいか、つてミサカはミサカは自分で納得してみたり…！」

…エースの横で手錠につながれていた打ち止めラストオーダーが声を上げた。

シーンと静まり返つた中だったので、彼女の甲高い声は島全体に響

き渡つていた……

もちろん、シャボンデイ諸島のモーターを通じて、シャボンデイ諸島にも……

「…スマーカーさん……知り合いでですか？」

彼の部下で眼鏡の女剣士・たしき少尉が尋ねた。

「いや……しらねエ…だれだあれ？」

常に2つの葉巻を吸つていいるほどのベースモーカーで、自然系悪魔の実・モクモクの実の能力者・白獅のスマーカー准將は少し眉間にシワを寄せた。

あんな小娘みたことがない。なのになぜかものすごく馴れ馴れしい

……  
忘れていただけかとも思ったが、全く記憶にない……。

「ねえねえ、結局”けむりん”って誰と付き合つているの?ってミサカはミサカは長年の疑問をズバリ聞いてみたり!!」

「てめえ!!何を分けわかんねエこと言つてんだ!!?

つてか、そのあだ名は止める!!」

「ええ!?なんで?ってミサカはミサカは抗議の色をあらわしてみたり!!

つていうか、質問に答えてほしいんだけど、ってミサカはミサカは

□をタタいてのよろこびに膨らませてみる！

ねえ～誰？たしづ？それともヒナ嬢？どつちって//サカは//サカは  
二択にしてみる！」  
「どつちでもねえ！！！」

一体そのガキは何者なんですか！――

スマーカーはセンゴクにむかって声を張り上げる。

「分かった。今から説明しよう。」

センゴクは、実は自分も気になっていた事柄だったのに話題を変えられ、少し機嫌が悪かつたが、気を取り直すことにした。

……で、話が始まったのだが……若干2人……怒りに燃えてセンゴクの話など耳に入らない男たちがいた……

「ゆるさねえ……アイツもヒナ嬢を狙っていたのか……！」

「愛しのヒナ嬢はこのフルボディのものなのだ。だれにも渡すものか！」

海軍大佐・黒檻のヒナの部下で雑用要員のジャンゴとフルボディが沸々とライバル出現の怒りに燃えていた……

が、そんなことはどうでもいいので、せつせとセンゴクの話に戻すことにしてや。

「…エース…お前の父親の名前を言つてみる。」

「…俺の親父は…白ひげだ…。」

苦悶の表情の後、エースは絞り出すように答えた。

「違う！！！」

「違わねエー！他にいねエー！」

「……南の海にバテリラという島がある……

母親の名前はポートガス・D・ルージュ……

この女は我々の頭にある常識を覆し…我が子を思つ一心で海軍の目を欺くために、20か月もの間エースを胎内に宿し続けた……」

センゴクの重々しい口からエースの出生の秘密が語られていく……

「そしてお前を生むと同時に力尽き果て死んだ。

父親の死から一年と三か月を経て……世界最大の悪の血を引いて生まれてきた子供…それがお前だ。」

打ち止めが現れた時以上にざわつく海兵たち。  
エースが唇を噛みしめ下を向き続ける…

「お前の父親は海賊王”ゴーラード・ロジャー”だ……！」

「…………？」

周囲に今日最大のざわめきが走った。

シャボンティにいる記者の中には手帳を落とす者までいた。

「い……生きていたのか……海賊王の血が……」

「じゃ……じゃああの女の子は？」

「白獅の知り合いか？それがなんで処刑？」

「この少女……ラストオーダーは誰にも見つからずに地獄の監獄・インペルダウンに侵入に、エースの元へとたどり着いた……まあそこでとられたわけだが……」

インペルダウンの職員が言つこは、彼女は”エースの親族”らしい

「……」

正確にはインペルダウン職員は”妹”と伝えられたのだが、伝言ゲームに例えると分かりやすいと思うが、最初は”妹”と伝わってきたのに、いつのまにか”親族”に変わり……そのままセンゴクの耳に入ったのだった。

「それもただの親族ではない……

お前がいつも生まれたか言え。」

「言つても分からぬと思つけど……

ミサカは元々筋ジストロフィーの治療という題目で御坂美琴が提供したDNAマップを元に作り出されたレベル5の「超電磁砲」の量産を目指す「レディオノイズ量産能力者計画」の上位固体で、薬を投与したりして成長を速めたから、こう見えて実は生まれてから1年もたつてなつたり、つてミサカはミサカはミサカは自分の出生について語つてみる。」

「……つまり、少し頭がおかしい子だ。」

「おかしいって女性に対して失礼かもって、ミサカはミサカは地団太をふんでみたり！――！」

「つまり、こうして複雑な嘘までついて必死に素性を隠そうとしている……

そこまでして隠す必要がどこにある？

ちなみにルージュにもロジャーにも兄弟はない。

彼らの両親も彼らが幼い時に他界しており、彼らにも兄弟はない……

なのに”親族”と名乗る少女……

そう……つまり、Hースの実子……

「…………？」

さらなるざわめきが沸き起についた。

「ガープ… 本当かい？」

一応エースの育て親、海軍中将ガープに、同じく中将の紅一点に  
しては歳を召されているツルが尋ねた。

「いや、知らん。馬鹿者が……」

あんな可愛い娘を作つたならなぜワシに報告せん…！」

「ちげえよ、ジジイ！…！」

ガープの声を聴いたエースが声を張り上げた。

「嘘はいかんぞ、エース！！

いつたいいつ作ったのじや…いや、そもそもその子の母親はどう  
した！？」

「母親も何も俺の子じやねエ…！」

“白ひげ”の所の女か？ナースか？

「だから…聞けつて！俺は…」

「セングок元帥…報告します…！」

「…？」

いきなり声を上げた海兵、ものすごく必死な顔をして敬礼をしてい

た。

なんか涙が出かかっていた。

「せ……『正義の門』が誰の指示もないのに開いています！」  
動力室とは連絡が取れず……」

「なんだと！？」

見てみると、確かに開いている……

エリスもガーフも言い争いをやめてしまつた。

「来たぞお——！全員戦闘態勢——！」

「アーリー——つと音を立てながら徐々に近づいてくる船……

それも一隻に一隻ではない。

個性それぞれの色を持つ大艦隊だつた。

海軍は大慌てだつた。

「海賊船の大艦隊だあ！！」

”白ひげ”はどこだ!? 確認しろ!!!

”遊騎士ドーマ””雷卿マクガイ””デイカルバン兄弟””大島知珠スワード””

総勢43隻……”白ひげ”と隊長たちの姿がありません……

しかし間違いなく傘下の海賊たちです……！」

「…………

お前らまで……！」

いつの間にかエースは小刻みに震えていた。

センゴクを含む海兵たちは”田ひづ”がいないことに氣をとられていて、そのことに気づいていなかつたが、打ち止めは氣が付いていた。

「ほりね、みんなエースが死んじやうの嫌なんだよって！ミサカはミサカはニコッて笑いかけてみる。」

そうじつてエースに微笑むミサカ。

「親父さんはちゃんと来るよ、ほりーもひやーまで来てるって！ミサカはミサカはネタバレをしてみたり！」

「！？どこにいるんだ！？」

「よーく耳をすましてつて！ミサカはミサカは助言をしてみたり！」

「？」

エースはじつと耳をすました……聞こえるのは海兵の声と傘下の海賊の声……

その時だった。

「ゴボボボ……ゴボボボ……」

耳にとらえたのは泡の音……

「まさか……！」

そのことにセンゴクをはじめとする何人かの海兵が気づき始めた。

「えつーーこの音……どこから?」

「ゴボボボ……ゴボボボ……」

一般海兵たちに聞こえるくらい大きくなってきた泡の音……

「…………こりゃあ、とんでもねえ場所に現れはしねえか?」

「布陣を間違えたかね?」

みるみる間に二田字形の湾内に四つの巨大な影が浮かび上がってきた。

「湾内に海底に影が……」

「まさか……」

そうだったのか、あいつら全船……！」

「一テイリング船で海底を進んでたのか……」

驚きの色を隠せないセンゴク…

ザツパアーン！――――！

突如、巨大な白い鯨型の海賊船が湾内に姿をあらわした！

“モビー・ディック号”が来た！――――！

次いで3隻の白ひげ海賊団の船！――――！

新たに現れた3隻の船はモビー・ディックより少し小柄な黒鯨型の船だったが、巨大であることには変わりない。

「湾内に侵入されました！！14人の隊長もいます――！」

「白ひげ”……」

恨みのこもったまなざしをむけるセンゴク…

「グラリカラ……何十年ぶりだ？ センゴク……」

カツン…カツン…とモビー・ディック号の白鯨をかたどった頭部に向かつて進む足音が響く…

「俺の愛する息子は無事なんだろうな………」

三田川のような白ひげを蓄えた、地肌に直接コートをマントのよう<sup>1</sup>に羽織つている、常人の数倍はある体躯の筋骨隆々の大男……”白ひげ”こと……”ハドワード・ヒューゴーゲート”が姿を現した。

「グラリカラ……

ちょっと待つてや……エース……」

なんで来たんだよ……おれなんかほつておいてもいいの……

「オヤジイイイ！――！」

エースは力いっぱい叫んだ。

## 第9話 誤解は誤解を生む

「…まさか」れほど急接近されるとは…

グラグラ笑つと笑う男を見て苦々しげにつづぶやく海軍元帥・センゴク

先程までの空氣と一変。辺りは緊張という文字が支配していた。

…それは無理もなうことかもしれない…

かつて海賊王ロジャーと唯一互角に渡り合つた、大海賊時代の頂点に君臨する「世界最強の男」。「ひとつなぎの大秘宝」<sup>ワンピース</sup>に最も近い存在とされ、その伝説的・怪物的な雷名は世界中に轟いている男…それが目の前に突然現れたのだから…

「…”白ひげ”ってどんな技を使うんですか?」

1人の海兵が隣にいる先輩海兵に尋ねた。

「ば…バカ!お前知らないのか!…?」「え…?」

「よく見ていろよ……こんな戦い滅多にない…

アレは……世界を滅ぼす力を持つていてるんだ……

「世界を……滅ぼす？」

なんだかスケールがデカい話だ……

確かに今、何か力をためるように腕をクロスさせているあの男からは威圧感を感じる……が、威圧感で言えば七武海やセンゴク元帥……青キジをはじめとする3人の大将達からも威圧感を感じる……彼ら全員の力を合わせれば楽々あんな爺さん倒せるんじゃないか？

恐れることはない……と思ひ。あんな爺さん……俺たちの正義に勝てるはずはない！

先輩海兵達はビクビクしてて唾を飲みこんでいる……が、俺はあんな爺さんには負けない。

でも……

”白ひげ”がニヤリと笑みを浮かべ、クロスさせていた両腕をほどいて、まるで壁に叩きつけるように空氣を一気に叩いたとき……俺はその考えが甘いことに気が付いた……

”白ひげ”の叩いた空氣にビシビシィっとひびが入る。  
そして波が……海が……グググッつと持ち上がり、それにつられて俺たちのいる陸地もぐらりっと持ち上がったのだ！

……すぐにそれは収まつたが……こんなことで終わるわけがない……

ふいに安全なところにいる家族の顔が浮かんだ……

…俺は…帰れないかもしれない……

俺は首を振つて、そんな不吉な想像を消し飛ばそうとした。

ここには海軍が誇る最強勢力がいるのだ……中将だつて全員集まつている……

俺は…安全だ。

絶対に…生き残つてやるー俺はそう誓つた。

「つう…今のがさつき言つてた”海震”つて奴か？」

「そう。親父さんは”グラグラの実”的能力者で空間を殴りつけ大氣にヒビを入れることで震動を起こす事が出来る地震人間なの！超人系悪魔の実の中では最強よ。」

「最強…か…」

上条当麻は美琴の説明を聞いて納得した。

地震は”津波”を呼び起こす……それは舞台のほとんどが”海”といつこの世界にとつて恐怖となるからだ。

津波の対処策は”とにかく高台へ逃げる”こと……だが、船に乗つていて津波が突如来たら…逃げられない……つてか、まずここにも高台ないし……俺たち…無事だよな？…いくらなんでも”自滅”はないよな？

「……ところで……御坂。エースの隣に座つてゐるのって……妹達に見え  
るんだけど、何者なんだ？」

「へつー？」

頓狂な声を上げた美琴は、じいっと田を細めてエースのいる処刑台  
を見た。

状況が理解できなくて思考がフリーズする美琴……

「なんで見捨ててくれなかつたんだよ……」

俺の身勝手でこうなつちまつたのに…………

そうしていのちにエースが叫び声が耳に届いた。  
その言葉を聞いたとき、上条の中で何かがキレた。

「見捨てられるかよ…………」

「！？」

”白ひげ”が何か言おうとしていたみたいだったが、上条の方が早  
かつた。

「お前は……この船の”家族”なんだろ！？  
家族を見捨てる奴なんてどっこいいるんだよ！…  
「……？」

でもよお…俺はその”家族”的制止を振り切つて、勝手に負けたんだ！！俺の責任だ！！

「…いや…俺”行け”と言つたはずだぜ…息子よ…」

「……………!?嘘つけ！！

嘘つくんじゃねえよ、親父いい…！」

「いや”行け”と言つた…そつだろ？マルコ…」

「ああ…俺も聞いたよい…！」

とんだ苦労をかけちまつたな、エース…！」

パイナップル頭の一番隊隊長のマルコが静かな怒りを身にまとっていた。

「この海にいる奴ならだれでも知つているはずだ…

俺たちの仲間に手を出せば一体どうなるかってことへりこはな…！」

！」

「お前を傷つけた奴は誰一人として生かしちゃおけねえ、エース…！」

！…

「待つてろ…！！今助けるぞおおお…！！！」

ウオオオオつと声が上がる。

「グラグララ…！」

ところでセンゴク…処刑する人数が増えてねえか？」

”白ひげ”も気になっていたのだろう……処刑台の上にはエース以外のイレギュラーがいることに……

セングクは眉を上げた。

「お前は知らなかつたのか？」

「ええつ……」

先程までの”士氣”より”驚愕”が勝った”白ひげ”海賊団……船  
という船から驚愕の声が上がった。

白ひげの声にも驚きの色が混ざった。

「……エース……俺の孫を作ったなら俺に何故言わん……」  
「お……親父！これは誤解だ！！！」  
「つたく……まだシラをきるのか、エース？」  
「それよりも……おい”白ひげ”！——何を言つてゐるー？」  
「この娘がエースの娘なら……ワシの”孫”じゃーー！」

海軍中将のガープが声を張り上げた。

「ジジイの孫は”ルフィ”だろ……つてか、本当に俺の娘じゃねエ……」

「グララララ……エースは俺の息子だア……ガープ。

つまりエースの子は俺の孫だ。」

「何を言つか……

ワシは悪党に同情はねエ……

だが、エースを引き取つて”強い海兵”になるために育てたのはワシじゃ……

エースはワシの家族……

つまりワシの孫じや……

「ちょっとミサカを取り合わないで……つてミサカはミサカは”一度は言つてみたいアニメヒロインのセリフ”を声高々に叫んでみたり……」

「…………って、やつぱりお前！御坂妹かよ！……ってか……御坂妹より小さいから御坂妹の妹か！？」

上条は叫ぶと、口論がピタリ…とやんだ。

「と……トリップしたのはミサカだけじゃなかつたのね……つてミサカはミサカは驚いて目を丸くしてみたり……

ほ……本当はこの場で貴方にミサカ達が受けた恩を返したかつたりするんだけど、ちょっと難しそうだからミサカはミサカはしょんぼりうなだれてみる……。」

「やっぱり御坂妹か……でもなんかしゃべり方が違うみたいな

……

「それ以前にサイズも違つてしまふ……」

「…………おー…………アレはまさか…………」

センゴクがじこいつからを見てきた。

その視線の鋭さに思わずジクツと体が震える上条と美琴……  
タラリ……と冷や汗まで出てきた……

「まさか……エースの女か！？」

「は……はい……！」

これ以上ないつてくらい真っ赤になる美琴。

「お前…………」

「じょ……〔冗談じゃないわよ！……」

わ……私はエースと直接会ったのは今日が初めてだし……！」

しかし、こぐら否定しても一度広がった噂は止められない……

「そうか……実は一度トリップしていたから俺たちの世界について詳

しいんだな……」

「なるほど……だからトウマが知らないことまで//トマは知っているんだな……」

「水くせえじやねえか……なんで教えてくれないんだ?」

「エースの嫁つてことは、俺たちにとって姉御みたいな感じになるつて事か?」

新たな事実……といつても誤解なのだが……を知った海賊たちは現状を半ば忘れて美琴に群がる……

「だ~か~ら……違つたり言つてるでしょ……  
ほらー、アンタもなんか言いなさいよ……」

美琴が上条の方を向く……と、上条は思案顔でこりこりした。

「わ~つか……お前は一度//ちたけ//トロップしたのか……」

ぶつちーん

「だから違つて言つてるでしょ……」

キン~と小さな金属音……

美琴の親指が、一枚のコインを弾いた音だった。コインはゆっくりと、ゆっくりと彼女の頭上を舞っている。

「つわつ……ちよつとタンマ……」

「問答無用よ……どうせアシタには……」

コインが再び美琴の親指に着地した。

「……こんな攻撃効かないんだから……！」

瞬間！－

彼女の異名・超電磁砲の由縁ともいえる一撃が、解き放たれた。

コインは空氣摩擦で赤熱し、オレンジ色のレーザーと化して上条に襲い掛かった。

「や……やめひて……！」

上条は超電磁砲を紙一重でかわす。

そのまま超電磁砲は処刑台へとツツ「んでいく……

「やれやれ仕方ないねえ……」

色の薄いサングラスとストライプの入った黄色のスーツを着用した

”ピカピカの実”の能力者……………海軍大将・黄猿・本名・ボルサ  
リーノが足を振り上げた。

「天岩戸」  
あまのいわと

彼の足に光が集まり、レーザー光線となつて超電磁砲と激突した。

ズウドオオオン！――！

つという音と共に相殺される天岩戸と超電磁砲。相殺された余波の爆風で建造物が破損した。

「……あの娘……能力者だったのか！？」「

「黄猿の攻撃とほぼ同等の攻撃力を持つだと！？」

「お姉さまは学園都市N.O.3の能力者で”常盤台の超電磁砲”  
レールガン」つて呼ばれているんだよってミサカはミサカはつて…ひやあ――！」

打ち止めは突如感じた揺れに驚いた。  
ラストオーダー

ズズズズズズ――！――！

驚いたのは打ち止めだけではない。

海兵から七武海まで…突如始まったの地鳴りに対して動搖が広がつ  
ていく……

「何だ、この地鳴りは……」

「そら来たぞ……”海震”が”津波”に変わつてやつてくる……」

次の瞬間！海兵たちの目に信じられない光景が飛び込んできた。

「な……なんだよアレ……」

上条も田の前に起きている出来事に驚愕の色が隠せなかつた。

「実際に聞くのと見るのは違うわね……」

”グラグラの実”の能力者で『地震人間』の親父の作り出す津波は

……

美琴も思わず目を見開いてしまった……この光景は漫画で知っているはずだった……

だが、実際に現実の光景として見てみると……これが現実かと疑いたくなるような光景だ。

いつのまにか身体が武者震いをおこしていた。

マリンフォード……海軍本部を挟み込むように、島全体をも飲み込むことが可能な巨大さの津波が襲い掛かってきたのだ！――！

開戦の士気を高めるためセンゴクが海兵に向かつて叫んだ。

「勢力で上回ろうが勝ちとタ力をくくるなよ――

最期を迎えるのは我々の方かもしけんのだ……」

……あの男は……

世界を滅ぼす力を持つて いるんだ！――――！」

攻め入るは――――

「白ひげ」率いる新世界47隻の海賊艦隊

迎え撃つは――――

政府の二大勢力「海軍本部」「王下七武海」

誰が勝ち誰が負けても……

時代が変わる！――――

## 第10話 死にそうになれるひとつ朝から向回もあつたりする

「すげえ……」

上条当麻は田の前で行われている戦いに手に汗握っていた。

……まあ仕掛けたのは親父……つまり“白ひげ”の方だった。

先程の白ひげが起こした“海震”で起きた特大の津波が海軍を襲つ。それはマリンファードに覆いかぶさるよつて襲つてきてるので、彼らに逃げ場はない。

「自滅つて展開にならなくてよかつた…」

「グラララララララーーー！」

おれがそんなへマすると思つのか、トウマ？

「親父がそんなことするとは思えないけど、俺つて不幸体質だからな……」

だが、これであっけなく幕引きになるとは思えない……だったら、美琴があんな真剣な顔しているわけがない。きっととにかくあるはず……

その時だ。なんか全体的に青のイメージの男が田に浮いていた。  
まるで津波を止めようとするかのよう……

「おい、御坂……あれは？」

「あれは海軍の大将”青キジ”よ。本名はクザンっていう”ヒヒヒ工の実”の能力者だ……って……あんた……知らないのそんなことも！？」

「知るかよ！……どうせ俺の知識はアラバスタ止まりだよ……」

青キジという男は津波に向かって両手を広げた。

すると青キジの両方の手のひらから、氷がまっすぐに津波に向かって伸びて行つた。

「アイスエイジ  
”氷河時代”……！」

その瞬間……

パキパキッといつ音を立てて、あつといつ間に津波が凍りついていつたのだ……

「そうか……凍らせるから”ヒヒヒ”なんだな……」

「だからアイツは船を使わないで自転車で海を移動しているのよ。

「へえ……って、マジで！？海王類とかにあつたりしたら……」

「海軍の実力者トップ3が海王類に負けるわけないじゃない。負けたなんて言つたら切腹モノよ。」

冷めた目で上条を見る美琴……

白ひげは一発で終わらせられなかつたからだろつか？苦々しい顔をした。

それから重そうに口を開いた。

「青キジィ……！……若鶴が……！……」

すかさず白ひげに向けて攻撃を仕掛ける青雉。

「バルチサン”両棘矛”！！！」

4本の氷の槍が放たれる！

だが、白ひげは怯む事なく青雉の方に拳を振るつて大気にヒビを入れる。

「あらら」

青キジはそうつぶやくと、槍と一緒に青雉の体が粉々に崩れて、海へ残骸が落ちていく。

「おい！！大将がアレでいいのか！？  
つてか確實に今のは”あらら”って問題じゃないよな？あんな軽い

ノリですむ問題じゃ……

「いいから黙つてなさいって！！」

前髪にビリビリッと青い電気を走らせる美琴。話の展開も彼の能力も分からぬ上条は黙つて青キジが落ちていくを見ていた。

だが、青キジは無事だつたみたいだ。

海上で氷の体になつて再生したのだ。……美琴はイライラしているので確認をとることは出来ないが、おそらく彼の実の能力に関係しているのだろう。

クロコダイルの”スナスナの実”みたいに”自然系”の悪魔の実の能力者つて再生能力があるみたいだから、おそらく”ヒヒヒヒの実”つというのも、その一種なのだろう。

そう思つてゐるうちに、再生した青キジが海を凍らせていった。

……海が凍つたことでもう……船は引き返せない……

悪く言えど、帰りにくく（逃げにくく）なつた。  
だが……よく言えど……足場が出来た。

それを思つたのは他の人も同じだつたのだろう。

次々と戦場へ降りて行つた。その中には先程、上条や美琴を取り囲んでいた”隊長”と呼ばれる人たちも混ざつていた。

「ぐひやひやひやひや……」

氷漬けの海とは気が利いている……」

「気持ちが燃えたぎつて暑苦しかつたところだ……」

口々に叫ぶ海賊たち……いや、「ひやひやひや」はないだろ……なんか、そのしゃべり方だと”死亡フラグ”立ちそうだぞ……つと上条は思った。

「撃ちこめええ——！」

海賊たちが大砲をぶつ放す。が、弾が海兵たちに届くことはなかつた。

その前にスパンツとまつーつになつてしまつたからだ。

「海軍の”中将”達だ……！」

どこからか海賊が叫ぶ声が聞こえる。

確かに強そうな面々がズラリつと勢ぞろいしていた……中に長老みたいな雰囲気を醸し出した老女も混ざつていたが……

「始まるのか……」

「ほらー！アンタも行きなさい……」

「えつー？」

美琴に蹴られ、上条は船上から一気にダイブすることになった。

「うう……不幸だ……まあ、エース助けるためだから仕方ない……か……

思いつきりぶつけた尻をさすると走り出す上条……だつたが……

「アレは……確か”鷹の田”！？」

以前、麦わらの一昧の剣士・ゾロでも歯が立たなかつた最強の剣士……鷹の田つて呼ばれていた奴が立つていた。  
そういうえばアイツも七武海だった……と頭の片隅で上条が考えている  
と……

「推し量るだけだ……あの男と我々の本当の距離を……」

と言つて鷹の田は黒い大刀を振り下ろしたのだ！！

ドオン！！

刀の放つた斬撃が氷の海を割りながら白ひげに向かつて飛んできた。  
いや……彼自身は白ひげに放つたのかもしないが……その斬撃の直  
線状には白ひげの他に……

「不幸だ……」

上条もいたりした。彼の右手にはすべての能力を無効化する力……  
イマジンブレーカー  
幻想殺しが宿つているが、それは”能力”に効くのであって、”斬撃”には効果がない。

走馬灯が上条の脳裏を駆け巡り、上条は目をつぶつた……

…………が、一向に何も起きない…………

「大丈夫か、トウマ？」

恐る恐る目を開けるとそこにいたのは……

「たしか……3番隊隊長のジョズさん！？」

「……覚えていたか……？」

「なんで……アイツの斬撃は”世界一の斬撃”だつたはず……って」

その時、上条はジョズの身体の一部が変化しているのを見て目を大きく見開いてしまった。

「だ……ダイヤモンド……？」

「うう……ジョズの体の一部が世界一の強度を誇る宝石……ダイヤモンドに変化していたのだ！！」

「ああ……俺の能力は体の一部をダイヤモンドにすることが出来る。」

「く……くえ……なんかすげえな……つて……親父……！」

ジョズの顔を見上げた時、さつき美琴と戦った（？）黄猿という男が白ひげに攻撃するのが見えた。

「やさかにのみがたま  
八尺瓊勾玉」

親指と人差し指で作つた輪から、無数の光の弾丸を発射する黄猿。先程の技とは違うが、美琴の超電磁砲とほぼ同等の威力を持つ技をつかう奴だ……

「心配するな……親父の所にはマルコがいる。」

「マルコって特徴的なしゃべり方とパイナップル頭の？  
本当に強いのか？」

上条がマルコに抱いた正直な感想は”あまり強くなさそう”だった。少なくとも、このジョズつという大男の方が強そうに見える。

「いや……マルコは強し……ほら、見てみる。」

見てみると、青い炎をまとった男が攻撃を全て受け止めていた。

「いきなり”キング”は取れねえだろ、つよい」

「え……えつー？なんか再生してる……」

「そりゃそうだ。1番隊隊長のマルコは別名”不死鳥のマルコ”。世にも珍しい”動物系幻獣種”の能力者で不死鳥の再生能力を持つている男だ。」

驚く上条に説明をするジョズ。

確かに上条の見ていく田の前で青い鳥……おそらく不死鳥に変化して黄猿に向かっていくマルコの姿が見えた。

「アイツは心配しなくていい…………とにかくトウマ。

お前はあの娘ちゃんと蹴り飛ばされてここに落ちて来ていたが……船に戻るなら今のうちだぞ？」

「戻らねえよ。俺にはすることがあるんだ……つていつても、ここからあそこまでは距離があるんだよな……」

それを言つてジョズがニヤッと笑つた。……正直怖い……

「なら一気に向ひつまで進ませてやる。」

「はい？」

「つかまつてろよ……」

「ううわああ……」

「ううわああ……」

上条の一気に視界が高くなつた。上条は必死で氷塊にしがみついていた。

そう……ジョーズが凍つた海から、巨人族の10倍以上はある氷塊を取り出して何と投げ飛ばしたのだ。……上条」と……。

「まあ……一気に進めるからいいけど……て……うわあ……！」

目の前から溶岩のよみうなモノが襲い掛かつてきた。  
アレを喰らつたら……死ぬ！！

上条は直感的に右腕を前に突き出した。

狙い的中！

溶岩は能力によって生み出されたものだったので、”幻想殺し”で消し去ることが出来た……のは良かった。

「ふ……不幸だああ……！」

手を放したことでバランスを崩し、本日2回目の急降下ダイブをす

る上条。

とにかくこのまま落ちたら”死”確定だ。

慌てて自分を支えてくれるモノを探りで探す。とはいっても……今はダイブ中……そんな都合の良いものは……

ガシィ！

あつたりした。

「あ……助かったぜ……つて……なんか暖かくて柔らかい気が……つて……」

掴んだモノの正体に気が付いたとき……上条の顔がこれ以上ないくらい赤くなつた。

あわててソレから離れる。

「あ……えつと……今のは事故つて言つか……なんていうか……生命の危機を感じていたので……その……必死で……」

「ほう……わらわを前にして言い訳か？

わらわの体に触れていいのはアノ方だけじゃ。」

静かな怒りをにじみだす絶世の美女……女ヶ島「アマゾン・リリー」の九蛇達による海賊団・九蛇海賊団船長であり王下七武海の紅一点で別名が”海賊女帝”……ボア・ハンコック”が上条の前に立っていたのだった……。



## 第1-1話 美しくて性格もいい女なんていない

「……あれは一体……？」

白ひげ海賊団12番隊隊長であり、大柄な隊長たちの中では珍しく常人程度の身長のハルタは、目の前で起こった出来事に目を思わず見開いていた。

同僚のジョズが持ち上げた凍つた海から、巨人族の10倍以上はある氷塊を取り出して、海軍が誇る巨人部隊の半数を潰したから……だけではない。

その氷塊が落ちてくるのを阻止しようと、海軍大将の赤犬が立ち上がり、右腕を溶岩に変化させるとそれを氷塊に放っていた……。まるでそれは同じく同僚で親友のエースが操る”火拳”のようなマグマの拳……。

このままでは、跡形もなく蒸発してしまい、そのまま火山弾として地面に落ちてくると思ったハルタは、隊員たちに避難を呼びかけようとした……が、その溶岩が氷塊にぶつかる前に、跡形もなく消えたのだ。

……ジョズの能力は確か「肉体の一部を”ダイヤモンド”に変化させること」であって、相手の能力を無効化する力なんてない。というより、そんな”海楼石”みたいな効果を操る能力者なんて聞いた

こともない。

元々溶岩なんて放たれてなかつたのか？でも……赤犬の能力で確かに溶岩が放たれていた。なのにそれが一瞬で影も形もなくなつてしまつた。

……「んなことつてあるのだろつか……

「ボサツとするなつて！――」

ズカーンっと銃声と共に何かが頭の上を通りぬける。

ハルタが振り返ると、ドサツと海兵が銃弾を浴びて倒れるところだつた。

考え方をしているうちに注意力が散漫になつていたようだ。気を引き締め剣を握り直すと、自分を助けてくれた人物を探した。

「サンキューな、イゾウ！――」

「全く……隙だらけだ。」

16番隊隊長で、歌舞伎の女形のような姿かたちをした男…イゾウがはあ……つとため息をついた。

彼の持つている二丁拳銃のうち一つの拳銃からは、まだ銃弾を放つた時の煙がうつすら立つっていた。

「何か考え方でもしてたのか？」

「うん……そのさ、今ジョズが放り投げた氷塊あるだろ？あれを赤犬が……」

「あ……溶岩が一瞬で跡形もなく消えたって奴？あっけないで海兵達も俺たちの仲間も驚いているぜ？いつたい誰の仕業だらうかつてな。」

「じゃあ…見間違いじゃなかつたのか…」

本当に誰の仕業だらう？ジョズの新しいダイヤモンド応用術か？「ダイヤモンド応用術！？」

ハルタのつぶやきを聞いたイゾウは笑い始めた。

「あれはトウマの技ぞ。」

「と…トウマの技だつて！？」

あいつにそんな力があるのか！？」

ハルタは襲い掛かってきた海兵を切り捨てながらイゾウに問いかける。

トウマというのは異世界から”白ひげ海賊団”の浴室にトリップしてきた少年の事で、今回のエース救出に協力してくれると言つた、これといって戦闘力がありそうには思えない少年だった。

「俺つて目がいいだろ？だから氷塊の上にトウマがへばりついてるのが見えたんだよ。

で、赤犬の溶岩が迫つてつ来たとき、トウマが右手を前に出して溶岩を消したのさ。」

イゾウは襲い掛かってくる海兵達に向かって的確に打ち込みながら答えた。

「二丁拳銃使いのイゾウは田がいい。だから彼が言つなら本当ヒトウマが消したのだろう。

まさか…あの少年にそんな力があつたなんて……

あの短髪少女の方が強いと思つていたけど、違つかもしれない。

「その事……海軍は気づいているのか？」

「どうだろ? な……至近距離で見た赤犬は気が付いているかもな。だからセンゴクのところまで情報がいつている可能性は高い。」

「そりゃ……ん?

そういえばトウマの奴は今、ビートルの元なんだ?」

「……実は……」

イゾウの顔色が悪い。トウマになにかあったのだろうか?

「あいつ……そのままバランス崩して落ちてさ……こともあらうつは『ハントック海賊女帝』に抱きついたんだよ……。」

一発逆転の切り札になりそうな少年…トウマ…彼の寿命はここで終わつたかもしれない、ハルタは思つた。

「わ…悪かつたって！そんなつもりじゃなかつたんだって…！つーか、あのタイミングで溶岩が目の前に現れたのが悪いんだって…！」

なんか…もう…不幸だ――――――！」

顔を赤らめながら、頭を抱え込む上条当麻。氷塊に襲い掛かる溶岩を、右手に宿る力…”幻想殺し”<sup>（イマジンブレーカー）</sup>で消したのはいいのだが、そのせいでバランスを崩し氷塊から落ちて……あわてて、支えとして抱きついたモノはなんと、絶世の美女だったのだ。

「ん？っていうか、なんでこんなところにアンタみたいな人がいるんだ？」

御坂がいうには一般人はみんな、なんたら諸島に避難しているって聞いたんだけどな……まさか、逃げ遅れたのか！？」

……上条は目の前にいる美女…ハンコックが”海賊女帝”と恐れられる”七武海”だとは知らない。彼の主な原作知識はアラバスターつまりで、それ以降は穴だらけだからだ。

”麦わらの一昧がバラバラにされた”という事実は知っているが、誰の仕業かは知らないし、その後、彼らがどこへ飛ばされどんな運命を辿ったのか知らない。

だから、田の前にいる美女は”逃げ遅れた一般人”として認識していたのだ。

「ほう…主はわらわが一般人に見えると？」

「えつ…い…一般人じやないのか？」

「……なんと…わらわのことを、この戦場で知らぬものがいたとは

……

まあよい…特別に教えてやるひつ…」

ハンコック  
美女は相手を見下し指さしながら後ろにのけぞるポーズをとった。それは、あまりにも見下しすぎていて、逆に見上げていた。

「わらわは”王下七武海”の一人、”ボア・ハンコック”。

その名をよく心に刻んだまま……その心にある邪心にやられるが良い…」

両手の指でハートマークを作るハンコック。

嫌な予感がした上条は、ハンコックの美しさに顔を赤らめたまま一步後ずさりした。

「な…なにをする氣だよ…？」

「メロメロ甘風…！」

ハートマークのようなピンク色の光線が上条を襲つた

が

「 「？」」

何も起こらない。

「おい……あの少年……”海賊女帝”の技が効かなかつたぞ？」  
「邪心が無いようには見えないが……」

「まあいい……もし、本当に”女帝”の技が効かぬようなら、俺たちでの少年を倒せばいいからな。」

遠巻きに2人を見ていた3人の海兵が口々に憶測をかわす。

「あ～……たぶんだけど……俺の右手がその能力を消したんだと思う

……」

「能力を消す能力じゃと？そんな”海楼石”的な効果があるわけなかろうーー！」

”メロメロ甘風”――――

「つづぶねえ！――――」

上条は避けたが、そのせいで後ろにいた3人の海兵が”奇妙”とか形容できない形で石像になってしまった。

「なぜ、わらわの攻撃を避けるのじゃー?」

「いや……だつて……避けないと不味いし……万が一、右手以外に当たつたら不味いし……

つてか、こいつら……海兵だよな?お前つて……

「<sup>スレイフアロー</sup>『魔の矢』!……」

投げキスで作った巨大なハートマークを四のまゝにして破裂させ、大量の矢を上条に向けて放つた。

避けることが不可能だと感じだ上条は右手を使い、自分に矢が当たるのを防いだのだが……

彼らの戦いを見ていなかつた海兵達や海賊たちが矢に当たり、一気に石に変化してしまつた。

「なぜじやー?なぜわらわの技が効かんのじゃ?……こんなこと……あの方以来じや……」

「待て待て!!なんで話の途中で攻撃してきたんだよー?」

「知れたことを……わらわはなにをしようとも許されぬ……なぜならば……美しいからーーー」

「…………」

呆れて言葉が返せない上条だった。

「いや……確かにあんたは美人だけど……人間していい」と悪いこ

どがあるだろ？

つてか、海賊はアンタの敵だから何も言わねえけど、一応、お前は海軍側の人間だろ？

なんで海兵にまで攻撃すんだよ！？」

「ふん……”白ひげ”と戦う」とまでは承諾したが……わらわは仲間になるとは言っておらぬ。

男など皆同じじや……の方以外は……」

「あの方？（だれだそれ？）

でもよお……それでも協力している以上さ、”仲間”っていうんじゃないのか？」

「言つたはずじや……わらわは何をしようとも、美しいから許されるのじや。

男などどうなつても構わぬ。むしろ石になつた方が邪魔なのが消えて、清々する。」

そういうと、最初に石になつた3人の海兵のうちの1人を足蹴りで粉々にした。

それを見たとき、上条の中で何かがキレた。

「お前や……男にだつて命つてもんがあるんだぞ！？」

「何度も言わせるでない。わらわは……」

「命ある者は皆平等なんだ！…どうなつても構わない命なんて……そんなの無いんだよ！…

例えそれが人工的に生み出されたものであつても……

『”人間がいる”と思わせる』物理的情報の集合体のようなものであつても……

奴隸だつたとしても……

生きている限り……そこにおいて笑つたり話したり悲しんだりできる限り……命ある者なんだ！！

簡単に消えてはいけない大切なもののなんだよ！！  
消えたら悲しむ人がきっとどこかにいるものなんだよ！！  
だから……それを簡単に”どうなつても構わない”なんて言つんじ  
やねえ！！！」

ハンコックの動きが止まった。

そして……その美しい顔が一瞬、歪んだように上条には見えた……が、  
次の瞬間には元の凍てつくような顔に戻っていた。

「ぬしは……わらわが”男”といつ下等生物をなぜ嫌つか知らないく  
せに、勝手なことを言うのではない……！  
わらわは何をやっても許されるのじゃ……美しいから……！  
”芳香脚”…………」

ハンコックは休む間もなく蹴りを連発していく。そのけりが当たつた個所はすべて石と化し、崩れて行つた。

最初は避けようとしていた上条だが……

パシイ

「…？」

右手でなんとかハンコックの足をつかんだ。

その瞬間、ハンコックは、まるで海楼石に触れたかのよつて足に力が入らなくなってしまった。

「お前がなんでそこまで”男”が嫌いになつたのか俺はしらない。でもさ、相当、嫌なことがあつたんだろうことは想像つくぜ?」

「…………」

「その……なんだ?信じてもらえないと思ひけど、俺は『』とは違う異世界から来たんだよ。

でもしが、俺がエースを救い出しても帰る術が見つからなかつたら……

お前が抱いているその幻想をぶち壊してやる――!

そのお前の中にある最悪な出来事を消して、救い出してやる――。

……”男”ってそこまで悪いモノじゃないぜ?」

……ハンコックは黙つたままだつた……

そして……彼女が口を開けたとしたとき――

「――スぐん――――!

今モジへ行ぐぞオオオオ――!――!」

野太い声が湾内に響き渡った。

見ると、巨人族の一倍以上はある巨体を持つ…編み笠をかぶった人間（？）…白ひげ傘下の海賊・リトルオーザー・が海軍の船を持ち上げているところだった。

「やべえ！！あの大男が船を持ち上げた時には市街地に入つて”赤犬”とかいうオッサンかスクアードとかいうオッサンを探さねえと行けねえんだつた！…」

慌ててハンコックの足を放す上条。

「待て。主…名をなんといつ？」

走り去つていこうとする上条の背中に声をかけるハンコック。  
上条は振り返った。

「俺？俺は上条当麻……って…うわあ…！」

流れ弾をスレスレノところで避ける上条。そのまま慌てて走り去つてしまつた。

「……カミジヨウ・トウマ…か…」

ハンコックの脳裏に、彼女の愛しの人…麦わら帽子をかぶった少年が浮かんできた。

彼も…”奴隸”を…”生きている人間”だとみなしてくれた。

ハンコックは自分の背にある…一生消えない刻印を服の上から触つた。

「…異世界から来た”男”…か…」

何もハンコックのことを知らないのに…敵なのに…”幻想をぶち壊す”だの”救い出してやる”だの…

…不思議な奴だ。

人の価値観なんて…そう簡単に変わるわけないのに…

…ハンコックはもう一度、上条に会つてみたかつたりしたくなつてきた。

「オーズに気を取られていると、攻め落としちまうぞーー!」

下の方から男の声が聞こえた。

ハンコックは黙つて唇に手を当てるとい、投げキッスを作り出した。

「　「　スレイブアロー  
　　”　虜の矢”　！！！」

たちまち男たちが石になつていいく。

ハンコックは考えるのを止めて、戦場に向き直つた。  
いずれ来るかもしれない、最愛のあの方……死刑囚・エースの弟…  
ルフイを待つために…

## 第1-2話 しばらく会つてないと顔つて変わつてたりする

「はあ……はあ……」

マリンフォード市街地を走り抜ける1人の海兵の姿があつた。

……ここには海軍が誇る最強勢力がいるのだ……中将だつて全員集まつていてる……

俺は……安全だ。……絶対に……生き残つてやる！

……そう心に誓つたはずだったのに……その決心が揺らいでしまつた。

いや……正確に言えば音を立てて崩れてしまつた。

中将達があんなにそろつているのに、有利に戦を進めていない。巨人より大きい人間が……あんなにあつさりと湾内に侵入していた。海軍が誇る巨人部隊だつて……さつきの氷塊で半分がつぶれてしまつていた。

そもそも海軍の実力者……3人の大将たちだつて、そこまで活躍しているわけではない。

そりや……青キジ大将は津波を凍らせたが……海まで凍らせたので足場をつくられてしまつた。

黄猿大将だつて、あの短髪の小娘が放つた光線を相殺させていたが……あの不死鳥になれる能力者に海面へ蹴り落とされていた。  
赤犬大将だつて……確かに、あの氷塊を消そうと溶岩を出した……

……のに、氷塊に当たった瞬間に溶岩が跡形もなく消えてしまった。……否。正確に言えば……氷塊の上にへばりついていた少年の右手が身体の何倍もある溶岩を消していた。

それは……見間違いではないはずだ。

だって……自分は”視力”を買われ海軍へ入隊できたのだ。  
見間違えるわけがない。

改めてそう思うとゾクウッと体に電気が走ったかのように震えた。

黄猿同等の光線を放つ少女……巨大津波をいつでも起らせる”白ひげ”……どんな攻撃を受けても再生する不死鳥……あんな巨大な氷塊を樂々持ち上げる男……それに……まるで海楼石のような能力を持つた少年……

「勝ち目があるわけない……」

「どこへ行く気じや？」

びくうつとして立ち止ると……そこにいたのは……

軍帽と薔薇を胸にさした赤いースーツ……海軍大将・赤犬がそこに立っていた。

「早く戦場にもどれ……！」

「はあ……はあ……」

まさか……ここで出会うなんて……海兵は走ったせいで荒い息をしながら赤犬を見た。

誠心こめて言えば……伝わるかもしれない……

「……み……見逃してくださーい……！」  
死ぬことが怖くなつた。家族を思つと足がすくむんです……！……どうか……」  
「本当に家族を思つひよるんなら……」  
“生き恥”をやりますな……！……」

見る見るうちに身体が溶岩へと変化していく赤犬……

ああ……俺の人生終わった……！と海兵が思った瞬間だった。

「てめえ……待ちやがれ……！」  
「き……君は……！？」  
「……誰じや？」

はあ……はあ……と膝に手をつき息を整えていたのは……つんつん頭の少年……  
たしか……

「君は……あの氷塊の上にいた……？」

「あつ……お前見てたのか?  
つてことより……お前！今更、何しようとしたんだよ……！」

キリツトした目で赤犬をにらむ少年……なんで海賊の少年が俺を助けようとするんだ?

海兵には理解できなかつた…

「…何をじょうどしたか…じゃと?」

それは……じょうどしたんじやけん!…!…

赤犬は溶岩に変化した腕を振り下ろした。

目の前に現れた少年は…先程、氷塊の上にへばりついていた少年だつたはずだ。

よく覚えている…確かに少年の右手が自分の溶岩を消したのだ…飛ばしたのではない。初めからなかつたかのように消えたのだ。

…このことはまだ上に報告していない。

本当に彼の右手が消したのか?海楼石のようなものを仕込んでおいたのか?それとも…あの氷塊自体に細工を施しておいたのか…不確定なことが多すぎるからだ。下手な情報を流して混乱させては

元も子もない。

……これから大事な作戦を控えているからというのもあるが……  
どちらにしろ……ソレで少年を潰す。潰せなかつたら……その時考えればいい。

「やられるかよ……」

少年が右手を前に出すと……やはり溶岩が跡形もなく消えた。

「な……んで……」

少年の後ろにいる腰抜け海兵がオドオドと尋ねていた。

「決まつてんだろー見捨てられるか！

つてかオッサン！！なんで仲間に攻撃すんだよー見てたけどよお  
こいつはもうとっくに戦意がなかつたのにさ……

なんで”生き恥”って発想になるんだ？

死んで家族を悲しませるより……生きて帰つて笑いあつた方が幸せ  
じゃねえか！！

「……海兵が”悪”<sup>かいぞく</sup>に背を向けるなど言語道断じやからじやけん。」

笑わせるガキだ…と赤犬は思った。

何故、海賊が海兵を助けるのだ？それ以前に海賊が正義面している

「」と腹が立つた。

正義は海軍。悪は海賊なのだ。

それよりも……あのガキは、やっぱり右手で攻撃を無効にしていた。左手の方が出しやすい状態だったのに……やはりあの右手に何か隠されているのだろう。

さつさと始末した方がいいかもしれない。

「に…逃げる!!

アレは海軍・大将の”赤犬”様だぞ!!

「へえ……アレが美琴が言っていた……で、あんたは海兵……なんだよな?」

「は……はい……」

「あーーー不幸だ。

スクアードって奴じやなかつたのか……」

「おしゃべりは……そこまでじや。」

再び身体を溶岩にする赤犬。

そして次は……右手だけじゃ抑えきれないくらいの大きな溶岩を作り上げる。

「まだ……能力は……右手だけじゃないんだぜ!!」

ずっと握っていた左手を高く上げる少年。一瞬だけ赤犬の動きが止

まつた。

それを見逃す少年ではなかつた。

「とりやーーー！」

「ボワーンーーー！」

少年が左手に持つていた丸い球が霧散し、辺りに煙が立ち込めた。

「煙幕……」

煙幕が収まつたときには、あたりに誰もいなかつた。

「サカズキ大将。作戦の準備が整いましたーーー！」

電伝虫から声が聞こえる。

「分かつた……それからセンゴクに伝えるんじや……  
”海楼石”に似た能力を右手に宿す少年が海賊にいるとな……」

ピンクの髪にバンダナにメガネを額にかけた少年が弱弱しく笑った。

「にしても、アンタもありがとな。」「い……いえ……だつて……なんとなく……このまま死なせられないって思いましたから。」

「さつさと隙を見つけてコレを使って逃げなさいよ！」

「戦争の前、美琴がイゾウから「女の子が戦っちゃ不味いだろ。言つてもいかないと思うけど……まあ……万が一のためにコレを渡して置くぜ」と言われ渡された”ワノ国特製煙玉”……。

「どうせアンタにはガチンコ勝負は出来ないでしょ？  
さつさと隙を見つけてコレを使って逃げなさいよ！」

「と黙つて煙玉を譲り受けたのだつた。

「御坂の奴がしつかり考えておいてくれたおかげで本当によかつたぜ……」

ぐてえーーーっとその場に横になる上条。

「あ～～死ぬかと思った……」

煙草に紛れて、海兵と一緒に横道に入った時に、この少年が

『「J'ffichです……』

つと言つて安全そうな場所まで連れてきてくれたのだった。

「まつたく……海賊がなんで海兵を助けたんだ！？」

ピンクの少年の友人なのか……一緒についてきていた金髪の少年が呆れた感じで声を上げた。

「だつてよお……フツー助けねえか？」

「そりか？……まあ……そういうものか？」

「それより、いやあ……助かつた……ん？その声……どつかで聞いたこ

とがある気が……

名前……なんていうんだ？」

「ば……僕はコビーと言います。海軍曹長です。」

「俺は海軍軍曹・ヘルメッポだ。」

「コビーに……ヘルメッポ……って……

ええー？あの贅肉だるんだるん少年とモーガンの七光りのバカ息子

！……」

物語超序盤で登場した弱氣な少年と、ゾロを処刑しようとした七光りを振りかざす少年が……田の前にいるなんて……

「えつ……昔の僕たちを知つてゐるんですか？」

「うう……その……まあいろいろとあってな。」

2人から田をそらす上条。…そして田をそらすとそこには、うずくまつて震えるさつきの海兵がいた。

「なんで…俺を…海賊のアンタが…」

「あ…俺って海賊じゃないんだよ。なんつーの?一般人なんだけどエースを助けに来たって感じか?」

それにさ、人を助けるのに理由ついているか?

俺はあの赤犬とかいうオッサンの正義に共感できなかつたから助けただけだつて。」

「…………」

「義のために死ぬよりさ、しつかり生きて帰つて家族と笑う方がいいに決まってるだろ?」

「…あ……ありが…とう…!」

海兵はオウンオウンと泣き始めた。

しかし…これから、どうしたらいいのか…

美琴から言われた作戦は、『スクアードが白ひげを刺すのを止めさせること』

そのために『スクアードが赤犬の言葉に騙されている途中で乱入し、煙玉を使ってスクアードと一緒にその場を離れる。そして、安全そうな場所で説得を試みる』…ということ。

だが、もう頼みの綱の煙玉は使ってしまった。

今からもう一度、赤犬とスクアード探しをして構わないが、逃げ切れる自信は0%だ。

ぶつちやけ、あの怖面男ともう一度、ここ対面したくない。

「……モモ…聞いた!? ヘルメッポさん…今の作戦! ?」

上条が考え方をしている間に、コビーが何か作戦を無線か何かで聞いたらしい。

「ああ。」

「一体どうしたんだ! ?」

上条が尋ねると、一瞬、言おつか言わまいかと思いつ顔を見せていたが、言つことに決めたようだ。  
コビーは半分、震えていた。

「Hースさんの処刑を予定を無視して執行するつて……！」

「はあ！ ?そ…そんなことしたら……」

「そんなことしたら……”白ひげ”が黙つていないと、何を考えているんだ？」

「ん…あれって…」

「何か降つて来るぞ?」

海兵はいまだに泣いているので動かなかつたが、上条・ゴビー・ヘルメットは上を向いた。

なにかが…落ちてくる…

「だから めめーはやりすぎだつてんだよ…」

「コイツのまばたきのせいだ」

「ヴァターシのせいにする気!…? クロ「オ…!!」

「どーでもいいけどコレ死ぬぞ…! 下は氷はつてんだぞ…!!  
！」

その声は他の海賊・海兵達にも聞こえたらしい。

戦う手を止めて上を見上げる者が増える。  
処刑台の上のエースも上を見上げ…  
(ラストオーダー)打ち止めも満面の笑みで上を見  
上げる。

「来たー…ようやく来たよー…つてミサカはミサカは喜びを全身で表  
してみたかつたりするんだけど、手に重い手錠が付いていて表せな  
かつたり!!」

「来たつて…誰が…?」

エースは言葉を失つた。…落ちてくるものの正体に気が付いたからだ。

「あああああああ…」

あーおれゴムだから大丈夫だ！…！」

「貴様一人で助かる気力ネ！…！何とかするガネ～！…！」

「てめエの提案なんて聞くんじやなかつたぜ  
麦わらアー！畜生オー！…！」

「こんな死に方 ヤダッチャブル！…！  
誰か止めて〜〜〜〜〜ンナ！…！」

「つづけ…つぬせエなア…」

「安心してください！…落ちるのは海のはずです……と、  
ミサカはミサカが抱いている落下の恐怖を我慢して、皆さんを安心  
させようと囁ぎます！…！」

そう…落下してきたのはインペルダウン脱走組。

「ルフィ…と一方通行アクセラレータに御坂妹！？」

あつ…クロコダイルに…バギーに…だれだあの顔でか！？」

原作を知らない上条は驚愕の声をあらわにした…

今後……戦況がどうなるか分からない……  
でも……これが何かしらの転機になる……そつどいかで感じた。

## 第13話 空から少女…じゃなくて脱獄囚が落ちてきたら、パズーは助けなかつ

「ど…どひこひこと…?」

万が一……上条に頼んでおいた「スクアード説得作戦」が失敗に終わることも考え、船内に隠れていた御坂美琴は自分の目を疑つた。

監獄・インペルダウンから脱走したルフィ達が乗つてきた軍艦は、急に大きな津波に攫われ、その後突然海面が凍つた為に、その津波の上に取り残されてしまう。

まさか”白ひげ”VS”青キジ”の仕業だとは知らないルフィ達……というより、主にバギー一行がパニックに陥る……そのうちにクロコダイルが、戦争はすでに始まっていることに気が付く……

そこで、ルフィが状況を打破するために、”凍つた波を艦で滑り降りて抜け出す”という作戦を立てるのだが、賛同はあまり得られない……。

そんな時のことだ。

”全艦全兵に連絡！”

目標はTOTTZ陣形を変え通常作戦3番へ移行……準備ぬかりなく進めよ 整い次第予定を早め……

エースの処刑を執行する”

という無線が軍艦に入ったのだ。  
エースの処刑が早まってしまう……そこで、これを聞いたルフィ達は  
エース救出に向かうべく、急いで艦の下にある氷を破壊……したのは  
いいのだが……

「……ルフィ達に乗った艦は、滑り落ちる事なく逆方向に落ちて……  
みんなの注目を浴びながらド派手に参戦！……ってハズなのに……」

「なんで一方通行がいるわけ……！」

美琴は、はるか上空から、ダイブ中の人物の中に、見覚えのある白髪の少年をみつけたのだった。

まさかトリップしてきたのが自分と上条だけではなかつたのか……  
と驚く……が、よく考えてみると、エースの隣にちょこん……と座つてい  
る幼女は、どうみても学園都市の産物……妹達の一人だ。  
……他にトリップしてきた人がいてもおかしくはないのだが……

「でも……よく、あの第一位が人助けする気になつたわよね……  
それ以前に、あんな奴でも漫画読むんだ……」

一方通行的にはエースなんてどうでもいいのだが、エースの横で今  
にも処刑されそうな幼女……打ち止めを救出するために来たなんて、  
美琴が知るはずがない。

アクセラレータ

アクセラレータ

エース救出

ラストオーダー

夏休みに起つた、とある一件から…いやその前から”残虐で悪党キヤラの学園都市第一位の能力者”と認識していたのだが、新たな一面をみたような気がして、なんとなく複雑な気持ちになる美琴だった…。

さて、軍艦が空から真っ逆さまに落ちてきたことに海軍も海賊も…シャボンティ諸島で戦争を見ている一般人も何事か！？と注目する…その中で、まつさきに姿を現したのは…

「……はあ……はあ……いた……」

赤い服に…麦わら帽子がトレードマークの少年が荒い息をしている

それを見たエースは目を見開き……

「る  
ル」

「一方通行ああ！……ミサカを迎えてくれたのねって、ミサカはミサカは喜びのあまり満面の笑みを浮かべてさけんでみたり——」

……エースが力いっぱい、ここまで来てしまった弟の名前を叫ぼうとしたのだが、打ち止めが遮ってしまった。ルフィの方も、エースを見つけたら開口一番で「エース～～～！」って叫ぼうと思っていたのに、見知らぬ幼女が、エースと一緒に処刑台の上にいたので、驚きのあまりリアクションが出来なかつたりする……。

「つたく…世話かけんじやアねエっての…!  
無事かア、<sup>ラストオーダ</sup>打ち止め!!?」

白髪に赤眼が特徴的で、近代的な松葉づえついている少年が声を張り上げた。

「…おい…アレはだれだ？」

センゴクは、落下してきたのが、クロコ・ダイル・ジンベエ・イワンコフといった面々からして、インペルダウン脱走組だということは分かつていたし、この戦場に”このような形”で七武海のジンベエが来たので、”ジンベエが七武海の称号剥奪を覚悟して動いている”ということに怒りを感じていた……。

だが、それを上回る以上に突如、現れた少年に得体のしれない不安感を感じていた。

自分の知らないザ・海賊囚人かもしれないのだが、少年の鋭い瞳孔  
・ただずまいから強い気迫みたいなものをセンゴクは感じていた。

「はつ…すぐさま調べ…」

「学園都市・最強の能力者・一方通行だよつてミサカはミサカはセ  
ンゴクさんに教えてあげちゃつたり！」

エースの娘（？）が海兵の言葉を遮つてセンゴクに笑顔を向けた。

「アクセラレータ…？聞いたことがないぞ？」

「あの人は強いよ…また…助けられちゃうなつてミサカはミサカは、  
せつかく今度はミサカがアノ人を護るつて決めたのに早々にまたあ  
の人に頼ることになつたから…しょんぼりしてみたり…」

「強いのだな……どんな強さなんだ？」

ダメもとで尋ねるセンゴク…だつたが…

「平たく言えば”反射”だよつてミサカはミサカはアノ人の技を教  
えてあげちゃつたり！！

これはアノ人を売つたのではなく、教えたところで勝てるわけがな  
いって思うからなのだつてミサカはミサカは説明を追加してみたり  
！！

「…”反射”…か…」

超新星の一人、南海出身の3億5千万ベリーの賞金首…“コースタ  
ス・キッド”の能力…“反発”のように、磁力で鉄を操る能力な  
だらうか…

まあ…直に見た方が早いのかもしれないな…  
そう思うとセンゴクは、戦場に目を戻した。

「ん? クロコボーイは?」

さつきまで近くにいたはずの元・七武海のクロコダイルの姿がない  
ことに気が付くオカマ王で革命軍の幹部…イワンコフ。  
それとほぼ同時の事だった。

「…」

白ひげの背後にいつの間にかクロコダイルが回り込んでいたのだ!!  
そもそも、この男の中に”エースを助ける”というキーワードは全  
くない。

元々は敵だったルフィに協力したのは、恨みに思っていた”白ひげ  
”の首を取るためだつた。

そして今! その悲願を達成しようと行動に移つたわけなのである。

「あそこだ！！

あんにやろー抜け駆けしやがつて！！！」

クロコダイルより、はるかに実力が劣るのに”白ひげ”の首を本気で取るつもりでいたバギーが叫んだ。

「クロコダイルが”白ひげ”を狙つた！！！」

「親父いい！！」

口々に叫ぶ”白ひげ”傘下の海賊たち…

「久しぶりだな…”白ひげ”！！」

今にもクロコダイルが襲い掛かろうとしたその時！！！

ドカーン！！

ルフィイがクロコダイルを蹴ることで攻撃を阻止したのだつた！！

本来なら自然ロギア系の彼に触ることは出来なかつただろうが、”スナスナの実”の能力者で砂人間のクロコダイルは”水”が弱点だ。さつき海から落ちた時にルフィイの足は濡れていたので、攻撃するこどが出来たのだった。

邪魔されたことでクロノ・ダイルの「」機嫌は斜めだった。

「俺とお前との協定は達成された……なぜ”白ひげ”をかばう…?」「やつぱり、このオッサンが”白ひげ”か……じゃあ手を出すな。エースがこのオッサンを氣に入ってるんだ…!」

：そんなルフィを見た”白ひげ”は彼の麦わら帽子…を見て”ある男”を思い出していた。

「小僧…その麦わら帽子…昔よく”赤髪”がかぶっていた奴によく似てるなあ…」

「おっさん…シャンクスを知つてんのか!?」  
これはシャンクスから預かつてんだ。」

振り返つて”白ひげ”を見るルフィ…その顔を見た”白ひげ”は、エースが手配書片手に自慢げに話していた”弟”を思い出した。

「冗談を助けに来たのか?」

「そうだ!!!」

「相手が誰だかわかつてんんだろうな

おめエゴときじや命はねエゾ!!!」

「つるせエー!!! お前がそんな事決めんな!!!

おれは知つてんだぞ。お前海賊王になりてエんだろ!!!

”海賊王”になるのはおれだ!!!」

堂々と”白ひげ”の気迫に動じることなく言い放つルフィ。

「…………クソ生意氣な…………」

ニヤリと笑みを浮かべる白ひげ。

「それはどこか嬉しそうな表情だつた。

「足引っ張りやがつたら承知しねエゾ ハナツタレ…………」

「おれはおれのやりてえ様にやる…………」

「エースはおれが助ける…………」

ルフィは”白ひげ”に頼る様子を一切見せていなかつた。

自分の兄貴は自分の力で助ける！！

そうルフィの顔に書いてあつた。

「…………ふん……邪魔しやがつて…………」

誰しもが”白ひげ”に臆しないルフィに白目をむく中、クロコダイルは、もう一度、”白ひげ”を倒そと攻撃準備に入つたのだが……

「！？身体がうごかねえ…」

「アンタは動かないでくれる？』

クロコダイルの前に現れたのは……さつきまで行動を共にしていた、”正義の門”を開けた少女にそっくりな少女だつた。服装も……身長も……髪型も……違うのは、さつきまでの少女には表情がなかつたが、田の前にいる少女は、感情の豊かさが表情にハツキりと出ていた。

「……じめ……せつきどざいぶん様子が違うじゃねえか…」

「せつき？……って……ええ！！妹達がもう一人、トリップしてたのー！」

まだ海に半壊した状態で浮かんでいる軍艦の中に自分とそっくりな少女を見つけて、驚く少女…

「……まあ、一方通行とか上条もトリップしてきてるわけだし……」

「トリップ？……といふかアレはお前の妹なのか…？」

「うーん……いいや。妹で。

まあ、それよりも……一日は親父から離れてもらうわよ。』

相変わらず身体が思うように動かない…といつより全く動かないクロコダイル…

「…能力者…か…」

「まあそんな感じね。

私の発電能力の応用で、磁力を操作して…あなたの砂を操っているつてわけ。」

「…つち…」

満足げに話す少女に舌打ちをするクロコダイル…

クロコダイルは全身砂に変化できる砂人間…田の前にいる少女に”砂自体”を操られてしまっているため、全身のコントロールを奪われているようなものなのだ。

「…」こんな小娘に…！…

”白ひげ”からどんどん引き離されていくクロコダイル…

「あら、恥じるのではないわよ。

だつてこの美琴様は学園都市・第三位の能力者なんだから…！」

につり笑う美琴。…それに対し聞きなれないキーワードに眉をしかめるクロコダイル。

「ガクエントシ?ビウコツ意味だあ？」

「知らなくて結構。さあしばらく大人しくしてねーーー！」

満面の笑みを浮かべ、クロコダイルを船からはるか遠くへ追い出す美琴。

「さて……アイツはしつかりやつてゐるでしょね？」

今頃……上条は赤犬と向かい合つてゐるのかな……と市街地の方を眺め見る美琴だつた。

## 第14話 錢形がルパンを捕まる口なんて一生来ない

「じゃあ、俺はもう行くな……」

「さ……気を付けてくださいね……」

「生き残れよな……！」

敵である上条当麻に敬礼をする「モビー」とヘルメッポ。

一般人とはいえ海賊に協力している上条は、海軍の海兵である2人からしてみると敵ではあったが、先程、上条が敵であるはずの海兵を命がけで助けたのを見て……敵とは思えなくなっていたのだった。

きつとどこか……別の所であつていたら友達になれたかもしれない

……

「モビー」とヘルメッポにとつて、そう感じる上条との出会いだった。

上条は振り返つて手を大きく2・3度振ると走り出した。

「つたく……早くしねえとやばいかもな……！」

上条当麻が向かう先は”モビー・ディック号”。

スクアードへの説得が出来なかつた……

このままでは、美琴が話してくれた原作通りならば、”白ひげ”がスクアードに刺されてしまう……！

”白ひげ”：こと親父と話したのは、たつた数分だったが、突然やつて来た謎の人物である上条と美琴を自分の”息子”と”娘”として暖かく迎え入れてくれるような大きな器…にひかれたのだろうか？

まだ出会って間もないのに上条は”彼を死なせたくない”と思つようになつていた。

彼を死なせないために、”白ひげ”にスクアードが裏切つて刺そうとしているつということを一刻も早く伝えなければならない。

上条はエース救出を一先ず置いておいて、親父救出（？）に向かつたのだった。

処刑を速めるとは言つていた……でも、論理は分からぬが、ともかく戦にルフィやあの一方通行が参戦したのだ！

これほど心強いことはない。

エースは彼らに任せて、自分は目の前で、危険が迫つてることを知らない命を助けようと走つた。

だが、彼は一つ…大きなことを忘れていた…

彼がここまで来た道のりの半分は、ジョズの取り出した氷塊にしがみつく形で進んできたということを…

今度は自力で、その道のりを進まなければならない…

とはいっても、8月31日の日なんかは、全く手を付けていなかつた宿題に追われながらも、昼間はアステカの魔術師と命を懸けた鬼

「ごつこをし……ファミレスであらぬ罪を着せられたせいで店員さんたちから追われながらも攫われたインテックスを探しに走り……その延長戦でインテックス誘拐犯である魔術師・闇咲逢魔の願いを聞くため、学園都市から外出しなければならず、セキュリティーを強行突破し……また、新学期があるので夜中中に再度、强行突破して帰還した……というほど、走りまくりの一日を送ったことがあったので、この程度の距離は彼にはどつてことないのかもしねり……」

「はあ……はあ……」

荒い息をしながら上条は走り続けていた。

(ちつくしょ——全然距離が縮まらない気がする……)

上条は軽い舌打ちをした。……だが、諦めないで走り続けていると

……

「ドンッ！――」

とにかくモビー・ディックに向かつて走り続けていたので周囲への注意がおろそかになっていたのである。誰かと激突してしまったのだった。

「わ……わりい……！」

「す……すみません……！」

「…………た……たしきい…………！？」

上条がぶつかった相手は、ゾロの亡き幼馴染のくいなに外見も性格も瓜二つ……で、額にメガネをかけている海軍の女曹長……”たしき”だった。

「え……私の事……しつているんですか？」

「えっと……まあ……そう！あの、スモーカー大佐の一一番の部下なんですね？」

俺って、大佐のファンだから……その人の元で戦えるたしきさんって凄いなあ～って思つてたんですよ……！」

「嘘……とは言い切れない。

ルフィ達から見たら敵である海軍の中でも、上条が……ファンとまではいかないが、まあ気に入っているキャラガ、スモーカーとその部下であるたしきだった。

「す……凄いだなんて……というか……その……大佐じゃなくて准将ですよ？」

「えつ……！そうだったんですねか！？ってことは……たしきさんも出世したんですか！？」

「まあ……曹長から少尉になりました。」

「へえ……おめでとうござります……！」

上条がほめると、戦場なのに嬉しいのか顔を赤らめるたしき……  
だったが、すぐに何かに気が付いたようだ。

「それはそうと、一般人が何でこんなところにいるんですか――！？」

……どうやら、上条の事を勘違いしているようだ……

まあ……服装からしたら標準的な高校生の着る制服を着用している上条は、海軍にはもちろん、海賊にはあまり見えない……

が、この戦場の中、海兵でない格好をしているものは海賊としか考えられないのに、たしきは会話の内容から”一般人”と認識したようだ。

まさか、海賊が自分たちの事を”ファン”というわけがない……と考えたのだろう。

だが……それはある意味、上条にとつて好都合であつたかもしれない。  
たしきは能力者ではない、剣士だつた。  
だから頼りの右手は通用しない。

このまま一般人と誤解してくれていた方が、何かと助かるかもしないと、上条は考えた。

「えっと……まあ……確かに一般人ですけど……」

「ここは危険です！！私が誘導するので安全な場所へ避難しましょ

うーー

「いや……その……俺には用事が……」

「用事?」

「えっと……そうーモビー・ディック号に攫われた知人が乗つているとかいないとか聞いて……」

攫われてはいないが、知人（白ひげ）が乗っているのは確かだ。

上条は冷や汗を流しながら、たしきから目をそらす。いかにも怪しい雰囲気だった……彼女はそんなことに気が付いていないようだ。

「攫われた知人ですか！？」

「え……ええまあ……」

「その方は私たちが責任を持つて保護するので、貴方は避難してください！」

助けたいのは分かりますが、あの船は世界最強の男……”白ひげ”が乗っています。下手に一般人が動くと、あつという間に死んでしまいますよ！？」

……まさか、その”白ひげ”を助けに行くなんて言えない……

「それでも、俺は……」

「ダメです！ほら、行きますよ。ついてきてくださいね？」

「たしきーーーーーー何やつてんだーーーー！」

少し離れたところから放たれた怒声。

「は……はい！ なんでしょうが、スモーカーさん……！」

「なにをチントラしてんだ！？」

巨大な十手を振り回しながら、こちらを見てくるのは葉巻を2本咥えた男…

海軍大佐…じゃなくて准将のスモーカーだった。

「逃げ遅れた一般人を保護しようとしていたんです……！」

「一般人だあ～？」

スモーカーの目が上条を捕えた。

「……」「いつのどこが一般人だ……そもそも、こんな戦場に一般人がいるわけねえだろ！！」

「え……でも……」

「シャボンディに避難する際に、住民全員避難船に乗ったかどうか、チェックしてから避難船は出航したんだ。つまり残っている奴はいねえはずだ。」

「！？ そうなんですか――――！？」

いや、そのくらいのこと知つておけよ……と心の中でツッコむ上条だった。

「騙したんですね！？」

「いや……騙してなんかねえって……俺は本当に海賊じゃない、ただの平凡な高校生であり一般人だし……あの船に用があるのも本当だし……」

「問答無用です……！」

上条に向かつて刀を振り上げるたしき。

「ふ……不幸だ――――――！」

バシィイ――――――！

「なつ――？」

「……あ……」

上条は、頭上に振り下ろされた刀を両手で受けっていた……すなわち……

「「真剣白刃取りい――――――？」

たしきと上条の声がはもつた。

「ば……バカな……実戦でコレが出来る人が存在するなんて……」

「えつ？ 実戦向きの技じゃないの？」

「当たり前ですよ！－！それは実戦向きの戦術ではないんですよ！－？」

「へ……へえ……」

「つたく……ボサつしてんなら俺が殺るぞ！」

白い煙が上条の方へ向かつてきた。

そう……たつた一人の少年……上条を仕留めるのに手間取つている部下を見るに見かねたスモーカーが、己の手で上条を仕留めよつとしに来たのだ！！

「ホワイトスネーク！－！」

スモーカーの腕全体が蛇型の煙に変わり、上条を捕えようとした。

そう……海軍准将・スモーカーは”モクモクの実”の能力者で煙人間だ。

身体を自由自在に煙に変化させることができるのだった。

だから……通常なら物理攻撃なんて喰らわないはずだった……が……

「そりゃ簡単につかまつてたまるか！－！」

上条は右手に宿る幻想殺し<sup>（イマジンブレーカー）</sup>で、自分を捕えようとするスモーカーの

腕を、煙から元に戻すと、そのまま一気に彼の腹めがけて渾身の拳を放つた。

「！？」

自然系の能力者で煙に変化することで物理攻撃は無効化されるはずなのに、拳があたり一瞬、理解が出来ないスマーカー。

「煙の俺に攻撃しただと！？……まさか……”霸氣”か？いや……そんな感じには見えなかつたな……」

「”霸氣”？なんだよそれ……（後で御坂に聞こうか？）」「……しらねえんだな……なら……新手の能力者か！？」

そう言つて身の丈ほどもある十手を背中から引き抜くスマーカー……上条はそれを見て焦つた。

まさか……もう一度”真剣白刃取り”が出来るとは思えない……あれに当たつたら……”死”が待つてゐる気がした……

（つべおーー俺はこんなところで死ぬわけには……）

その時、現在の上条にとつて都合のいいモノが目に入つた。彼にとつては迷惑かもしれないが、どうしても上条は船に行かなければならぬ。

となると……彼を利用するしか……なかつた。

「（すまん……）……ああ……あんなところで、麦わらのルフィ”が

……！」

「なんだって……」

攻撃する寸前で、攻撃の手を止め、上条の指した方向を見るスマーカー。

確かにそこには、海軍大佐”黒檻のヒナ”の攻撃をかわして進むルフィの姿が……

「麦わらあ――――――！」

すぐさま身体を煙に変化させると、ルフィの方へ飛んでいくスマーカー。

あわててたしきも後を追っていく。

「助かつた……」

元々あの二人組は自分たちの管轄であつた”ローグタウン”で捕え損ねたルフィを捕まえるために、偉大なる航路入りしたのだ。

何があつても”ルフィ”を捕えることが最優先なのだ！！

「なんかルフィとスマーカーの関係つて、  
ルパンを追いかける銭形みたいだな……  
つて、こうしている場合じゃねえや……」

2人から攻撃される心配が一先ず無くなつたので、先へと上条は走り始めた……

危険が迫っていることを知らない親父の待つ船へと……

## 第1-5話 昨日の敵は今日の友（前書き）

お気に入り登録件数が100を突破しました!!  
ありがとうございます!今後も精進していきたいと思います!

それから、この回からオリキャラを少しあつ登場させるつもりです。

## 第15話 昨日の敵は今日の友

「ジョ ダンじやな いわよ うー」

くるくると回りながら海兵を蹴り飛ばしていく脱獄囚Mr.2ボン・クレー。

忘れている人もいると思うので書いておくが、原作ではインペルダウンに残つた彼（…いや彼女というのか？）だつたが、ミサカの能力のお蔭で彼が残る必要がなくなり、ルフィ一行と一緒にマリンフオードに来ていたのだった。

「もう！麦ちゃん離れちゃったじゃないの！  
一体どこに行つたのかしら――――！」

きょろきょろと自分の友人であるルフィを探すボン・クレー。おそらく処刑台にいるエースの方へ向かっているのだと推測はされるが  
……  
あの場所には、海軍の元帥と中将のガープがいる……寿命を削つてまで治療をし、イワシコフが撃ちこんだテンションホルモンでんとか身体を活性化させて動いているルフィ……つまり本当は見た目より体はズタボロで動けないはずなのに、それを酷使して大技を繰り出し続いているのだ……。

その辺の雑魚とならやりあえる身体だと思うが、そんな大物を相手

に戦える身体ではないのだ。

「まつたく：これじやあ兄貴を助けたとしても、麦ちゃんが死んじやうじやないのよ!!」

彼の役にたて そつな作戦を思いついたボン・クレー。

思いついた日が吉田の「こと」で、そく行動に移すことにした。

までは埠頭で、やがてくら一ノの港町を抜到り、そのまゝ埠頭となつてない市街地へ向かう。

「これくらいで氣絶してんじゃないわよ——! ——!  
これじゃあ、実行に移せないじゃないの! ——! 処刑が早まるつて  
いつのに……」

「が、彼が立教した人物は田舎者ばかり。」

暇だ……仕方ないので彼はその場でクルクルと回ることにした。

「あ～～退屈よ～～戦場で退屈って何？…………ん？」

その時、ボン・クレーは奇妙な光景を見た。

路地の壁に向かって、せつせと何か作業をする人影を見たのだ。

「ちょっとーーー！？あんた何者！ーーー？」

人影はピタリ…っと動きを止めて、ゆっくりとボン・クレーの方を向いた。

「うーーー…なにしてんだよ…アイツ…」

上条は自分の目がおかしくなったのかと思つた。

そう…あのラストオーダーとか呼ばれていた幼女を助けるために来

たはずの一方通行<sup>アクセラレータ</sup>が、何故か助けに向かわずに、海兵<sup>…</sup>ではなく海賊を倒しまくっているのだった。

「つづめ……なにしてんだよ……」

上条が呼びかけると、一方通行は不気味な笑みを浮かべて……おそらく足元のベクトルを操作したのだろう……高速でこちらに近づいてきた。

「つて、お前の”反射”は俺には効かない事忘れたのか！？」

右手で突進してくる一方通行<sup>アクセラレータ</sup>の顔面を殴る上条。案の定、あらゆる能力を打ち消す右手は、一方通行の反射にも例外ではなく、メキッといきなりとともに、彼は殴り飛ばされた。

「…………つづめ……おイ……なソノテメヒガこの世界にいソ、だア？」

一方通行が立ち上がり、上条を見て言つた。

が、ここで上条は違和感に気が付いた。

「おい……お前……俺だと分かつて突進んしてきたんじゃないのか？」「突進？俺はそんな」としてねエゼ?」

おかしい…何かがおかしい…上条の中で違和感が広がっていく。  
そんな中、一方通行は何かに気が付いたのか、軽く舌打ちをして首筋についているデバイスの電源を切った。

「つて…いつの間にかに電源がついてンじゃねエか。」

「電源?なんだよそれ?」

「あア?…これがねエと、今の俺は能力が、たった15分しか使え  
ねエンだよ。」

まぁ、予備はたんまりとあるが、もつたいねエだろオ?

つーか、テメエまで、なンでこの世界に来てンだ?」

「制限があるなら、なんでせつきまであんなに能力使いまくってた  
んだよ!?」

「何言つてやがる?俺はこの戦場に来てから一度も能力を使った覚  
えはねエ!…」

「じゃあ…せつきまでは一体…」

「あれ?…一体どうしちゃったのかなあ?」

女の声が2人の耳に届いた。

声がした方向を見ると、そこにはマントを羽織った小柄でフサフサ  
した髪をした女性がいた。

見た感じからすると、海兵ではなさそつだ…私服っぽいし…

だが、”白ひげ”の船では、まだ見たことない顔だった。

…彼女のはいている”網タイツ”からして、インペルダウンの脱  
獄囚だろうか?なんか分からぬけど、脱獄囚の中には”網タイツ  
”を吐いている奴が結構いたし……

「その子は私の支配下にあつたはずなのに…なんで洗脳が解けてんの〜?」

「洗脳?支配?…どういってんだ?」

「…つーか、てめー…インペルダウンの脱獄囚じゃなかつたのかア?同じ船に乗つてたから、てつきり脱獄囚かと思つたぜH」

「まつさか〜!私はね……」

バサリとマントを裏返すと……そこには白地に”正義”の文字が

「私は海軍本部の中佐・マークシャー!」

インペルダウンに駐屯中の海兵で、あんたが軍艦を襲つていふときは、たまたまトイレに行つてたから助かつたのよ。で、あんたのせいで死んだり瀕死になつた海兵達の敵討ちをするために、脱獄囚になりますまして行動を共にしてたつてわけ。幸いにも、私は網タイツはいてたし〜〜

「…でもよ、どうやつて洗脳したんだよ…こいつを。」

「簡単簡単!私は超人系悪魔の実…”ファタフアタの実”の能力者。簡単に言えば、対象者に幻覚を見せる能力なんだけど……ちょっとばかし、条件が合つてね……」

「条件?」

「そう。それは一度、幻覚を見せる対象者の背中に触れさせてもいいしないのよ。」

だから、さつき落ちてくるとき、貴方の背中に触れさせてもいいつたわ。

で、あとは貴方に幻覚を見せるだけで完成!

私の幻覚は超一級ものだから、幻覚をかけた相手の意識を奪い、洗

脳状態にすることなんてお手の物なよ〜。

入隊したのが最近だから、中佐だけど…実力は少将にだつて負けないって思つね。」

うつすらと笑みを浮かべて話すヨークシャン。

「で…あなたにかけてた洗脳は何か分からぬけど…解けたみたいだわね…

でも、洗脳したのは貴方だけじゃないのよ！…」

その言葉を言つた瞬間、上条と一方通行をズラリと取り囲む脱獄囚…バギーについていたはずの脱獄囚からイワンコフについていた脱獄囚まで…さまざまな脱獄囚に取り囲まれていた。  
いや…脱獄囚だけでない。

ここに来てからさらに、洗脳した人を増やしたのだろう…なかには”白ひげ”の海賊も交じつっていた。

「ああ…終わりよ〜！！

さつき貴方は『15分しか使えない』って言つたわよね？  
私が貴方を洗脳して、貴方の能力を使ったのは14分56秒。  
電源をつけたとしても、たつたの4秒で何ができるって言つの？  
あ…やつてしまいなさい！！！」

海賊やら脱獄囚やらが一斉に彼らを襲う。

が……

「てめエ……自分の都合のイイとこしか聞こえてねエンジヤねエの?」

キンツという音がしたかと思うと、彼らを囲い込むように襲いかかっていった海賊やら脱獄囚やらが、とたんに吹っ飛んでいった。

「デバイスの替えは、たんまりあんだぜエ?」

「エ……この4秒の間に……取り替えたの?」

「俺を誰だと思ってんだア?」

学園都市最強の能力者だぜ……もつとも、今はどうだか分かんねエ  
がな……」

「タリ……と笑う一方通行。

「つぐ……なら……『剃』<sup>ヅル</sup>……!」

6種類の超人的体技・通称：“六式”のうちの瞬発的に加速し、消えたように移動する歩行術……“剃”<sup>ヅル</sup>を使い、瞬時に上条の後ろへ回るマークシャン。

「貴方はさつき、この子の攻撃が効かなかつたわよね~!」

じゃあ貴方を洗脳して、この子を倒してもいいわ……！」

トンツとパークシャンが上条の背中に触れる……が、

「あれ？」

何も起こらない……上条は苦笑した。

「あ……たぶん、俺の右手の影響だと思つ……。  
この右手のせいで”念話”<sup>テレパス</sup>が聞こえなかつたし、黒子の”  
”も効かなかつたしな……”

「そ……そんな……」

「ンじゃア……覚悟はいいかア？」

一方通行の能力が炸裂する。

あっけなくパークシャンは”反射”され、氷の割れ目から海へと落  
ちて行つた……

「うわ……相変わらず恐ろしい能力だな……」  
「テメエの能力の方が恐ろしいだろオ……」  
「まア、俺は先へ行くぜ」

彼の視線はすでに打ち止めの方を向いていた。

ラストオーダー

「んじゃあ、俺もさつさといかねえとな。」

一方通行とは反対方向…モビーティック号の方を向く上條……だが……。

「なんだよ…アレ……」

彼の目に映ったもの…それは…

数十体の、まるで”クマ”のような耳の生えた巨大な男がズラリと並んでいたのだった……

## 第15話 昨日の敵は今日の友（後書き）

一応オリキャラ紹介をしておきます。

- ・ヨークシャン

所属：海軍本部・少佐でインペルダウンに勤務中（警備するため）

性別：女

容姿：ヨークシャン・テリアみたいに小柄でフサフサした長い髪の毛の持ち主

悪魔の実：ファタファタの実

（ファンタジー＝幻術ということ）

対象者の背中に触れることで、触れた相手に幻覚を見せ、幻覚を強めて洗脳まですることができる。

一方通行に再起不能にされた部下たちの敵を取るため、脱獄囚のふりをする。

見事、ダイビング中に一方通行の背中に触れることができ、洗脳することが出来たのだが、上条さんの右手のせいで計画がすべて崩れ、最終的には海に落とされた。

海の落とされたので、たぶん今後の出番はない……と思つ。

## 第16話 ヒーローは遅れて登場する

「…とうとう来たわね……」

美琴はゴクリ…とツバを飲んだ。

開戦から約1時間半……七武海のバーソロミュー・くまと同じ姿のパシフィスタが約20体も現れた…

”パシフィスタ”とは、海軍の天才科学者Dr・ベガパンクの改造手術による「人間兵器」……

王下七武海バーソロミュー・くまを再現した肉体をベースに鋼鉄以上の硬度を持ち、口からは大将黄猿のレーザーを再現した金属をも溶かすレーザーを発射する事が可能とした「人間兵器」…

ちなみに、1体造る費用は、軍艦1隻分に相当するらしい……。

そのパシフィスタを率いているのが、海軍本部科学部隊隊長……Dr・ベガパンクのボディガードで、黄猿の部下である”戦桃丸”……名前だけ聞くとパシフィスタ同様、人間兵器のようなものを想像するかもしれないが、こちらはれつきとした人で、昔話に出てくる”金太郎”のような姿をしている。

「……つぐ……ここまでは原作とあまり変わらないわね……  
何故か打ち止めが処刑されそうになっていることと、氷塊が解けなかつた事と落ちてきたメンバーに一方通行と妹達とボンちゃんがいた以外は……」

原作通り……少し前に傘下の船を”白ひげ”的命令で移動させておいたため、包囲することが出来なくなつたのに、それでも……包囲枠からはずれた”白ひげ”傘下の船から攻めていく海軍……

こいつやって船の上から戦場を見ていると分かる……原作通りにパンフィystsタが現れた途端……海兵たちが氷上から引き下がつっていく様子が……

逃げているのではない……誘い込んでいるのだ……これから海賊たちが田の当たりにするであろう……地獄へと……

「……でも、そんなこと……させないんだから!  
…………ん!~?」

その時……一人の男が船に上がってきたことに気が付いた美琴……  
その人物が誰であるか気が付いた途端、ため息がこぼれた。

「……はあ……仕方ないわね……」

その人物はどんどん……近づいてくる……

「止まりなさい。」

美琴は指の上にコインを乗せると、手を男の方に突き出して言い放つた。

自分の額から、緊張のせいか、うつすら汗がにじむのが分かった。

「……そこをどいてくれねえか……嬢ちゃん？」

「どかないわよ……”大渦蜘蛛スクアード”……あなたは間違ってるんだから……」

目の前にいる男……大渦蜘蛛海賊団船長で額に蜘蛛のマークを持つ海賊……”スクアード”を美琴は睨みつけた。

「私の話を聞きなさい！聞かないと……うつわよ？  
コレの威力は一度見たと思うけど？」

開戦直後に美琴は超電磁砲レールガンを一度放っていた。その威力は海軍大将の黄猿のレーザーに匹敵するほどだということは、スクアードも見ていたはず……

こうやって脅しをかければ……話を聞いてくれるはず……美琴はそう思っていた。

だが……

「すまねえな、嬢ちゃん……」

「え…っ…？」

スクアードが瞬時に美琴との距離を詰めてきたのだ！

近づいたところまでわかつたが、急なことで慌てた美琴は、ひとつに能力を使おうとしたのだが、手遅れだった。

「かはあっ…！」

スクアードの拳が一発、美琴の腹に入った。腹の空気が抜けて… 気が遠くなっていく…

「嬢ちゃんの能力は確かに強い… だが…

実戦経験は俺の方がはるかに上だ… 悪く思わないでくれ。」

どこか苦しげに言つスクアード…

「あ…待ちな…さ…」

だんだんと端の方から暗くなっていく視界… 美琴は去っていくスクアードを引き留めようと、必死に手を伸ばしたが… 視界が完全

に黒く染まり……意識が飛んでしまった。

「ちくしょう——！　おい、御坂！　しつかりしろ……！」

数回、ゆするが起きる気配がない美琴。……だが、脈はあるみたいなので、上条当麻はひとまず彼女は置いておくことにした。

美琴の様子からして、気絶したのはついさっきの事……だと思つ。

美琴から戦争開始前にもらった情報から考えると……これをやつた人物は1人しか思いつかない……

この船に乗っているのは、美琴の他に、”白ひげ”が乗っているが、まさか彼が手を下したとは考えにくい……となると……

「…もつ、スクアードって奴が来てるのかー? やばいじゃねえかー!」のままじや…………

上条は”白ひげ”がいるだらうと思われる方向に走つた……このま

まだ……原作通りに”白ひげ”がスクアードに裏切られ、刺されてしまひ……！

何としてでもそれを阻止しないと……－－

「スクアード！ 無事だったか セツキテメエに連絡を」

「ああ……すいません……オヤツさん！」

後方、傘下の海賊団はえらいやられ様だ……－－ハア

「持てる戦力は全てぶつけて来る・・・・・・・・・・・・！」

後ろから追われるんなら望む所だ。

俺も出る…… 一撃とも一気に攻め込む。

他にねエ……！」

「 そうですね おれ達も全員 あんたにや大恩がある。

白ひげ海賊団の為なら命もいらねエ！－！」

あと一つ……角を曲がれば……”白ひげ”の所にたどり着く……  
つというところで、2人の会話が聞こえてくる。  
上条は必死で走った。

そして……上条が角を曲がった時……

今まさにスクアードが大刀を引き抜く瞬間だった。

それを見た白ひげは、よもや自分を貫くためだとは思っていないらしく、再び前を向いた。

「やめひぎ――――――！」

力の限り、上条が叫ぶのだが……

時、すでに遅し……

スクアードの身の丈ほどもある大刀が……“白ひげ”の腹を……

## 「七閃」

上条や”白ひげ”はもちろん……当のスクアードにも何が起きたか分からなかつた。

ただ、急に手から腕、それから足にも痛みを感じよろめいてしまい……気が付くと、握っていたはずの大刀が床に落ちていた……

「まつたく……まさかこんなところで首を突っ込むとは……  
本当に人好しだすね……上条当麻……。」

上条が見たのは、2メートルほどもある日本刀の柄に手を置いている…、ジーンズの片方は太腿の際どい所まで切断して露出し、Tシャツの片方の裾も根元まで切断しているという斬新な服装をした黒髪ポニーテールの美少女…

天草式十字淶教の女教皇ブリエヌテスで、イギリス清教会「必要悪の教会」に所属する魔術師であり聖人……神裂火織が”白ひげ”とスクアードの間に立っていたのだつた。

## 第17話 安堵よりも疑念の方が広まりやすい

マリンフォードの住人達は、現在・避難勧告が出しており、避難先のシャボンティ諸島からモニターによつて人々は公開処刑の様子を見守つていた。

各所より集まつた記者やカメラマンもまたここから世界へ情報を早く伝えるべく身構えている…。

そしてたつた今、そのモニター越しに映つてゐる映像に誰もが釘付けになつていた。

「……ええ。……それが刺そうとしたのは”白ひげ”傘下の海賊団船長……新世界の海賊”大渦蜘蛛！……」

「なんで反旗を？」

「それよりも、あの女は何者なんだ！？」

「いきなり現れたが……」

「といふか、どうやつてスクアードの剣をはじいたの！？  
なにも見えなかつたんだけど！？」

彼らの興味の対象は、”白ひげ”を刺そうとしたスクアードではなく、彼を止めた謎の美少女だつた方が圧倒的に強かつた。

「か……神裂！？」

上条当麻は目の前に現れた女…神裂火織を見て啞然としていた。  
彼女は確か…イギリスにいるはずなのだ。なのになんでここに？

「まつたく…本当に何にでも首を突っ込むのですね？先日もアドリア海で一騒動したそうだと聞きましたが？」

「！…そうだ！それで思い出した！」

ロンドンにアニエーゼやルチア達が言つたと思つんだけど……その…元気にしてるか？」

つい数日前に大覇星祭最終日。上条は大覇星祭の来場者数ナンバーで1等を当て、北イタリア5泊7日のペア旅行を手に入れたのが……イタリアのヴェネツィアで起きた魔術関連の事件に巻き込まれてしまったのだった。そして…その中にいたローマ正教のシスターがアニエーゼというシスターとその部隊のシスターだ。

元々、その前に”法の書”という事件の関係で失態をしていたアニエーゼ部隊だつたが、先日の”アドリア海の女王”的事件で正教から離反し、イギリス清教の傘下に入ることとなつたのだった。

「ええ…清教の女子寮で元気に暮らしていますよ。」

「そうか…よかつた……ってかなんで神裂がここに…？」

俺みたいにマンホールに落ちたみたいには見えないし……」

「あなたはといふ人は…………」

呆れた感じの目で上条を見る神裂……

「実は…………」

「スクアードオ~~~~~!!~!!」

神裂が説明しようとしたときに、どこからともなく不死鳥姿のマルコが飛んできて、呆然としているスクアードを取り押さえた。

「うぬせH~~~~~!

「うせたのはお前、りじやねHかア~~~~~!」

取り押さえられているのにわめくスクアード。

「IJなん茶番劇やめちまえよ~~~~~『白ひげ』~~~~~

もつ海軍と話はついてんだろ~~?

お前ら『白ひげ海賊団』とHースの命は助かると確約されてんだる~~~~~!」

「~~~」

「何言つてんだ!? どういう事だ~~~?」

「おれア……知らなかつたぞエースの奴が……あの『ホールド・ロジジャー』の息子だつたなんて……~~~!」

おれがアンタに拾つて貰つた時……！……おれは一人だつた…………！  
！……なぜだか知つてるよな！？

長く共に戦つてきた大切な仲間達をロジャーの手で全滅させられた  
からだ……！……おれがどれだけロジャーを恨んでるか知つてるハズ  
だ！！！

……だつたら一言、言つたくれりやあよかつた……！……エースはロ  
ジャーの息子であんたはエースを次期『海賊王』にしたいと思つて  
ると……！

……その時はすでにおれアお前に裏切られたんだ……エースとも仲  
良くしてた……バカにしてやがる……！……そしてお前にとつてそれ程特  
別なエースが捕まつた……！

だからお前はおれ達傘下の海賊団43人の船長の首を売り……引  
き替えにエースの命を買つたんだ……！

白ひげ海賊団とエースは助かる……すでにセンゴクと話はついて  
る……！……そうだろ……！？

そんな事も知らずにどうだ……！……おれ達は…………エースの為白  
ひげの為と命を投げ出しここまでついて来て、よく見りよ……！

海軍の標的になつてんのは現に……！……おれ達じゃねエか……！……波の氷  
に阻まれてすでに逃げ場もねエ……！」

ここまで一気に叫んだスクアード。

周囲に動搖が走つたのが船の上にいる上条に出さえ分かつた。

確かにあの人サイボーグ人造人間……パシフィスタは、傘下の海賊団達しか現在  
は攻撃していない……

集団心理……と、いうのだろうか？

少しでも納得してしまい、疑い始めるとも止まらない。  
あつといつ間に疑念が伝染していくのだ。

まあ……冷静になれば誤っていることに気が付くのだが、もともと  
戦場といつ場所は混乱しやすい場所……冷静になる方が難しいのだ。

「ハア……ハア……！」  
「オヤツさん！？ 本当かよオ～～～！？」  
「ウソだろそんなわけ……！」  
「言われてみりや」「イツらおれ達しか狙わねエぞ」

広まつていいく疑念の渦……。

とはいっても、”白ひげ”が刺されなかつたために、原作よりその  
度合いはかなり低いのだが、それでも疑念は広まつていいく……。

「信じたくなかった……おれア目を疑つたよ……！」  
「バカ野郎！……担がれやがつたなスクアード！……」  
「なぜオヤジを信じない！……」  
「てめエまでしらばつくれやがつて、マルコオ！……」  
だいたい、俺を止めたその女や、トリップしてきたとかいうガキ共  
も、本当は海軍の手のモノなんじやねえか！？」  
「はい？」

思わず間抜けな声を出してしまった上条……。  
酷い言いかかりだ。言い返そつと口を開けたその時……

「……海軍とはなんですか？」

真顔で神裂がスクアードに尋ねた。  
場がし——んつと静まり返る……。

「えつ……神裂？お前……まさか……」この世界知らない？

「はい。知りませんよ？それがなにか？」

「……えつと……簡単に説明すると、世界政府直属の海上治安維持組織……かな？」

で、俺とか親父……えつと……今刺されそうになつてた人とか、あのあたりにいる人たちは海賊で、つかまつてているエースつていう人を……ほら、あそこにいるだろ？海軍がアノ人の処刑をしようとしてるから、阻止しようとしているんだ。」

「……そうですか……あなた達は海賊ですか？」

神裂が”白ひげ”を……次にマル「を…スクアードを…最後に戦場を眺めた。

もう少しうまく説明出来たら……と上条は思った。

世間一般に”海賊”といつと悪役……好印象のわけがない。

「偏見の目は持ちませんよ、上条当麻。」

「へつ！？」

「…貴方が”親父”というほどの人物が悪人のわけありませんから。そうでなくとも、いかにも”裏切り”というような感じで刺されそうになつている人を助けないわけにはいきませんからね。」

「へつ！口では何とでも言える！」

正直に言つたらどうだ？」「

スクアードがまだ吠えていた。上条はムツとした。

刺されそうになつたのを目撃した時から、まるで噴火口のすぐ下で辛うじて押さえられていたマグマが吹き出しそうになつているような気持だつた。

それが今、完全に噴火した。

「いい加減にしろよ！…！」

上条の声がマリンフォード中に響き渡つた。

「お前さあ、親父を何で信じられないんだよ！？」

この人が本当に家族を売ると思うのか！？本当にエースと口のことしか考えていない様に見えるのか！？

確かに俺はまだ親父の事をよくわからんねえ。

でもよ、短時間一緒にいただけでも、この人がそんなことする人だと思えない！？ましては長年一緒にいたならなおさらだろ？父親を信じられて、何が家族だよ！？笑わせるぜ！？」

スクアードの顔から怒りの色が消えた……といつても、改心したのではない。

呆然としているだけだ。

「みつともねエじやねエか！……『白ひげ』エ！……

おれは、そんな『弱エ男』に敗けたつもりはねエぞ！……」

「…………」

「クロエボーアイ……！」

「クロエダイル」

……避けられたはずなのだ。

神裂が助けなくとも、体調が全快だったのならば、例え心を許した仲間の攻撃だろうと最強の海賊である”白ひげ”があの程度の攻撃に反応できない訳がない。

それだけ…彼は弱っているのだ。

その時、今まで黙っていた”白ひげ”が動いた。

「スクアード…おめエ仮にも親に刃物つき立てるとは…とんでもねエバカ息子だ！…！」

「ウアア！…？」

「バカな息子を　　それでも愛そう…」

”白ひげ”がスクアードを許すかのように、片膝をつき、スクアードを抱き寄せる……

その姿は本当に息子を許す父親のよつ……

「……ウグ……！？」

「ふざけんな……！お前はおれ達の命を……！」

「……忠義心の強エお前の真つ直ぐな心もえ……闇に引きずり落としたのは……一体誰だ？」

「……海軍の……反乱因子だ……お前を刺せば部下は助かると……！」

赤犬、サカズキ大将は”絶対的正義”を眞とする海軍の中でも、一際苛烈・過激に正義を徹底する硬骨漢。

その思想には幾分の揺らぎもなく、たとえ民衆や味方の海兵であっても自身が『悪』と見なせば容赦なく始末する。

その冷徹さを田の辺たりにした上条は、思い出して鳥肌が立つてき

た。

そんな奴が海賊に対して結んだ口約束を守るはずがない。

……新世界の海賊なら、それくらいの情報を知っているだろう。

「『赤犬』がそう言ったか……お前がロジャーをどれ程恨んでいるかそれは痛い程知つてらア……。

……だがスクアード、親の罪を子に晴らすなんて滑稽だ……エースがおめエに何をした……？

仲良くやんな……エースだけが特別じゃねエ……みんなおれの家族だぜ

……

「……！」

その言葉に涙を浮かべるスクアード……やはりどこかで”白ひげ”を……親父を信じていたのだろう。

「まつたく……衰えてねエなアセングゴク…………！」  
見事に引っ搔き回してくれやがって…………

じろりとセンゴクを見る。

そして……”白ひげ”は両腕を外に向かって振るこおれりうと…………

「ストップ！！！」

「！？」「？」

「み……御坂！？復活早っ……！」

もう復活した美琴が……よほび焦ったのだらう。肩で息をしていた。

「親父は病氣でもう歳でしょ？両方の氷壁はきついって。  
片方は私がやるわよ。」

「マインを手でこじくしながら、まっすぐ”白ひげ”を見る美琴……

「それに、怪我もしてるんでしょ？……って……あれ？なんで怪我

してないの？」

「それなら、神裂が止めてくれたぞ。」

「かんざせ？……？」

神裂を見る美琴……すると美琴の表情にその……なんといつか……”焦り”と”とまどい”の色が混じった。

「グララララ……＝コト…やるならやりひげ～。

お前はそっちの方の氷壁を頼む。」

”白ひげ”に声をかけられハツと我に戻る美琴。

「了解！」

ピンつつ音を立て、美琴の手から放たれ空を舞うコイン……それが再び指に戻つた時、超電磁砲レールガンとして光の閃光が放たれ……

一瞬で氷壁は粉碎された。

「海賊なら信じるのはてめエで決めるオ……！」

反対側では”白ひげ”がグラグラの実を用いて当然のことだが、氷壁の破壊に成功していた。

これで退路が出来た。動搖が収まるに違いない。だが……

(「Jのギスギスした空氣……なんとかならないのかな?」)

上条をはさん、だんだんと険悪な感じになつてきた神裂と美琴……。

彼女たちが同時に上条に問いただすまで、あと5秒……。

## 第1-8話 女の説教つて結構、一方的で長い

「上条当麻！私の見ていないところで何をやっていたか説明しても  
らいます！！」

「アンタ……私の見てないとこりで何やつてたのよーーー！」

上条に神裂と美琴のギスギスピリピリとした声がとんだ。

……上条に2人のステレオ説教が続く……

「まつたく……緊張感のない奴らだよい…………」

先程まで……というか今も戦場だとこいつことを忘れていたらしく3人  
(…正確には美琴と神裂の2人)に向かつてボロッと口にしたマ  
ルコだったが……

「アンタ……なんか文句あんの？」

「少し黙つていってください。」「

ジロリ……つとマルコをにらむ美琴と神裂……

…一瞬、2人から霸王色の霸気……のような気迫を感じ、少し後ず  
さりするマルコだった。

「グララララ…若いのはいいな。」

「親父…笑っている暇があるなら、トウマを助けるよい……」

「なんだ？」

女の戦いを止められる奴はいねえよ。あんなつたら、好きなだけやらせておけばいいのぞ。」

まったく氣にしてない…というより、むしろ楽しんでいる”白ひげ”

そんな中……

上条に降りかかる不幸…をさらに悪化させる人物がもう一人…参戦していた。

「だからあなたという人は…能力がその右手しかないのに、自分の命とかどうと考へているのですか！？」

「本当にいつ～～つも女が絡むと一気に思考力・行動力がアップするわけ？」

「あなたは何故、自分を顧みないで危険の中に飛び込んでいくのですか、つとミサカは問いただしてみます。」

「……なんか1人、ミコトそっくりなのが混じつていてん気がするんだが…気のせいかい？」

「グララララ…気のせいじゃねえな。」

一方……微妙な空気が流れていたのは、海軍側も同じだったりする。何しろ、上条へのステレオ説教はマリンフォード中に響き渡つてゐるのだった。

……聞きたくなくても耳に入つてくれる……

「……ふん。まあいい。

内輪もめをしている最中に、”包囲壁”を発動せろー。」

センゴクは、緊張感がまるでなくなつた戦場にため息をつくと、部下に命令したのだが……

「しかし……まだ、電伝虫が一匹、行方不明でして……  
まだ回線が切れていません……」

「早く見つけ出せ……！」

「そ……それが……脱走した囚人の一味が持つているとのことだつたので、青キジ様が凍らせたはず……だつたんですけど……」

口ごいもむ海兵……

「早く言わんか……！」

「ミサカが持つてるよ、つてミサカはミサカは女の戦いに面白いから参戦してみたかたつたりするんだけど、出来ない身を嘆きながら言つてみる……」

センゴクの隣で鎧につながれたままの打ち止めが、無邪気に言い放つた。

「……ミサカとはもしかして……」

「えつとね……ほらー今、説教している人の中に『ゴーグルかけた子』いるでしょ？

あの子……つてミサカはミサカは素直に教えてあげてみたり……！原作知識に基づいて、少しでも”包囲壁”的作動を遅らせるために、ミサカは電伝虫をバギーたちから強奪したみたい……とミサカはミサカは……って聞いてるの……？」

「……なんだとおおおお……！」

センゴクは絶句した。

よつするに……

まあ……現在のシャボンティはこんな感じだ。

『だから～！聞いてるわけ！？』

『本当にあなたという人は……………。』

『――ってミサカは……………。』

『』

3つあるモニターの中で唯一つながっているモニターからは、まつたく戦況とは関係ないことしか流れていなかつた。

「おい……こつまでこれは続くんだ！！」

「”白ひげ”やースをうつせ……」

「つーか、こいつら何者だ？」

「そもそも、この少年は？賞金首か！？」

「処刑はまだかよ！？」

クレームが殺到する民衆……

「はつ……やまあねえな……」

「何をやつているんだ……海軍は……？」

「……哀れな……」

「……この状況がいつまで続くか占つてみるか……」

影からJリットリと戦況を見ていた超新星達が意外との状況を楽しんでいたりしたのは、別の話……

ルーキー

… つい、ようやく解放されたのは、それから15分後のことだった。

「…はあ…」

「ため息をつくな。ここは戦場なんだぞ？」

「分かつてるつて……つてスタイル！？」

上条の前に立つて煙草を吸っていたのは、赤髪にバー・コードの入れ墨を頬にいれた…どこから見ても”不良神父”という風貌な男…イギリス清教の魔術師…スタイル＝マグヌスがそこにいた。

「いつからそこに…？」

「…お前が説教受けている間だな。」

「じゃあ…助けてくれてもよかつたじゃねえか…」

恨めしそうにスタイルを見上げる上条…

「出来るかよ。

それに…お前のお蔭で手に入れられたからな。」

満足そうにサイン色紙を見せるスタイル……

見るところには、”白ひげ”のサインとマルロのサイン…ついでにスクアードのサイン…

「なんでM-r-2のサインー?」

「ああ。ルーンを張つている間に会つた。」

「……ってか、お前つて…ワンピースの読者だったのかよ…

意外そうな顔を向けると、スタイルは真っ赤になつた。

「うるさい一人の趣味に口出しするなー!」

それよりも…なんでまだ”包囲壁”が作動しないんだ?

話題を変えるスタイル……

その言葉は、ああ…ワンピースつて世界中で読まれてんだな……と、ボンヤリと思っていた上条を、一気に戦場に引き戻した。

「なんだよ、それ!?」

「ああ……それでしたら、まだミサカが電伝虫を手にしているからですね……と言いながらミサカはソレを掲げてみます。」

周囲の人々に電伝虫を見せるミサカ……。

「へえ……意外にかわいいかも……ちょっと見せてよ!」

「お姉様はゲコ太にうつつを抜かしていればいいのです、つとミサカは渡したくないので、そういうてみることにします。」

「うつつ……て!!そ……そんなことないわよ!!

つてか、今は関係ないでしょ!!せつと貸しなさい!!

「いやです、とミサカ……」

「いいから!妹でしょ!!」

「いやなものは嫌です!!」

「よこせ~~!!」

「放しません!!」

「ゴキイ!!ボキイ!!

「「あひ……」」

ミサカと美琴が引っ張り合つたため、一匹の電伝虫がお亡くなりになりました。

「グラララ……仲のいい姉妹だな。」

「親父… 楽観的すぎだよい…」

なんか緊張感がまるでない船の上だつた

「よし……ようやく通信が切れたぞ！！」

切れ方がちょっとアレだつたが、  
気を取り直すセンゴク。

幸いなことに、上条に対するステレオ説教は海軍・海賊の目を引くものだったので、一旦、戦闘がストップしていたのだ。

まあ…ルフィはそんな中でも助けようとしていたのだが、その間は3人の大将に遊ばれていたりする。

「”包囲壁”を作動しろ…！」

3人の大将がルフィから一気に遠ざかつて、陸地に上がったのを確認した途端！ センゴクが叫んだ。

その瞬間…！

“ガーッガーッ…！”と陸と海を遮断する壁が、海賊たちの氷上に閉じ込めたのだった………！

第1-8話 女の説教つて結構、一方的で長い（後書き）

～おまけ～

エース「…な。アレを見て分かつただろ？  
どう考へてもアノ女は俺に氣があると思えるのか？」

エースは遠くにいる美琴を指差して言つた。

美琴は凄い勢いで上条を怒つているが……  
それは誰の目から見ても”嫉妬する女”そのものだった。

ガープ「…………」

エース「…ジジイ？」

ガープ「なるほど…そういうとか……」

エース「よひやく……」

ガープ「お前…強姦したのか！？」

エース「おい……いきなりR-15的発言してんじゃねエーーー！」

ガープ「……なるほど……

本当はあの娘は、あの少年のことが好きなのに、エースによつて犯され……  
子まで作るはめになつたところ」とか……

だから、エースを助け、自分自身の手で復讐を下すために……」

エース「ストオオツプ！！！」

待て待てジジイ！！勘違いだからな！そんなことあるわけねえだろ

！！

打ち止め「み…ミサカの出生にそんな秘密があつたなんて……  
つて、ミサカはミサカは面白そつだからガープさんの話に乗つて、  
涙を流してみたり！！」

エース「誤解を生むからやめろーーー！」

ガープ「エース！！見損なつたぞーーー！」

エース「だから聞けよーー！」

エースの不幸という名の誤解はまだまだ続く……

第19話 身内しか知らないことを他人が知つてたら焦る（前書き）

11月15日、大幅改変しました。

## 第1-9話 身内しか知らないことを他人が知つてたら焦る

「な……なんだよアレ……」

上条当麻は、田の前にそびえ立つた壁に田を見開いた。  
さつきから、海賊たちが、それぞれの必殺技や、大砲を使い、壁を  
打ち破るのとするが……全く効果がない。

見るに見かねた”白ひげ”も参戦し、グラグラの実の力を使って壁  
を破壊しようとすると、あまり効果がなかつた……それほど、強固  
な壁といつことだ。

「……包囲壁よ。」

「ホウイヘキ……つて……包囲壁か！？」

「他に何があるつて言つのよ……」

馬鹿か？！と言つ感じで上条を見る美琴。

「つてめ！――なんでそんな余裕なんだよ！？」  
「余裕に決まってるじゃない！」

「イツと不敵に笑う美琴。

そして、側にいる上条にだけ、やつと聞こえるくらいの大きさの声

で、いつ止つた。

「大丈夫… 策はあるんだから。」

……一気に湾内を囲む”包囲壁”  
みると、壁には大砲が擊てるよつに穴が開いていて、全ての砲口が  
海賊たちに標準を定めていた。

……ただ、よく見るとまく作動できていない箇所が一つだけあつた。

「おい じつなつてるんだーーー完璧に作動させろーーー！」

さつきから計画通りに進んでいないセンゴクは、苛立つ声を漏せなかつた。

「……それが、包囲壁があのオーブの巨体を持ち上げきれず……！…  
どつやら奴の血がシステムに入り込み、パワーダウンしてる模様で  
……！」

見ると、序盤で倒れたオーブが包囲壁と包囲壁の間に挟まっている。  
ますます、センゴクの眉間のしわが酷くなつた。

まあいい……目的さえ達成できれば……

そう……この包囲壁の最大の目的は、海賊共の足場である氷上を溶か  
すことでの、まず、能力者を溺れさせ、溺死させることができること  
うこと。

いくら”最強の男”と称される”白ひげ”とはいつたって、彼だつ  
て悪魔の実を食べ、海に嫌われた人間……泳げるわけがない！

それに……奴らの逃走用の船で”白ひげ”的モビー・ディック  
号も沈めることができ、海賊共の退路の確保を困難にすることが出  
来るからだ。

「締まらんが……！… 始める赤犬……！」

「”流星火山”」

巨大な無数の溶岩の拳が氷の足場に向けて放たれ……

「”？魔女狩りの王……！”」

イノケンティウス

突如放たれてたその言葉と共に、姿を現した炎の巨人が、赤犬の溶岩が氷上の海賊たちにに届かないように覆いかぶさった。

溶岩が巨人に当たるが… 巨人の方が温度が高いので、びくともしていない。

「…誰の能力じゃ…？」

この戦場で他に炎系統の能力者は処刑台のエースしかいない…ちらり…と処刑台を見る赤犬だったが、エース彼は目を丸くしてこちらを見ている… それ以前に海楼石の手錠をしているから、能力は使えないはず…

「一体…？」

赤犬の身体がグラリ…つと揺れた。

巨人が赤犬に攻撃を仕掛けたからではない。

包囲壁がいきなり、ドンドン下がり始めたのだ…！

「な…なんだ…？」

「これも、罠なのか…？」

「お…俺たち困まれてたのに…」

なんで、あっさり元に戻ったんだ…？！」

素直に驚きが出てしまつ海賊たち。

彼ら海賊を閉じ込めるための包囲壁の高さが、一気に下がり始めて…とつとつ元の平らな土地にもどつてしまつたのだ！

「おい……一体何が起つたといつのだ……！」

センゴクが包囲壁を支配する部門に電伝虫エレクトロールを用いて尋ねてみると、そこを担当の海軍の巡査の、慌てたよつた声が聞こえてきた。

「わかりません！！

ただ、何者かにハッキングされたらしく……どうも無理矢理入ったような痕跡がありますので、そこから逆探知をしてことひうです！…」

「ハッキングだと…？」

ばかな！…つとなると、そいつは、この計画を事前に知つていたといふことでないか…！」

……海軍関係者が、両親や子供に伝えたのか？

いや……ここに集めたのは海軍の”正義”に忠誠を誓つてもいい…

……といった海兵達ばかりだ。その海兵の中でも、凄腕の人が勢ぞろいしている、

そんな海兵達から、機密情報が漏れるとは思えない……

……一体、何が起こったんだ？

そもそも…あの炎の巨人は一体…

「私の体は、常に微弱な電磁波を流している…って言つことを利用してね……」

ちょっと、管理部屋にハッキングかけてみたら大成功だったみたいね。

包囲壁が下がって、元通りになつたし。」

「ハッキングって……犯罪じゃないのか！？」

得意そうに話す美琴をたしなめるスタイル…

それを言われ、ムツとしたような顔をした美琴。

「いまさら、何を言つてるのよー！」

だいたい、”海賊”自体が犯罪者でしうがー！

そもそも、貴方…どう見ても学園都市の人間じゃなさそうだけど…なんで能力使えるの？」

胡散臭そうに先程、言靈を唱えると同時に炎を出したスタイルを見る美琴…。

…彼女は『魔術』を知らない。だから彼は『発火能力者』かと考えたのだが…

赤犬の能力に対抗できるくらいの炎を出せる能力者なんて聞いたことがなかつた。

「それよりもー！なんで、魔術師おまえたちまでこの世界に来たんだよー!?」

『魔術サイド』のことをバリバリ『科学サイド』の人間である美琴に知られるのは少々不味い…

だから話題を変えるために、さつきから聞きそびれていたことを聞こうとする上条。

それを聞いたスタイルは煙草を口にくわえた。

「…そうだな…説明してやるか…実はな…」  
「まったく…説明は、あとでいいですから。

それより、いつまで、ここでグズグズしているつもりなんですか？

スタイルの言葉を遮り、そう言い放つと、突然、神裂が船から飛び降りた。

上条のようにだらしなく落ちる（落下する）のではなく、スタツと音を立てないで着地していた。

「おおい！－神裂！－いきなりどうして……？」

「あなた達…馬鹿ですか？」

あの”エース”という人を助け出しに来たのではないでしょうか？」

「あつ……」

すっかり忘れていた上条達だったりした…。

包囲壁が発動しないで終わつた…だから、海賊たちの広場への侵入を、海軍はやすやすと許してしまつていた。

内部で第2ラウンド…ひとつでも言つのがふさわしそうな、戦闘が繰り広げられている。

「おいーこーは女が遊びに来ていいような場所じゃないんだぞー！」

そう言つて、神裂に刀を振り下ろす、大柄な海兵がいた。

それに引き替え細身の体型をした神裂……体格差は歴然としていて、誰もが海兵の勝利を確信した。

「死ね！ 海賊め！！」

だが、彼らは知らない。

今、海兵が殺そうとしている女は、神裂火織は、元の世界で”聖人”といわれるほど、強い戦闘能力を持つてゐる事を……  
それは、この世界に来てからも健全で、

「七  
ななせん  
閃」

神裂の手が柄に伸び、刀を引き抜いた瞬間……

「ぐ……ぐわあ……！」

いきなり体中から鮮血が噴き出す。

痛みのあまり、海兵は神裂に振り下ろそうとしていた刀を落とし、

その場でうめいてしまった。

「命はとつませんが……先を急いでいるので……！」

先に進もうとしている神裂の前に、黒い斬撃がはしる。

辛うじて斬撃を避けた神裂。黒い斬撃が飛んできた方を見ると……

「…………いきなり襲うとは……礼儀知らずですね」

神裂は黒刀を手にした男……王下七武海の1人にして、最強の剣士”ジユラキユール・ミホーク”通称”鷹の目”をにらむ。

神裂はミホークを知らない……が、彼が強いことは、先程の斬撃で分かったので、気を引き締めた。

……下手をすれば……自分が負けるかもしれない……

そう思つくりい、彼は強そうな氣迫を放つていた。

「……俺の黒刀の斬撃を避けるとはな……」

一角以上の剣士のようだ。ビッグだ？一本手合せはビッグだ？

黒刀の先端を神裂に向けるミホーク。

神裂は、はあ……つとため息をつくと、刀の柄に手を置いた。

「仕方ありません…お相手いたしましょう。」

## 第19話 身内しか知らないことを他人が知つてたら焦る（後書き）

以前、solaさんが感想で書いてくださっていた『御坂のハッキング能力』を使わせていただきました！つとはいっても、ハッキング能力を使うのは包囲壁だけに對して：ですが……

## 第20話 “救われぬ者に救いの手を”

「…抜刀術か…？」

刀の柄に手を置いている神裂火織を見るミホークだが……

「…いや…違うな。」

先程の考えを自ら否定するミホーク。  
神裂は少し驚いてしまった。

確かに彼の言うとおり、今から使おうとしている技は、抜刀術ではない。だが、それを対峙しただけで見抜いてしまったのかが分からなかつた。

「なぜ…違つと思つたのですか？」

なるべく『驚いている』という感情を見せないように、平静を務めてミホークに問う。

「…先程、海兵を倒した技…それから”白ひげ”を助けた技…どちらも刀を引き抜いた様子が見えなかつた。」

代わりに、七本のワイヤーのようなものが一瞬、光に反射して見えた。

「……引き抜くふりをして、本当は鞘に隠してあるワイヤーで攻撃していたのではないか?」

「……当たりです。ここまで短期間で見破られるとは思いませんでした。

ですが、私の技は”七閃”だけではありません。

”七閃”を抜けたところで、今度は”唯閃”が待っています。」

「……ほう……他にも技があったのか……

ぜひ見てみたいものだな……」

世界最大の黒刀……”夜”を構えなおし、神裂に襲い掛かった。

神裂は、2m以上もある日本刀……”七天七刀”をスラリと引き抜いた。

キィイイン!!!!

”七天七刀”が”夜”的斬撃を受け止める。神裂の足が少しだけ地面に食い込んだ。

(…重い…一撃の一つ一つが…ですが!…)

神裂は力を入れ直し、”夜”を押し返す。

た。その反動を利用して、後方へバク転をし、ミホークから距離を取つ

「...」

想像していたよりも俊敏に動く神裂を見て、感心したような声を上げるミホーク。

が弱い女かと思つてゐたが、そこそこ手綱のよさだ  
氣を引き締めないとなつて思つたとたん――

「！」

キイイイイイイン！・！・！

一気に距離を縮めてきた神裂の七天七刀を受け止めるニホークの“夜”。

(……反応できなかつたな……)

近づいてきた神裂の速度に対応できなかつたミホーク…。

彼女の力を受けて止め攻防戦を繰り広げられていらされるのは彼女の速度を彼が見切っているからではない。

身体が…本能が…自分の体に刻み込まれた歴戦からの経験…つといた自分の意識と関係のないものが、ミホークの体を動かし、刀を振るつっていた。

「…なかなかやりますね…」

「…お前…何者だ？」

お前のような剣士の尊など、耳にしたことがない。」

「…私は、イギリス清教『必要悪の教会』<sup>ネセサリウス</sup>に所属する魔術師です。」

「魔術師？」

あまり耳にすることのない言葉に眉をひそめるミホーク。

偉大なる航路の島の中には、魔術師やらなんやらといった”オカルト”は存在しているが、どれもこれもインチキ臭いモノばかりだ。  
(例・ナマクラ島・貧困の国「ハラヘッター＝ヤ」)

が、剣を交わして直感したのだが、この女が、嘘をつくとは思えない…

恐らく、本氣で”魔術”を信仰しているのだろう…つと、神裂と剣を交わしながらミホークは考えた。

「…魔術師”<sup>オカルト</sup>が”火拳”と関わりがあるとは思えんな…」

「”火拳”? なんですかそれは?」

「…知らないのか?」

お前は、あの男…を助けに来たのではないのか?」

眉を上げて、驚きの意を示すミホーク。

そのまま片目で処刑台の方をチラリと見て、”あの男”が誰なのか神裂に教えた。

神裂もその視線の先を見て、ミホークの言つ”あの男”が誰だかを悟つた。

「私は別件でここに来たまでのこと。

”ポートガス・D・エース”を見たのは今日が初めてです。」

「別件だと？」

「あなたに話しても理解できませんよ。」

「……なら問おう。」

なぜ、”火拳”の処刑の邪魔をするのだ？」「

…そう言えれば言つていませんでしたね…私の魔法名を…」

「魔法名？」

ピクリ…っと眉を動かすミホーク。

そんな彼を見て「そういえば、この人は魔法を知らなかつたな…」  
つと思う神裂。

神裂は無表情をなるべく維持しながら、口を開いた。

「もともと魔術師は己の目的のために力を振るう人の集団です。

そして”魔法名”とは、その己との”信念”という主観的目標を刻んだ名のこと…

……私の魔法名は……」

彼女の脳裏に浮かぶは、元々所属していた『天草式十字淒教』の面

々…

自分が持つ聖人としての強運のせいだ、代わりに傷ついている周りの面々…

自分が救われるために、代わりに救えなくなってしまった面々…

常に自分のせいで傷つくものがいるところ…

だから、誉れ高き女教皇の座を辞してまで、異国の教会に加入したのだ。

そんな神裂が己に刻んだ魔法名…それは…

「……」—Salvare000《救われぬ者に救いの手を》“！”

神裂の刀から一瞬、光が放たれ、一気にその力も速度も増した。

「…これで…魔法名は”殺し名”と呼ばれることがあります。  
私は…処刑されそうになつて居るあの人に手を差し伸べるため…  
あなたを倒します…！」

「？！」

一方通行には何が起きているのか分からなかつた。

何故、自分が傷を負つていいのだろう？

しつかりデバイスの電源は入つていて……反射もしつかり行つている……

自分の演算は完璧なはず……なのに……！

「ヒヤハハハ……まだやるつもりかよ……」

”正義”の文字を背負つた巨漢の男の拳が一方通行に襲い掛かつた。

もちろん、反射をして跳ね返そつとする一方通行だが……

「ぐはア……！」

その拳は反射されることもなく、彼の顔面にクリーンヒットした。

「そんな……一方通行が……つとミサカは驚愕の色をあらわにしてみます。」

そのそばで呆然とそれを見ているミサカ……。  
彼の能力……反射は、確実に行われているはずなのに……

あの巨漢の男の拳には効いていない……悪魔の実の能力でもなんでも反射する彼の力が……効いていないなんて……

「……往生際が悪いなあ……わざと倒してくれないか?  
この俺様は、こんな命令を終わりにして、ひとつと3億の首を取りにいきてえんだっての……！」

……原作には登場していない男……ゴクリ……とミサカは唾を飲んだ。

「……分かつていみたいね……」

少し離れたところからこれを見ている、小さな影があるとは、一方通行もミサカも思つてもみなかつたのだった。

第20話　”救われぬ者に救いの手を”（後書き）

原作にないオリキャラ登場です！

あつ…でも、次回は番外編を執筆予定なので、本格的な登場はそのあとになるかも…。

番外編 もし”白ひげ”海賊団2番隊隊長が『禁書田嶺』の世界に来てしまった

思いついた番外編です。

本編とは全く関係ありません。

## 番外編 もし“白ひげ”海賊団2番隊隊長が『禁書田嶺』の世界に来てしまった

「あがー————」

どつと流れ出でぐる汗……上条町麻は田が覚めた途端、とてつもない暑さに悩まれていた。

「……ゲツ…Hアロン壊れでいら……

昨日の『ビコビコ』女の雷のせいか?」

とりあえず、栄養補給のために冷蔵庫を開けるが……

電気類がすべてやられていたので、冷蔵庫の中から変なにおいがした。

「全滅か……

つて…うわあ……水漏れが……制服がつ……借りてた漫画あ……」

ぐしゃーーっとなっている上条宅の床……

腐臭があたりかじこに漂つてこる……

(分かつてた——分かつてましたよ……)

夏休みになつたからって、空から幸運が降つてくる訳じゃなつて  
や—————（）

もつ泣くしかない……とつあえず、びしゃびしゃになつていない制服を着る上条だったが……

その時、何かに気が付いた……

「ん？ 布団？ こいつの間に干したんだ？」

何かが皿代の手すりに干されてある……上条がベランダに出て確認してみると……

「…………？」

白い服に青い髪に同じ色の瞳をしたシスターさんと……

……上半身裸でボサボサとした黒髪の男が干させていた。

（お…女子！～わっ～シシシ…スターさんだ…！  
つてか、隣に何で上半身裸なお兄さんが…？…ってかよく見ると拷問受けたよつた傷あるんだけど…！…ってか…背中のつて刺青…！？）

上条が反応に困つてゐると……シスターと男は皿をさめつ……その眼が上条を捕えた。

「オー——」  
「—————」

な……何か言おうとしている……上条は聞き取れりと真剣な顔立ちになつた。

「おなかへつた……」  
「肉ううう……」  
「……」

学園都市……超能力でさえ人の手で作り出す、この科学の町で……

その白いシスターと上半身裸の入れ墨男は七階のベランダに引っかっていた。

それが……夏休みの始まりだつた——。

ガツガツガツ……むしゃむしゃ……ふがふが……

上条の家に唯一残っていた食料を食べつくしていく2人……つというか、上半身裸の男はどこかで見たことがある気がするのだが……思い出せない上条だった。

「まずは自己紹介しなくちゃいけないね。」

シスターの方が、一旦食事を止めて口を開いた。

「私の名前はね、インテックスつていうんだよ？  
見ての通り教会の者です。」

インテックス  
目次？

……つて誰が聞いても偽名じやねーか！

「あ！

バチカンの方じやなくてイギリス清教の方だね。」

「意味わかんねえし……」

妙だぞ……つと上条は思った。

この町のセキュリティーは一級品だ……このどつからどつ見ても外部の少女……つてかシスターがどうやつて入り込んだんだ？

……昨日のビリビリ中学生が引き起こした大規模停電のせいで、一時、セキュリティーがマヒしたのかもな……

「で、そつちは？」

「ん？俺か？俺は――――」

ガタン――――

「「えつ?」」

インデックスと上条の声が重なった。

目の前でいきなり男の頭が、がっくんっと落ちたのだ！

……男はまるで死んだように動かない……

「ちょ……ええ……俺、この年で逮捕とかされたくねえんだけど……！」

「ま……まさか……実はこの食べ物に毒物が混入されてたりとか……

「ふ……不吉な事いうんじやねえ――――――！」

不幸だ……夏休み初日から……こんなことが起きるだなんて……

ずう―――んと落ち込む上条。

「……大丈夫だよ、君は何もしてないって、出来る限り私が弁護してあげるから。」

可哀そなくらい落ち込んでいる上条に、優しい言葉をかけるインデックス。

「……うう……見た感じ13ぐらいの女の子に慰められる高校生って……まあ、慰めてくれて、ありがとな。」

ポンポンっと右手でインテックスの肩を叩く上条…………

はり

「なつ / / / / / ! .. ! .. ! .. ! ..

上条は自分の顔が真っ赤になるのが分かつた。  
なぜなら、突然、インデックスの修道服が……修道服が脱げて……彼女が全裸に……

それに気が付いたインデックスの目が潤み始め……

「イダダダダダダ！」

インデックスの鋭い歯が上条の頭に襲い掛かったのだった。

「うへ…よく寝た…ん?どうしたんだ?」

死んだように眠っていた男が目を覚ました時、上条は噛み付かれた痛みで、なんか泣きそうだった。

「……できた  
「なんかウケるなー針のむしろみてえーー!」

何も知らない男が、元の形に戻りはしたもの何十本もの安全ピンでギラギラしている修道服を着たインテックスを見て笑った。インテックスは何か言いたそうな顔をしていたが……男の余りにも邪氣のない笑いを見て、言う気が失せたようだった。

「で、アンタは?」  
「俺か?俺はエースつていうんだ。おめえーは?」  
「俺は上条当麻。」  
「私はインテックス。よろしくね、えーす!」  
「いやうういや、よろしくなートウマにインテックスーー!」

にかあーっと笑うエース。

「…ん？エースって言つたか？」

「ん？俺を知つてゐるのか？…つて、知つてゐるか。

つてが、俺…処刑されそうになつて…ルフィの奴かばつて死んだはずなのになんで生きてんだ？

胸に赤犬に穴開けられたと思つたんだけどな……？」

頭上に？を浮かべるエース。

「…ルフィ…つてまさか！…！」

友人の青髪ピアスから借りていた漫画…ワンピースを取り出す上条。

「やつぱり…！」火拳のエース”…！…！つて…逆トリップつて奴か…！…？”

「逆トリップ？なんだそれ？」

「どうま…分かるように説明してほしいかも…」

「う…ん…えつと…」

つまりエース…さんのいた世界ではなくて、エースさんは別世界に飛ばされてきた…つてことになりますね。」

上条の説明を聞きながらエースは、まだ腹が減つているのか…菓子を食べている。

「ふうん…別世界か…つて…」

最初は、とくになんとも思っていない顔をしていたエースだったが  
状況が理解できた途端に、絶叫するエース……

あんぐりっと大きな口を開け、目玉が飛び出そうになるくらい驚いていた。

そう……これが、上条当麻の夏休み初日の朝

インデックスと名乗る謎の魔法少女気取りのシスターと、漫画の世界からトリップしてきた海賊だが、これから上条当麻の不幸な人生を、さらに不幸へと導いていく……

だが、そうなることはまだ彼は知らない……彼にとつて今、何よりも重要なこと…それは…

「やばい！…補修に間に合わなくなっちゃう…」

「補修？」

「なんだそれ？ 美味いのか？」

「うまいわけねえだろ！――

つてか、お前たち……俺は学校に行くんだけど、どうするんだ？」

エースは少し考え込んだ。

「別世界…か…まだ、勝手がよく分からない。だからすまないが、しばらくここに置いてくれないか？」

「私はいくよ。」

玄関に向かつて小走りで歩くインデックス。

「行くつて…お前！命狙われてるんじゃねえのか！？」

「命つて…ほんとかよ！？」

真剣な顔になるエース。上条も引き留めようとするが、こけたりなんだりで、逆にインデックスに笑われてしまつていた。

「危ない目に逢うつて分かつて、お前を外になんか放りだせねーだろー！」

「トウマの言うとおりだ！なんかよくわかんねえけど、命が狙われてるなら、俺が守つてやるつてのー！」

「…じゃあ…私と一緒に、地獄の底までついてきてくれる？』

インデックスが2人に問いかける。

上条は、何て答えたらいいか分からなかつた。

「ああ、ついていくつてやるよ。』

エースが言ったとき、インデックスは信じられないような顔をした。

「俺の弟は、俺を助けるためだけに地獄の底まで本当に降りてきやがった。」

なら、兄である俺だって、誰かのために地獄の底まで下りていく勇気がなくてどうすんだって話だ。」

にかあつと笑うエースをポカンっと見るインデックス……だったが

「く……平気だつてば！ 教会まで逃げればかくまつてくれるはずだし……！」

そう言って彼女は走り去つていった……

……のだが、エースとインデックスと上条は数時間後にまた顔を合わせことになる……でもそれは……また次の機会に……

## 番外編 もし”白ひげ”海賊団2番隊隊長が『禁書目録』の世界に来てしまつた

また次の機会に…とか書いてますが、次の機会があるかどうか……  
まだまだ未定です。

次回は本編に戻ります！！

## 第21話 漫画に出でる個体デカいキャラって馬鹿が多い

「うぐ……？ どうなつてんだア……！？」

何故…先程から男の攻撃が…反射しているのに当たるのが、一方通行には理解できなかつた。

こいつもあの…先程ボッコボコに女どもに説教されていた少年と同じ力があるのか…つとも思つたが、そのよつには見えない。

あの少年は、自分の”反射”自体を消していたのだ。

だが、田の前の男は”反射”しているのにもかかわらず、拳を当てるべく。

なぜだ?…学園都市N-01の能力者の脳は思考を続けた。

「……っち…まだ倒れねえのか……はやくしねえと大物の首までとつて一気に准将まで4階級もUPしそうと思つてたのによおー!…計画が台無じじやねえかよつと…」

そつ男がつぶやくのを、殴られ続いている一方通行は聞き逃さなかつた。

(…今…奴はなンて言つたンだ?)

一方通行は”自身の”ベクトルの向きを操作し、一気に海兵から距離をとつた。

「ヒヤハハハ……何だ!? 逃げんのか?」

狂氣じみた笑いを浮かべながら男は走つてくる。

……やはりバカだ……

弱い者が引いたら追つてくる……自分を恐れ……逃げているのだと思つて……

こんなバカに負けていたのかと思つと、一方通行は反吐が出来そうになつた。

「俺がただ逃げると思つてんのかよオ……三下がアアー!」

「何を言つてこらーーー貴様はただ逃げてこるだけじゃないかーー!」

一方通行を追おうとする男だったが、追おうとすると海賊（無名）が現れ、男の行く手を阻む。

そのたびに拳で殴るわけだが……ココは戦場……敵は次から次へと湧いてくる。

そいつら一人一人に相手をしていくうちに、目的であった『一方通行』の姿を見失つてしまつていた。

「つぐそ……どこに行きやがつた……！？」

自慢の拳をふるいながら逃げた一方通行を探す男……

が、”逃げた”と思っているのは男だけで、一方通行は逃げたつもりはなかつた。

わざと距離を置いて逃げたふりをし、他の海賊たちに男の相手をさせることで、何故、自分に拳を当てることが出来たのか……といふことと、男の先程漏らした言葉について考えていた。

（奴の口ぶりから考へると、奴は大尉…。それに加え、誰かから指令を受けて動いているのかもなア…）

ハツキリ言つて奴は馬鹿だ。俺が下がつたを見て、ただ逃げたと思つてノコノコと追つてきやがつた。

まともな奴なら何か策かもつて疑うぜエ…普通は。）

一方通行は男の戦いを見ていた。

男の拳の威力は強い。しかも速い…異様に早い……だが、それだけで、特に能力を持っているようには思えなかつた。

（つたく…）のまま別の奴に任せてても構わねエンだが……性に合  
わねエーー。

俺の”反射”…つていうか”ベクトルの向きの変換”かア…それ自  
身を打ち消しているわけじゃねエンだから、どこかに突破口が……）

そこまで考えた時……不意に気が付いたことがあった。

彼の口がニヤリ…つと曲がった。

「あるじゅねエか…馬鹿を倒す策がよオーー！」

「…はあ…はあ……つたく…あのガキイイ…どこへ…」「  
「よオ…俺が相手してねエ間に、ボロンボロンじゅねエか？」

男の視界に一方通行が入った。  
男の表情が途端にゆるんだ。

「ヒヤハハハ…！！！わざわざ殺されに来てくれたのか…！雜魚が…  
！！！」

男はまっすぐに一方通行に接近し……

「グフアアアー！？」

突如として地面にたたきつけられた。

何が起こったか分からぬ…… 突如として何か巨大な力が男を襲つたのは事実だ。

「てめ……何を……！……！」

一方通行の方を見ようとしたが、すでに遅し。

一方通行は倒れている男の背中に足を乗せて、能力を発動させた。

「グギヤアツアアアー！……！」

一方通行の足が途端に重くなり、地形が変わるくらい地面に沈む男が、醜い悲鳴を上げた。

……ミシリ……ミシリ……とあばら骨及び全身の骨が鳴る……

「どうしたア？俺を殺さねエの？」

「ぐう……なんだコレは……」

「何だ……俺の力しらねエの？」

俺の力は”ベクトルの向きを変換させる力”……それは万物に値すんだぜエ？」

「……？」

一方通行の言っている意味が分からぬ男……苦痛と理解できないのとで顔をゆがませる。

「つまりだア……三下にも分かりやすく説明してやるよオ……

まず、テメエの上の”風”が進む向きを操って、箱の中に空氣をためた密閉空間を作り出したわけだ。

ンで、その密閉空間の下の面だけ、ベクトルの操作を行わねエよつにした……言つならば、箱に穴を開けた……ってわけだ。

ンで……その穴をテメエに向かた状態で、密閉空間の側面を一気に反射で叩きつける

……簡単に言えば、テメエの上空に”空氣砲”を作り出して、一気にブチ放したつてわけだ……

もつとてつとり早く済ませても良かつたンだけじよオ……念には念をつて事だア。」

悪魔の笑みを浮かべる一方通行は、そういう間にも男への制裁を止めない。

「テメエの力はただすばやく動けるつてだけだ。嫌……ちげエな……  
拳がクソ早エだけだ。

つまりだア……俺の反射が適用される前に、手首を返す、つまり手前に引くことで、ベクトル変換を逆手にとって、テメエの拳を俺に

引き寄せてたつてわけだア。」

「……」

「ひひやら図星だつたらしい……男の顔色が悪化した。

「さて……だが、俺の能力については知らなかつたみてエだな……つてことは、こいつには必要最低限の戦法しか与えてねエつてことか……

おい……テメエ……返答次第では、その苦しみから解放させてやる……正直に答えるオ……

「テメエにこの方法を教えたのは誰だア？」

男は涙目で一方通行を見上げた。

「か……海軍……本部……中将……見聞色の覇氣”の使い……手の……”ア  
イズ”様で……す……”  
「ど二にいソだ？」  
「そ……そこまでは……」

一方通行は舌打ちをした。そしてほんの一瞬……能力を解いた。

男はほつとした感じの顔になつた……

「た…助かっ…」

「ア…ン? 何勘違いしてンだ?」

一方通行が笑う。

「命を助けてやるなソ…」言ひてねエゼ?

戦闘不能な男を反射で遠くへと弾き飛ばした。

男は人じみの向こうへ消えていった……なんかデカいサイボーグみたいのがウロチョロこらと一緒に弾き飛ばしたので、おやぢく命はないだろう。

「…つたく…俺をここまで追い詰めるなソ…」アイズ”つて奴はどうだア?」

一方通行は一旦…助けるべき幼女のことを探して、その海軍中将を探すこととした……

今後の害にもなりかねない、その中将を……

## 第21話 漫画に出でる個体でかいキャラって馬鹿が多い（後書き）

オリキャラの名前…出さないで終わつたな……

えつと…彼は海軍の大尉で、馬鹿です。

ですが、拳の速度が「黄金聖闘士にも匹敵すんじゃね?」ってくらい早いという設定です。

そこを買われ、オリキャラ中将”アイズ”の部下になります。

で、アイズの命で、一方通行抹殺に動き出します。

なんとなく木原みたいな攻撃ですが、何度も言つよつですが、木原みたいに頭良くない馬鹿で、考えるのが苦手なので、一方通行の能力については教えられていくくて、ただ「こつしたら勝てる」としか教えてもらつていません。

なんか…かませっぽいキャラになつたな…………ってか、かませですね。

ですが、中将アイズは”かませ”ではあります。

この人についてのことば、現段階ではまだ『見聞色の覇氣』の使い手…とだけだしておきます。

## 第22話 他に好きなキャラがいると、主人公が空気になつていいくことが多い

オレンジ色のレーザーが、数体のパシフィスタの腹を貫く。その後から遅れて響く、レーザーの「ガガガ」と音……

「あ～！！スカッとする！！」

そういう間にも、キンッと指でコインを弾き超電磁砲をパシフィスタ目がけてぶつ放し撃していく御坂美琴ヘルガがいた。いくつか腹に穴が開いたパシフィスタは派手な爆発音とともに散っていく……

その様子を、まるで、ゲームセンターのゲームのように結構楽しみながら壊していた。

「ひっやあー何をやつるんじや、小娘！！！」

まるで金太郎を思わず風貌をした男…戦桃丸が美琴の前に立ちふさがつた。

「何つて…あのデカブツを壊していに決まつてるじゃない。」

つといつている間にも一体のパシフィスタがズカアアアンッと音を立てて爆発していた。

「つぐ…パンク野郎がどんな思いをして作ったのか知らんで…！」

アシガラドッコイ  
”足空独行”……

「ますひ！……」

慌てて磁力を操り、砂鉄で防御壁を作る美琴だつたが……

「くはあーーー！」

戦桃丸の突っ張りを抑えきれずに、宙を飛んだ。

……なんとか地面に激突する寸前に砂鉄をクッショーンのように操ることで、ダメージは抑えられたが、それでも身体がふらついてしまつ……

(長期戦は無理そうね……)

美琴はチラリ……と、処刑台を見て今がいつ頃なのかを確認した。

……まだ、エースも幼女も首がつながっている……

ぶうううん……つといつまるで蜂の音を何十倍にもしたような不可思議な音が戦桃丸の耳に響く……。

見てみると、黒い鞭のようなものが、何十メートルもあるレイピアのようなものが空中を漂っていた。

「……なんじゃいそれ？……砂鉄か？」

目を凝らしてみると、砂鉄の巨大な塊が磁力によつて操られ、振動しているらしく……

「さてと……行くわよーーー！」

砂鉄の鞭が、戦桃丸に襲い掛かった。

……さて、この物語では空氣と化しているルフィは……  
青キジの氷の槍で右肩を貫かれ、その痛みでうめき倒れていた。

「お前のじいさんは恩人だが……」

仕方ねえよな、男一匹選んだ死んだ道。」

青キジはそういうと、ルフィにどごめを刺そつと構えた。時――

「イノケンティウス――！」

青キジに炎の巨人が襲い掛かつ。

あつという間に炎の中に閉じ込められる青キジ…

「はあ…はあ…アレは…さつきの…？」

「大丈夫か！…？」

2人の人物がルフィに駆け寄った。

「……少し休んだ方がいいぞ。」

「関係ねエ！…俺が…エースを助けるんだ！…！」

氣力だけで立ち上がるうとするルフィ。

「あらら…暑いねえ…」

イノケンティウスの炎には”霸氣”がないため、青キジを”水”にしただけで、復活を許してしまった。  
…が多少はダメージがあつたようだ。

「おい、上条当麻！ルフィの援護をしろ。  
三大将はここで僕が少しでも食い止める。」

「ステイル！？大丈夫か？」

「問題ない。先程、市街地全域にルーンを張つてきた。」

「…………そつか……行くぞ、ルフィー……」

フラフラナルフィの腕をつかみ、走り出す上条。

「先程の小僧……！逃がすか……！」

身体を溶岩に変えてルフィと上条に襲い掛かる赤犬……だったが……

「いかせるかよ。」

スタイルがその間に入り込み、イノケンティウスで対抗した。

「……？ワシの炎が……」

驚く赤犬。それに引き替え余裕の表情を見せるスタイルは、煙草をふかしていた。

「……僕のイノケンティウスの温度は3000℃。  
マグマなんかよりずっと上だ。」

「怖いねえ……新手のロギア系能力者だね。」

そこまで『怖い』とは思つてなさそな顔をした黄猿がつぶやいた。

「… もと… どれだけ食い止められる」とやう…」

炎の剣「吸血殺しの紅十字」を発動させ構えるスタイル。

… ぶつちやけ、先程からイノケンティウスを酷使しているせいで、体力の減りが半端なかつた。

が、元の世界に帰るには… ここで『麦わらのルフィ』と最低でも『Hース』か『白ひげ』を生かさなければならない。

ここでルフィに無茶させてもう一発『テンションホルモン』を撃たせるより、体力を温存させておいた方が好都合だ… とスタイルは考えていた。

「… はあ… はあ… アイツ大丈夫なのか！？」

ルフィが少し前を走る上条に尋ねた。

「問題ないさ。ステイルは… あの炎は人を護るための力だからな。」

… 人と言つても、一人のシスターの少女だけだが… それでも『守るための力』には変わりない。

「… それよりも、大丈夫じゃないのはお前だよ…！」

「問題ねえ…！」

「いや、ボロボロだろ…！ 御坂妹が言つてたぞ…！」

『猛毒を喰らつたりしてフラフラなのに、テンションホルモンで痛みを忘れてる』って……あとで……

「あとで俺の体がどうなつても構わねえ！！それよりも……エースを助けられないほうが、死んでも死にきれねえ！！」

荒い息とともに放たれる主人公の言葉……それは彼の覚悟……

「……はあ……俺の不幸指数高まりそうだな……」

上条はため息をついた。

「じゃあ、出来る限り助けてやるから、無理すんなよな、主人公！」

「ありがとな……えっと……」

「俺の名前は……上条当麻だ。」

「そつか！ ありがとな、トウマ！ ……！」

2人の主人公が処刑台を目指す。

……エース処刑まで……あと数刻！！

## 第23話 怖いシーンって田を背けたくなるけど、ついつい見てしまつ

「エリを通りたきや……

ワシを殺していけい！……ガキ共！……」

つといい伝説の海兵…であり、ルフィの祖父・ガーブ中将がテントと処刑台の下に位置する椅子に腰を掛けた。

伝説の海兵が守りに加わったつことこのことで、ざわめく海賊たち…

「つぐそ…爺ちゃんか…」

ルフィも例外ではなかつた…が、歯を食いしばり、身体に鞭を撃ちながら走り続けていた。

「えつ…あれ…お前の爺ちゃんなのか？」

原作知識が乏しい上条当麻が驚いて尋ねると、ルフィは処刑台の方を向いたまま、うなずいた。

「…つてか…爺ちゃんがいたとはな…」

意外だ……じいつにエース以外に血縁がいたとは…

まあ…それは置いておいて……上条は走りながら自分の右側を走るルフィをもう一度見た。

…冗談なしで全身が極限状態のようだ。彼が今、気力という力だけ

で走つてゐるのだろう。

このままでは…ルフィの身体が壊れて再起不能になつてしまふかも  
しれない。

だが、ここで『休め!』とは上条には言えなかつた。

だつて…自分が逆の立場だつたら、再起不能な体に鞭を打つてでも  
走り続けると、思ったからだ。

上条は”家族”つと“いうものがどんな感じだつたか、いまだにピン  
つとこない。

記憶を失つてから何度も家族とは会つているが、なんとなく他人  
と感じてしまうことがある。

でも、ルフィは違うのだ。

”家族”として笑いあつたり喧嘩したり冗談を言い合つたり…共  
有する時間があつたはずだ。

生きている限り、笑いあえる…生きている限り、喧嘩も出来る…

生きている限り、助けられる…でも、死んだら何もできない…

だから彼は走り続けるのだ。

走つて走つて…命の限り走り続け…助けに行こうとする…

例えその道に…たぶん同じくらい大事な祖父が仁王立ちしてたとし  
ても…  
死に行く兄エースを助けに走り続けるだろう…

上条は自分の右手を見た。

（神の加護を消す右手……これで……エースの死という幻想をぶち壊してやる……）

ぎゅっと拳を握りしめ、ルフィの速度に合わせて走り続ける、上条だった。

「……どうした、火拳？」

地面に頭が着きやうになるくらい、背を丸めるエースを見たセンゴクが問いかけた。

「俺は……腐ってる……」

絞り出すように言葉を吐くエース……

そんなエースの耳に響いてくるのは仲間たちの声……

「エース～～～！！！」「エース！！必ず助けるぞ～～！！！」

「諦めるんじゃねえぞ～～～！！！」

その声一つ一つが彼の胸を刺す。

「…くそ…俺は…歪んでる…！」

こんな時に

親父が…弟が…！仲間たちが…！…

血を流して倒れしていくのに…！…！…！

俺は嬉しくて涙が止まらねえ…！…！…！」

ボロ…ボロ…っと大粒の涙をこぼすエース…

「今になつて命が惜しい…！！！」

肩を震わせ…涙を流し続けるエース…

「いいな…涙を流せてつてミサカはミサカは羨望のまなざしを向けてみたり。」

彼の隣に座っている”打ち止め”がそつとつぶやいた。

先程までの年相応な子供っぽさが消え、まるで彼の母か姉であるかのような微笑を浮かべていた。

「ミサカは妹達の最終信号だから…それだけのために単価18万円  
シスターズ ラストオーダー

で作られたモノだから……あなたとは違つて、また作る」ことが出来る存在なんだつてミサカはミサカは説明してみたり。  
だから、ミサカと違つて貴方はオリジナル……作り置きのないモノで必要のあるものだから涙を流せるんだよってミサカはミサカはそう言つて、ほほ笑んでみたり。」

その時の”打ち止め”の顔を見た者はいなかつたが、その声は普段の彼女から想像もつかないような慈愛に満ちた声だった。

「お前…何歳だよ？」

「ん？まだ製造されてから一年もたつてないよってミサカはミサカは、前もこんなこと言つたよな～っとか思いながらも元気よく答えてみたり！！」

つていうかなんで一方通行来ないの！？あの人なら何でも反射させてくるつて信じてたんだけど、ミサカはミサカは少し顔を膨らませてみたり！！！」

「来ないわよ…その人は。」

聞き覚えのない声がエースと”打ち止め”の耳に入ってきた。

”打ち止め”が振り返ると、そこには”正義”の文字が入ったコートに着せられている感じの少女がいた。ツインテールが特徴的で歳はまだ小学生…にもなつていないのでないだろうか？

「つて、あなた！！今…私のことガキだつて思つたでしょーー！」

少女が憤慨している。セングクがため息をついた。

「誰でもお前のことにはガキだと思うと思つたぞ。」

「セングク……お前もか……まあいい。もう慣れたから……  
よく聞けよ……えつと……”ラストオーダー最終信号”って言うのかな？」

私の名前はアイズ！！海軍の中将で歳は34の独身で恋人募集中だ  
！！！」

そう言つてテントとポーズをとるアイズと名乗る少女、…じゃなくて女。

”打ち止め”が冷ややかな目を向けた。

「最後の恋人募集中つて言つのはいらないんじやないつてミサカはミサカは冷ややかな目をしてみたり。

つていうか、海軍中将つて嘘つかない方がいいよ、うそつきは泥棒の始まりだよつてミサカはミサカは教えてあげたり。

「嘘ついてないし。

……そうだな……いいこと教えてあげようか……あんた……」

「ジイ……つと”打ち止め”を見るアイズ、…そつして、ニヤリつと意地悪そうな笑みを浮かべた。

「…8月31日の深夜にアクセラレータという白髪の少年に、肌身離さず持つていた薄汚れた空色の毛布を奪われ、全裸を見られた……んでしょ？」

「な……なんでそれを知ってるの――――――つてミサカはミサカは羞恥で顔が赤くなるのを押さえられなかつたり――――――」

”打ち止め”の顔が熟れすぎたトマトみたいに真っ赤になった。  
それとは逆に（すでに泣き止んでいた）エースが真剣な顔をしてアイズをにらんだ。

「そうか……噂には聞いたことがあつたが……

相手の記憶まで読み取ってしまう程の”見聞色の霸氣”的使い手なのに、容姿がガキという中将はお前か……」

「君ねえ……まあ合ってるけど……ガキってどこ以外は。それよりも……私はセンゴクに用があつってきたのよ。」

『ガキ』と呼ばれた怒りでピクピクと眉を動かすアイズだったが、なんとか思いどどまりセンゴクに向き合つた。

「妙な少年が何人かいるんだ。

1人はまだいい……何でも反射する能力を持つた少年で、こつちは私の部下総動員させて止めにかかつている。

で、もう一人は、お前も見たかもしけないが……先程、船の上でハーレム状態にあつた少年だ。

そつちの少年の方が厄介だ。」

「厄介だと?なぜだ?」

「……分からんんだ。私の”見聞色の霸氣”を使っても、彼の過去は読めないんだ。」

センゴクの顔に衝撃が走つた。

「……おそらくは……彼がさっきから見せている“能力を消す能力”に  
関係しているんだと思うんだけどな。」

「……その少年に対する策はないのか？」

「あるいは決まってるだろ?」

また、意地の悪そうな笑みを浮かべるアイズ。まるで……いたずらを  
思いついたときの子供の表情に似ていた。

「……まあ……そのための下準備として……わざと処刑をやつた方が  
いいと思つ。」

彼の隣には今、“麦わら”がいるからね。“麦わら”は火拳の首と  
胴体が離れば、動けなくなるのが目に見えているからね。

「……確かにな……」

遠田でルフィを見るセンゴク。

そして……何かに決心したように息を思いつきり吸い込んだ。

「今からお前たちに”未来”がないことを見せてやる……!」

身体が本調子とは程遠くて中々前へ進めない”白ひげ”……互いに  
剣をぶつけ合つていい三ホークと神裂……そして満身創痍のルフィ  
と上条をはじめ、海兵から海軍までが処刑台に注目した。

「やれ。」

非情の声がやけに広く混乱しているマリンフォードに響き渡った。

2人の死刑執行人が持つ剣が高く振り上げられた。

「やめろおおお————！」

力の限り叫ぶルフィ！――！――！――！――！

無意識のうちに”霸王色の霸氣”を繰り出すルフィ！――！

……しかし、ここで忘れてはいけないことがある……

ルフィの隣には、上条当麻がいた。

……彼の右手に宿るは”幻想殺し”…すべての能力を無効化する力  
だ……

それは当然、”霸王色の霸氣”にも適応される。

結果……”霸王色の霸氣”は”右手”によつて消されてしまい、た  
だの叫びとして木靈する。

ドサッ！…！

無情にも2本の剣が振り下ろされた。

## 第24話 あの処刑台って数時間で作り上げたものだと思つ

ルフィの叫びが響く中……無情にも剣は振り下ろされた……

……が……

「……え……？」

エースの首は胴体とつながっていた。

剣は2本とも……エースの頭をかすつて髪の毛2・3本を奪つただけで……彼の頭スレスレノところに刺さつていた。

「な……何をしている……！」

死刑執行人を怒鳴るセンゴク。失態を犯した執行人は慌てふためいて剣を再び振り上げようとするが、処刑台に勢いよく刺さつてしまつたので、なかなか抜けないようだ。

「……面白いことするね……」

センゴクの傍らにいたアイズがくつくく…つと笑った。

「…んでも、抜けないからって尻もちでもついて…そのまま火拳の手錠に触れて…手錠を外してやろうつてかい？」

…そりだろ？ 執行人？ ……いや…

バロック・ワーカスのM・3とM・2！！」

言葉を放つ的同时にアイズは袖に隠しておいた飛び道具・クナイを執行人に向かつて投げつける。

しかし…それは刺さることなく、片方の執行人の蹴りによつて落とされてしまった。

「引つかかつたわね～～～！」

でも、あとちょっとだつたのにい～～～！」

クナイを落とした執行人の顔が脱獄囚・M・2ことボン・クレーの顔へと変貌した。

「な…何バラしているんダカネ！～～～！」

よく見ると、もう片方の執行人の恐怖で歪んだ顔はM・3のモノだった。

「！」まで来たら、どうしようもないでしょ……？

あの一人はアチシが相手するから、アンタはさつさと鍵を開けて、麦ちゃんの兄貴と、その女の子を助けるのよ……！」

「助けるだと？ 残念だが……それは無理という話だ……！」

センゴクの体が急に“デカくなり”金色に光り始めた。  
その姿は……まるで大仏のよ……

「お前たち全員……私の手で処刑するのみ……！」

ヒトヒトの実モデル”大仏”的能力者……センゴクの拳がボン・クレーとM・3……そして手錠につながれ身動きが出来ないエースと”打ち止め”に襲い掛かつた。

「う……うひや……！ 絶体絶命かもってミサカはミサカは泣き叫んでみたり……！」

「もうダメだカネエエ……！」

「何諦めてんのよ……！ はやくドルドルで護りなさいよ……！」

ボン・クレーは”打ち止め”と一緒に泣き叫ぶM・3に向かって、クルクル回転しながら叫ぶ。

M・3も死ぬのは怖いので、あわてて自身の能力……”ドルドルの実”的力を使い、腕から鋼鉄の硬度を誇るロウで防壁を出した。

白い口ウが4人を覆い衝撃を少しでも軽くしようと身構えていたが  
……今までたつてもセンゴクの拳はやつてこない……

「つたく……なに泣きべそかイでンだア？」

「！！」

1人の少年の声が4人の耳に届いた。

口ウをどけた向こうに広がっていたのは……

自身の拳を”反射”されて、よろめくセンゴクと…顔をしかめるア  
イズ…そして…

「あなた一方通行！――！」

”打ち止め”は、赤眼で白髪の少年… アクセラレータ一方通行の姿を見つけると、嬉しそうな声を上げた。

「助けに来てくれたんだね！ってミサカはミサカは嬉しさで涙を流  
してみたり。

つてか、怖かつたからもう少し早く来てほしかったかもってミサカ  
はミサカは本音をこぼしてみたり。」  
「世話かけやがってエ…ガキが。」

ふくれつ面で涙目になりながらも、嬉しそうな顔をした”打ち止め

”の顔を見ると、安心したような表情を見せた一方通行。そしてM・3から事前に彼が口ウで作った鍵を受け取った。

「……つたく……後で再教育が必要ね……」

一方通行に負けた自分の部下を思い頭を押さえるアイズ…

「いいわ……その”打ち止め”って子は、連れ帰つて構わないわ。」

「正気かア！？」

「ええ……でも……」

火拳のエースは別よ！……

腰からフリントロック式のピストルを取り出し、引き金を引くアイズ…

だつたが……

「エース！……！」

2人の間に割り込んできた人影の身体が、ぼよん！…と銃弾を跳ね返した。

「る……ルフィー！？」

「麦ちゃん！？」

「そう……その人物は、麦わらのルフィだったのだ！！」

「ありがとな、ボンちゃん！それから3！！エースの処刑を邪魔してくれて。」

太陽を思わず満面の笑みを浮かべるルフィ。

処刑台の上は上で色々とあつたので、ルフィが革命家”イナズマ”が作つた処刑台までの”橋”を使って処刑台に乗り込んでくることに気が付かなかつたのだった。

ちなみに、その”橋”は海軍中将ガーブによつて壊されてしまい：なんとかゴム人間のルフィは渡ることが出来たが、身体的には常人の上条当麻は渡つてこられなかつたのだ。

「はあ……はあ……今……鍵を……」

ハンコックから貰つたエースと”打ち止め”の手錠の鍵を取り出すルフィ。

だつたが……

「……？」

突如放たれた黄猿のレー・ザーのせいで鍵がまつ一いつになってしまったのだ。

「つてめエ……せつかくの鍵を……！」

怒りを隠せない一方通行だつたが、その表情は足元が大きく揺れたので崩れてしまった。

元々急ぐじらえの処刑台だ。

こんな大騒ぎに耐えられるわけがない。処刑台が半壊し、一方通行・”打ち止め”ペアは落ちないですんだが、ルフィイ達は落ちて行った。

「つぎやああ……どうすんのよ……！」

「鍵を作る！今すぐ錠を外すんだカネ！……」

ドルドルの実の能力を使い再度、ロウで合鍵を作り出すM'3。

「わがつた！……」

「逃がすな！……処刑台」と撃て！……」

処刑台の上からアイズが海兵達に叫ぶ。すると海兵達も同じことを考えていたのか、砲弾が発射された。

「早く受け取れ！！」

合鍵を作り終え、ルフィに渡すM'3。ルフィは必死でそれに手を伸ばす。

そうしている間にも、砲弾が迫つてくる。

すでにアイズとセンゴク…それから一方通行と”打ち止め”は、砲弾から身を守るため処刑台を離れていた。

そして…すぐに砲弾が処刑台に激突し…大爆発を起こした。

「…本当にアイツら…無事なんだろうなア…？」

ルフィ達を砲弾から助けに行こうとする自分を止めた”打ち止め”に向かつて、一方通行は問い合わせた。が、”打ち止め”は笑っていた。

「大丈夫だよ、ってミサカはミサカは笑顔で答えてみる…！」  
「…本当かア…！？」

その時、一方通行も”打ち止め”の言ったことが本当だと確信した。

なぜなら……爆炎の中に炎のトンネルが出来ていたから……

「お前は昔からやうさ……ルフィ！――！  
俺の言うこともろくに聞かねえで  
無茶ばかりしやがって！――！」

それは、Hースの作り出した炎のトンネルだった。

「Hース！――！」  
「ウオオオオオオ――！――Hース――！――！」

兄を助けることが出来た！――つといふルフィの嬉しそうな声が  
そして、彼が自由になつたことを祝福する仲間たちの声が……戦場マリンフォードに響き渡つた。

## 第25話 騎士道精神つてカッコイイ氣がするナビメビノベニ

「火拳が解き放たれたか……！」

その様子を苦々しげに見たアイズは電伝虫を取り出して、何やら部下たちに指示をしていた。

「……まだそこにはいたのか？」

戦場の方を向いたまま、一方通行アケセラレータと”打ち止め”に語りかけるアイズ：

「テメーこそ、俺たちを放つて置いていいのかア？」  
「構わないさ。

アンタの能力への対抗策は未定だし……

それに、そつちの嬢ちゃんは知らないが、アンタはこの戦場に興味がないみたいだからな。

……とはいっても……元の世界に帰れないみたいだがな……

「……テメエ——なんでそれを……!?」

アイズに詰め寄る一方通行。アイズは両手を上にあげて降参の意を示した。

「私は”見聞色の覇氣”の使い手でね……記憶まで読み取れるのさ。

「……方法は知っているのか？」

「ガクエントシとやらに帰る方法か？」

さあな…………ここに来ることが出来た理由を知っている奴なうこ

が……帰る方法は分からん。」

「……来るこどが出来た……理由だと？」

眉をしかめる一方通行。

「あそこで……へばつてゐる赤髪の少年がいるだろ？」

彼の知識では『古代ギリシャ系魔術の応用でクロノスとカイロスの魔術構築式を無理矢理融合させたら、空間にゆがみが生じた』……

つと記されてあるぞ。」

「魔術？」

「まあ……これ以上は話しても無駄だな。

で……ものは相談だ。」

真剣な顔立ちになつて、一方通行と”打ち止め”に向き合つアイズ

……

「どうだ？ 帰る方法が見つかるまで、海軍に入隊しないか？」

「……

「待てーこの場から逃げる気か、火拳に麦わら。」

攻撃をかわし…時には反撃しながら進むエースヒルフィの前に立ちふさがる、銀のような白い光沢のある槍を構えた一人の海兵がいた。『正義』という文字の入ったマントを着用しているので相当の地位なのは予想できるが、マントの下は普通に雑兵が着てそうな海兵の制服だった。

「敵に背を見せるとは……戦士として恥ずかしいと思わないのか！」

？  
「こや」

声が重なるルフィとエース。

「だつて俺たち…海賊だしな…お宝取り返したら逃げるのが常套手段だ！」  
「戦士じゃないんですね。」

その問いに怒りを覚えたのか、その海兵は槍の先端を2人に向けた。

「その答え……男のくせに騎士道がなつとつとらんぞ……  
我が正してやる……！」

「いや……俺たちに物理攻撃は無理だからな……！」

そのまま『ゴムゴムのピストル』を繰り出すルフイだつたが……

「な……なんだこれ……？」

槍に触れた瞬間、槍がグニャ～っと曲がり……溶け出し……液体となつてルフイの腕を捕えたのだ。

「ルフイ……！」

「……貴公では弟を助けることは出来ん。」

「やつてみねえと……！」

「待つて、エース！……！」

火拳を繰り出そうとするエースの前に割り込む短髪の少女がいた。余程慌ててきたのだろう。髪がぐしゃぐしゃで息切れが半端なかつたが、それでも残った力で立っていた。

「お前は……確か……俺の嫁疑惑が駆けられていた女……！」

「よ……嫁！？し……失礼ね！……わ……私はまだ処女よ……！  
それに私には『御坂美琴』っていう名前があるの……！……  
つて……そんなことより……火拳を使っちゃダメ……！」

耳まで真っ赤になつてエースに訴えかける美琴……

「なんでだ！？弟が……」

「あの光沢は、間違いなく『水銀』よ……！」

「すい……ぎん？」

水銀が何であるか分かつていないエース……だつたが……

「当たりだよ、御嬢さん。」

美琴の読みはぢうやら当たりだつたようだ。

パチパチッと軽く手を叩く海兵。

「我が名は海軍大佐メスヘル……見ての通り”マキュマキュの実”

……つまり”水銀”操る能力者だ。」

「だから、水銀ってなんだよ！？」

「本当に知らないの！？」

常温でも液体という珍しい……非常に強う毒性を持つた鉱物よ……！  
それが火にあたつて氣化でもしたら……水銀中毒になっちゃうわ

！！！」

それをきいて拳をひっこめ、唸るエース。

「さすがにそれは……ってか『騎士道』とか言っている割には自分が行つていることと矛盾してんじゃねえか？」

「騎士道とは、主の命を叶えること……主に一心に使えることを最優先とするのだ。」

「主に仕える？意味わかんない！！

どうせ主って言つても高みの見物している天竜人には頭も上がらぬ、へっぴり腰の弱虫な存在なのよ……？」

美琴が水銀対策を必死で考へてゐる時間稼ぎで口にした言葉は、メスヘルを怒らせたようだ。

「……確かに我が主は海軍に所属してゐる……ゆえに天竜人には逆らえない。

しかし、それが今、何の関係があるので！？

我が主は……誤つて実を食べたせいで……村で『異形』と罵られ能力で村を壊した我を……軽蔑の目で見ないで下さった……

本来ならインペルダウン行きの我を、元来の望みであつた海軍への入隊を許可してくださいさつた……

我が主……アイズ様を罵るなど断じて許し難し……！」

槍をつかんでいない方の手を水銀に変化させ、美琴に襲い掛かつた

のだ。

美琴は「インを取り出すが、疲労のあまり足がもつれてインを落としてしまった。

カラカラ……とインが遠くへ転がっていく……

「まづい……」

思わず田を開じる美琴……だったが……

「あ……あれ?」

水銀はいつまでたっても来ない……恐る恐る田を開けると……そこには泥だらけの白いシャツを着た少年の後ろ姿が見えた。

「ば……ばかな……なぜ……我的水銀が……!？」

「水銀なんて危なつかしいモノ扱うんじゃねえよ。」

それごとに、少年はそのままルフィを放さないでいる槍にも触れた。

もともと槍はメスヘルの腕の一部が変形してできていたものだったので、彼の”右手”が触ると槍は見る見る間に元の腕に戻った。

「ゲホッゲホッ……サンキューなトウマ……ってかすげえな。」「じゃあ、俺が腕をつかんでいる間に、こいつを倒してくれないか？」

少年・上条当麻はそう言つて笑つと、Hースがニヤリと笑つた。

「言われなくともな。

火拳！……」

「ぐわああああああ！……」

Hースの技・”火拳”の直撃で意識を混濁するメスヘル。

ちなみに、火が腕に移る前に上条は離れていたので能力は使えたらずなのだが、久々の打撃攻撃をもろ浴びたことで、それどころではなくなつてしまつていたのだ。

「ふう……何とか倒せたな……弟を救つてくれてありがとな。

「当然のこととしたまでですよ。」

「まったく……アンタにはいつもひやひやせられるわ……」

はあ……つとため息をつく美琴……

そのまま親父こと”白ひげ”の方を見る。

見た限り、原作よりずうーーーっと調子がいい彼……どうやら余程のことがない限り”新世界”と一緒に帰れそうだ。

海軍は戦意消失している人たちも結構いるし……。

このまま何事も起らなければいい……美琴はそう思っていた……

## 第25話 騎士道精神つてカッコイイ氣がするナビめんどくさい（後書き）

～オリキャラ紹介～

えっと…今回登場したメスヘルの紹介です。

・メスヘル

所属 海軍本部中将アイズ直属部隊

階級 海軍本部大佐

性別 男

悪魔の実 ”マキュマキュの実”

……マキュマキュといつのは、水銀の宿星・”水星”<sup>マーキュリー</sup>から取りました。

その名の通り水銀を操る能力者です。

当初はロックマンで登場したルーニーズの一人：一キュリーのような技・性格にしようと考えましたが、”騎士道精神”を持たせ

たので、おじやんになりました。

幼少期に誤つて悪魔の実を食べたせいで忌み嫌われ……海軍入隊試験前日についにプツチンして村人全員を殺してしまった……のに、アイズに拾われ海軍に入隊したという少し変わった経歴の持ち主です。

もう少し活躍させてあげたかったかもな……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5727x/>

---

とある魔術の頂上戦争

2011年11月27日16時49分発行